
トランス・トラップ・トリッパーズ！改訂前

観光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トランス・トラップ・トリップス！改訂前

【Nコード】

N7572S

【作者名】

観光

【あらすじ】

現実はそんなに甘くない。

介入したい姉のミコトと介入したくないけど家族を見捨てられない弟のカスト。

二人が存在することですれていく物語。原作という未来を知っていたとしても、世界はそう単純なものではない。良かれと思ったことが本当に実現することなんてないのだと知らなかった少年少女。それでも、いやだからこそ足掻いて足掻いて足掻き続けるトリップス達のお話。

プロローグ（前書き）

全面改稿をさせていただきました。

プロローグ

まだ日もでていないころ。

ピ。ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピ。ピッ！

耳元の時計から聞き慣れた電子音が鳴り響くと共に、時計の主人はゆっくりと眼を開ける。

規則正しい生活を送っているので俺に眠気は無い。

鳴り響く轟音の中、いまだ起きない少女に苦笑しながら、布団から出る。

「姉ちゃん、朝だよ。起きろー」

声をかけても返事は無い。

「ああ、もう。おーきーろーっ！！」

きつとまた夜遅くまで起きていたんだろう。

起きるのはいいが、見た目を裏切る年齢なのだからキッチリとした時間に起きて欲しい。

「姉ちゃん起きろよ？先に下行ってるからな？」

一応声をかけておくが起きてくる事は無いだろう。

そのことのために息を吐きつつ、朝食の用意を始める。

今日の朝食はご飯に大根のお味噌汁、胡瓜の塩づけと焼きジャケだ。

子供が作るものにしてはかなりのものだろう。

鮭を焼き終えるころに二階から姉がおりてきた。眠いのだろう。目がトロンとしている。

「姉ちゃん、起きたらまず顔洗ってきなよ」

「ん……わかった……」

眼をゴシゴシしながら睡魔と戦つてるところが我が姉ながらキュートだ。

実の姉の姿に少しだけ思いをはせていると、洗面台から姉が戻ってきた。

いけないいけない、これでは危険人物のようではないか。自重しなくちゃ。

自分にそう言い聞かせていると、姉と目があつた。

「おはよー、カズト」

「ん、ああ、おはようお姉ちゃん」

これが家の朝の光景。

そろそろ紹介しよう。

我が姉、内田 美琴 (ウチダ ミコト)

類稀なる美貌と才能を持つ、まさに神に愛された女性にして
オ
リ主。

弟こと俺、内田 和人（ウチダ カズト）

双子の弟なのに普通の人。

姉に似ているのは、容姿だけ。かなり劣ってはいるけどな。
そんな俺がいるこの世界は

プロローグ

少し昔のことを話そうか

あれは三年くらい前のことだ。俺がこの異世界にやってきたのは、
ジャンルとしては憑依ってコトになるのかな。

特になんでもない高校生の俺は突然こっちにつれてこられた。病室で目が覚めた当時の俺はかなりあせっていた。

縮んだ体。見覚えのない場所。知らない言葉。見知らぬ人。

俺は怖くて怖くて、布団に閉じこもり一人震えていた。そこに現れたのがお姉ちゃんだ。

俺は唯一日本語の通じるお姉ちゃんにしばらく依存するのだが詳しくは語るまい。

姉に依存する高校生とは……これいかに？

とにかくだ。

このあと少し先にこの世界にきていたお姉ちゃんからここでいろいろなことを聞いた。

姉が神様に会ってオリ主として転生したこと。

ここは元の世界とは別物であること。

もうもとの場所には戻れないこと。

姉がこっちに来たのは一年ほど前のこと。

当時は生きていた両親は爆破テロに巻き込まれて死んでしまっていること。

いろいろなことを聞いた。

それが三年前。

あまりにも過酷過ぎる環境に四苦八苦したのは遠い思い出。

その内容に一喜一憂しながらも俺はだんだんと覚悟を決めた。

俺も男だ。

漫画のような内容の状況にはあこがれる。

どうせおまけだ。肝心なことは姉ちゃんがやるさ。やることもたいしたことじゃないだろう。

言っちゃ悪いがラスボス戦は姉任せになる。

俺はそこらの雑魚なぎたおして、サブにもならないようなキャラとしてここは俺に任せろっとかやりたい。

だが残念なことにそんな適当にできるほど世界は甘くない。

戦いというやつはやったことのない素人が手を出すと痛い目を見るのが普通なのだから。

現に今だってそうだ。

目の前にいる男。こいつにはいつだって煮え湯を飲まされ続けている。

保護者はえらく強くて何度も何度も叩きのめされたものだ。

おかげで接近戦の基礎は出来上がったと思う……が……いまなお勝ったことがない。

転生特典の能力使っても勝てない化け物の名前は 高町士郎。

ゆっくりと士郎の状態がゆれる。

まるで風に揺れる草のようにふらっと流れた瞬間 鈍い剣線が俺を襲う。

まるで呼び動作を読ませない横なぎに振るわれた小太刀を身を伏せることで回避する。

しかし後先を考えない回避に躊躇ない蹴りが襲いかかる。

とっさに腕を交差させ急所を守るが、若干12の体は軽々と吹き飛ばされる。

受け身をとるも、その衝撃をすべて逃すことはできない。

体内を駆け巡る衝撃は肺から酸素を吹き飛ばす。

「かはっ……」

一種の呼吸困難に陥り、体がいうこときかなくなる。蹴りを見舞った男は、そのわずかな時間にこっちまでの距離を詰める。

俺は体勢を立て直そうとするが

「遅い」

男の放った左の一閃に切り伏せられ、もう一度吹き飛び壁に叩きつけられた。

「ツツ!!」

あまりの激痛に悲鳴をあげそうになるが、こらえる。痛む体を悲鳴を意図的に無視し立ち上がり、男を睨む。

わずか三合。

それだけで満身創痍になってしまった。

それを行った男　高町士郎　は未だ傷一つない。

化け物か、こいつは。

そう心のなかで悪態をつく。

事実、対峙するだけでチクチクとさすような威圧感を感じる。威風堂々と立つさまは歴戦の戦士を彷彿とさせる。その双眸に宿る殺気で体が硬くなるのがわかる。

このままではいけない。

体に渴を入れようとしたその時、なんの予備動作もなく、フツと士郎の体が視界から消える。

神速かつ!!

脳のリミッターを外すことで限界を超えた速度を生み出す御神流の奥義の一つ。熟練の戦士が使えばその速度は常人に見切れるものではない。

自らの直感が鳴らす警鐘に従い、右側に飛ぶ。わずかに遅れて風を切る音が聞こえた。

「ほう…これをよけるか……」

そこには小太刀を振り切った体勢の士郎が。

「だが…後先を考えない行動は」

士郎が再び消える。

さっきは見えなかったが、今度はかすんで見える。低く飛ぶ燕のように、その表現がいちばん近い。

「感心できんぞ!!」

だが、見えるのならやりようはある。

俺は構えた姿勢から少しだけ切っ先を下げる。

そしてそのまままっすぐと突く!

肩から肘、拳までの形を極力崩さずにつくことで、相手にとって事前動作が察知することが非常に困難となる。

しかし士郎はこれを半歩横へずれることで、いとも容易くひらりとかわす。

かわしながら右の小太刀を振りかぶり

「しっ！」

閃光とかけた一撃を振り下ろした。

「つう〜っ！！」

俺は頭部へと放たれた一撃の激痛に頭を抱える。

「くっそ、全然歯がたたねえ」

士郎が会いに来るたびに行う模擬戦だが、何もできなかつた。

姉のミコトはオリ主としての特殊能力のおかげである程度は拮抗できるが、俺は能力などというものなどないので、地道に鍛えるしかないのだが一向に進歩がない。

「それでもないぞ、咄嗟に回避することにかけてはなかなか筋がい

い。だが、後先を考えないのはいただけないな。いつも言っているが、次にどうするかを読むことは戦闘ではとても大事だぞ。回避はできるようになったんだから、成長はしているよ」

「いや、回避だけ褒められても…なあ」

回避に関して優れているのは、直感による部分が大きいので褒められてもあまりうれしくない。

転生してから鋭くなった直感のおかげかこういう身近な危険についてなんとなく対処方がわかるのだ。

回避不可能である攻撃を察知できるのは戦闘で非常に役立つ。

まあ自分がその危険を回避できるのであればの話だが……

「ほかに褒めるところがないわけではないが、まだまだ熟練度が足りないな。特にあの突きとかだな。あれは察知が難しいが威力が乗らない剣だから、連続して使うことで真価を発揮する。刹那の切り合いでは攻撃面積の大きい振り下ろしのほうが避けにくかったな」

「でも、振り下ろしは動作が大きいから簡単に剣筋読まれるし……」

「違うぞ。避けられないにこしたことはあるが、避けられた後にどうするかが重要なんだ。まあそのあたりは次までの課題だな。よく考えておくように。ほかにも」

模擬戦用の小太刀をしまいながら今回の戦闘の批評を下していく。こういったところに士郎は容赦がない。それでも次こそはと思えるのは、士郎の育て方がいいからか。

一撃入れることは当分ないだろうが、一歩ずつ進んでいるのは確かなのだ。

こうして士郎に戦闘訓練を頼んで早数年。

物語の登場人物の一人である士郎とこうして交流を深めているのは一種の強制力が働いているからなのかは、わからない。

……思い返せば士郎さんとの付き合いも奇妙なものだ。

聞いた話によれば五年前の両親が死んだ日にさかのぼる。

父さんは士郎さんと士郎さんが護衛していた人とは長年の友人だったそう、ある日パーティー会場で面会していたそう。

しかしそこを狙った爆破テロに巻き込まれ父さんは死んだ。

正確には、ボディガードである士郎さんをかばって。

詳しい状況は知らない。

ただそのとき父さんは士郎さんに子供と妻のことを頼むと遺言を残し、士郎さんはそれを了承した。

そのときから士郎さんは家をよく気にかけてくれるようになった。

家はそこその富豪だ。

昼ドラじゃないけど父さんが死んでからは遺産目当てのやつらがたくさん来た。

母さんはそうだったのものを一手に引き受け、心を病んで、ある日ポツクリと逝った。

そうして当時七歳の俺達の周りには醜い大人たちだけになった。

どんだんともっていかれる遺産。

もう転生を完了していた姉がいくら訴えかけようとしてもしょうが所詮七歳の子供。

止めることなどできはしない。

だけど士郎さんだけは味方になってくれた。

遺産の管理から、親戚の連中の相手までを一手に引き受け俺達を守

つてくれた。
起動に乗り始めた喫茶店と、まだ幼いこどもがいたのにも関わらずだ。

それから俺は、たまに来る土郎さんに頼んで戦闘訓練を頼んだ。
俺達を直接狙うやつがいるかもしれないからだ。

もちろん子供が大人に勝てるわけがない。だがこちらには土郎さんという達人がいる。ならばそこから学ぶしかない。

俺たちが体を鍛え上げ、不意をつけば勝ち目はあるはずだ。
それゆえの戦闘訓練。

最初は反対されたが、何度も頼みこんで教えてもらうことになったのだ。

数年たつても、三合と持たないのだが……

「いつになったら勝てるのやら……」

「あと五年は修行して来い」

「手厳しい」

本当に勝てる気がしないのが嫌なところだ。

「それで、あの話を受けてくれる気になったかい？」

「それは後で姉ちゃんに聞いてくれ……」

……最近、喫茶店が軌道に乗り余裕ができたのか、俺達を日本に引き取ろうとしているらしい。

俺としては一軒家に子供二人で暮らすのは厳しいので、この話には

乗り気なのだが、姉には姉の考えがあるらしく原作が始まるまではなるべく介入したくないらしい。

……こうして士郎さんが元気に暮らしているだけでもかなりの違いなので意味がないと思うんだけどな。

そうしてみるか、と呟きながら家の中へと士郎は入っていく。

「はあ……………」

姿が見えなくなると、息を吐き、仰向けに倒れる。

何度も言っているが、一度も勝てないのは悔しいのだ。

俺はその右手を振り、ウィンドウを表示させる。

軽快な効果音とともに手のひらの下に半透明のメニューが表示される。

右半分には俺の体についての詳細情報とアイテムとして登録し何処とも知れない場所の保存してある道具一覧。

左側にはHPとEXP。それに筋力と俊敏、防御と魔力の数値が描かれている。

今回の模擬戦により少量の経験値が増加していた。

このオンラインゲームのステータス画面のようなものが俺と姉ちゃんステータス・コントロールの能力だ。

能力は、レベルUPごとにもらえるポイントを割り振り自らのステータスを強化するもの。

オンラインゲームのステ振りのようなものだと思ってくれてかまわない。

基本的に画面を出すことで、ステータスを振ったり、習熟度の確認ができるようになっていた。

HPとMPに関してだけは意識して視界の上側をみると表示されるようになっていた。

カズトは五年もの歳月をかけ、19まで上げることができた。

その際に手に入れたポイントは俊敏：防御：魔力 \parallel 7：2：1となっている。

……だつてほら、何よりも早さが足りない！ とかやってみたくね？

五年もかけてこの程度かよ。と思わなくもないが、どうにも訓練だけだとこの程度なのか。

でもやっぱり命をかけた戦闘はご遠慮したいなあ……

ついでに言えばこの能力にはちょっとしたおまけがあった。

それは 特殊能力。

とは言ったものの、俺はそんなものないんだけどね。

実は姉ちゃんは転生する直前に『神様』って奴にあつたらしい。

詳しいことは圧倒的すぎて覚えてないとか。

とにかく神様に会った姉ちゃんはオンラインゲーム風の能力と共に特殊能力をもらった。

それが 《電撃使い》

こと電気に関する絶対支配権を保有するスキルだ。

あんまり詳しいことは知らないけど、姉ちゃんいわく……私は落雷でも傷一つできないわ。とのことだ。

結構応用も効くので、俺も重宝している。

さらに言うと、姉ちゃんはある程度基礎の魔法も使える。よくわからないが知識だけはあるらしい。

神様の粹なサービスとっていただけ、どうせなら俺にもくれよ。

……ああ、ほんと。特殊能力なしのトリッパーでどうよ。

数日後

イギリスからの帰りの飛行機のなかで、高町士郎はいつもよりもずつと上機嫌だった。

いつもであれば周りにどんよりした空気をふりまき、隣の席の人は嫌そうな眼を向けるのがお決まりのパターンだったが、今の士郎はむしろ笑顔をふりまき周りの淑女たちを魅了していた。

以前までと違うその笑顔の理由はここ数年通っていたカズト達のことだ。

学生からの友人である彼の父に命を助けられてから早5年。
あのとき裏稼業から足をあらい、喫茶店経営に手を出しつつも彼らの面倒を見てきた。

妻と子を……頼む……

最後まで自分の家族を心配して逝った親友の遺言の通り、面倒をみるつもりではあった。

だが喫茶店経営を始めてまだ間もないころということでも忙しかったということもあるだろう。

士郎は残された家族の方へあまり注意を払っていなかった。

親友の妻も学生の頃からの知り合いで、彼女は美しく聡明な女性だと知っていた。だから彼女なら大丈夫だという考えがあったことは否定しない。

しかしそれは甘かった。

経営が少し落ち着いたころ、その妻から手紙を受けて愕然とした。そして親友の家族にこれ以上の絶望を与えようとする神を呪った。なぜこんなにもあの家族を苦しめるのだと。

私はもう長くありません。

手紙には涙の後と一緒に、自分が長くないこと、遺産を食いつぶさうとする親類、そして残してしまう子について書いてあった。

せめて二人には幸せになって欲しい。残せるものは少ないけれど、私が確かにあなたたちを愛していたことを伝えてください。

親友が自分をかばって死んだとき確かに誓ったはずだ。

彼女たちを守ると。

……だがこの様はなんだ。なぜもつと彼女たちに気を配らなかったのか？ もつと彼女たちを見ていれば少なくとも親友の妻が死ぬことなんて無かった。

士郎はその手紙を受け取り、すぐさまイギリスへとんだ。
するとどうだ？

親友の妻が急性で死に、その葬式の喪主をわずか九歳の少女が勤めているではないか。

さらに彼女の弟は現在、原因不明の病で死のふちにいる？

彼女はその双眸に暗い光をともし、殺さんばかりの目で親族を見ている。

それをみて悟った。

……これが俺の罪か。親友の頼みを、しっかりと聞かなかった俺への。

今からではとうに遅い。

だがそれでも投げ出していいことにはならない。

士郎はそれを見てすぐに、遺産を巻き上げようとする人間を説得、時に脅し、または昔の伝を使って妨害を始めた。

幸い喫茶店はある程度落ち着いていたし、家族も賛同してくれたおかげでスムーズには行えた。

まだ小さいなにはあまりかまってやれなかったが、それでも士郎は二人を幸せにしてやりたかった。

そして二人は平穩に暮らせている。

何度もここへきて触れ合ううちに、今では娘と息子のようになっている。

特にカズトは御神流の特訓をさせているせいか、思い入れも深い。

だから日本の家族にも会わせたい。

士郎はそう思いこうして何度も日本に来るように誘っていたのだ。そしてその努力がついに実って、とうとうOKもらえたのだ。

今度こそは！ 今度こそはOKを貰って日本へ連れて行こう！

そう意気込むことはもう無い。そんな記憶は遙か彼方へ投げ捨てて今を全力で満喫していた。

そうやって士郎は飛行機の中でなんどもOKをもらえたときのことを飽きずに何度も思い出して悦に浸るのだった。

プロフィール(後書き)

現在のカズトのステータス。

LV	19		
EXP	16690		
HP	6000	(2900 + 3100)	*初期値100
0 + LV × 100 + DEX × 50			
MP	3850	(2900 + 950)	*初期値1000
+ LV × 100 + INT × 50			
STR	43	(24 + 0)	*初期値5 + LV ×
1 + ポイント			
			主に筋力に影響
DEX	62	(24 + 38)	*初期値5 + LV
× 1 + ポイント			
			主に防御に影響
LEG	157	(24 + 133)	*初期値5 + L
V × 1 + ポイント			
			主に俊敏に影響
INT	24	(24 + 19)	*初期値5 + L
V × 1 + ポイント			
			主に魔力に影響

特殊能力

なし。

第一話

「行くわよ！！ 我が魂のふるさと、日本へ！！」

……今となつては懐かしい日本語を叫びながら、ドアを蹴破つてくるのは親愛なる姉。

精神年齢は20を超えているんだから、落ち着いて欲しいと思う。

「お姉ちゃん、毎回ドアをけりながら入ってくるのはやめてくれ！ オーダーメイドだから高いんだぞ！ それに前に来た土郎さんには日本に行くのは9月からとかつて言つてただろ？ いきなり予定変えるなんてどうしたんだよ……」

いつもならば肩を落として帰る土郎さんに罪悪感がヤバかったのだが、この前とうとう姉ちゃんが折れた。

3年ものマゾプレイに徹した土郎さんに感嘆の拍手を送り届けたのはつい3か月前のことだ。

「だって、土郎さんについていたら絶対なのは紹介されるでしょ？ 私はね、原作の名シーンをみてうっとりしたいの。わかる？ だからなるべく話の流れを変えないために接触は控えるべきなのよ！ とはいえ無印の名シーンを見ないのは惜しい！ だからこそ、今行くのよ！」

いや、そんな理由かよ。

もつとこう、このタイミングじゃないプレシアは救えない！ みたいな理由がよかったよ。

「理由が不純すぎるぞ」

「そうかしら？ でも仮にそうだとしても不純が100%なら、それは純粹だと思うんだけど」

「ばかやろう。いいこといったつもりかもしれないが不純が100%ならそれはすでに汚物だ。消毒されるぞ！」

「私は言いたい。モヒカンよ、貴様も汚物じゃないか、と」

「それは公然の秘密さ、お姉ちゃん」

カズトは小さくため息をつく、とりあえず話しを元に戻していく。

「今は日本でいう四月前だろ？ そんなに始めるの早かったっけ？」

「さあ？ 少なくとも原作が始まったのがいつかは詳しく明記されて無かったと思う。だ・か・ら、早めに行って準備しておくのよ」

「住むところはどつするつもりだよ」

「ふふん、万事抜かりは無いわ。適当な空き家を使えばいいのよ」

「明らかに不法侵入だろ。それに鍵はどうすんだよ。壊したら明らかにバレんだろ」

「大丈夫。私のスキルを忘れたの？」

うげつと呻き、カズトは思わず頭を抱えて座り込む。

別に日本に行くことは反対では無い、むしろ行きたい。

夜に子供が一人出歩いてても安全に帰ってこれるビバ日本にはぜひ行きたい

が、不法侵入は犯罪だ。犯罪は避けたい。

いくらアニメの世界といえど、ここに住んで生きている以上新しい現実だ。

もう一度転生できる保障が無い以上、前科は避けたい。

繰り返そう、前科はいやだ。

が、ここまでウキウキ気分で準備している姉を見ると、一人でも日本に行ってしまうそうだ。

目の前の選択肢は二つ。

付いて行くか、行かないか。

行かないならば、俺は原作に巻き込まれずに暮らすことになる。

財産はそこそこあるから、普通に働き、結婚して終わり。

付いて行くならば、犯罪に加担することに。

もし、警察に捕まったら前科持ちに。

つかまらなければ原作にかかわり波乱万丈の人生へ。

でも猪突猛進ぎみな姉ちゃんのことだから捕まっても魔法で逃げればいいや、と思ってるかもしれない。

……いや、思ってるだろうなあ

地球で前科があっても、管理局に行けば大丈夫。なんて考えてそう

「なに悩んでんのよ。一生に一度ないようなことになってんだから、楽しく行きましょうよ」

「むしろ俺からすると、なぜ簡単に犯罪という選択肢が選べるのか知りたい」

「気分」

第一話

あのよくわからない問答からはや3日。
カズトは海鳴市の空き家の前にいた。
狙う家は町から少し離れたところにある、売りにでている中古のも

のになった。

マンションならば管理人が掃除に来るが、一軒家ならその心配も少ない。

長期旅行中の家とかがあればいいんだが、そんなものが都合よく見つかるはずもなく無難に選んだのだ。

カズトも結局ついてきていた。

やはり見知らぬ土地に一人っていうのもさびしいし、ミコトがもしも大けがを負ったらと思うと気が気ではられない。

「なあ、ほんとにやんの？」

未だにやめるように言うカズト。

認めないが、基本的にカズトはビビリである。

「いざつてときにしり込みするなんて情けないわね。男なら胸張ってなさい！」

「犯罪行為に胸を張るようじゃ終わりだよ、姉ちゃん！」

「だから見つかんきゃいいのよ！ 一軒家なんだから誰も来ないし見つからないんだから大丈夫よ！」

「いや、ここ売りに出てるから！ 不動産がお客に見たいって言われたら普通にくるよ！？ あのスキルで開くとは限らないし……やっぱり士郎さんところに」

「ああもう、あっちで黙ってなさい！」

何度もそれとなくビビリなやつがやめようという時は、基本的に自

分は反対だと思っているときだ。
しかしそんなカズトの内面など全く考えずに、ミコトは左手をかか
げ魔力をくみ出す。

「あつ、ちよつ、ここ住宅地だ」

カズトが、だから魔法は使うなど言おうとするも、間に合わず。
左手を振り下ろしながら、ミコトは意味をもつ言葉を放つ。

「フォトンバレット!!」

ミコトの手の前に青白い魔法陣が作られると魔力が圧縮された弾が
生成。僅かな一瞬で作り上げられたそれはタイムラグもなしにカズ
トの腹部へ突き刺さった。

「ふべらっ!!」

いいところに入ったのか、カズトは痛みでのたうち回る。

「~~~~ツツ!!」

反対にミコトは汗をぬぐう動作をする。

こころなしかスッキリした表情をしてなくもない。

ミコトはのたうち回るカズトを一瞥したあとドアへと向き直り、

「ていや!!」

彼女の特殊スキルである《電撃使い》を発動させる。

電気によって生み出された磁力に影響されて鉄できた鉤がゆっくり

と動き始め……カチャンと音がかすかに響く。

ミコトは恐る恐るドアノブに手を出し、まわすと

「やったー！！ ほらみなさい。ちゃんと開くわよ！」

嬉々とした表情で言うと、ミコトは入っていく。

「これで俺も犯罪者……いや、もう何も言うまい」

のた打ち回っていたカズトも立ち上がり、広い青空を眺めたあと家の中へはいつていく。

もう青空のしたを気ままに歩けないのか、と若干誇大妄想が入った思考かも知れないが、気分はそんなかんじである。

さらば平穩、フォーエバー！

何もない玄関で靴を脱ぎ、奥へと進むと、リビングの真ん中でミコトははしゃぎまわって転がっていた。

……いやいや。童心に帰りすぎだろ。

少し呆れながらカズトはぱっと周囲を確認するが特に問題はなさそうだった。

むしろ建築年数の割りに綺麗だ。

前に住んでいた人の手入れがよかったのだろう。

壁が黒ずんでいるわけでも無いし、動物臭さも無い。

四隅にカビも生えていない。

ごく普通の空き家だった。

未だミコトはごろごろと転がっている。

……ちょっと楽しそうだ。俺もしてみようかな。

「おーい、カズト？」

いつの間にか、十分に広い家の床に満足したのか、立ち上がったミコトがカズトに声をかける。
しかし何の反応もないカズトの前でミコトが手を振るも、思考の海に潜ったカズトは反応しない。

……でもなあ、さすがに恥ずかしいというか。

ミコトははあ、と息を吐く。

「とうとうボケちゃった？」

もう、家の弟は子供なんだから。

と小さく嘆息するが、

「姉ちゃんと一緒にすんなー!!」

一瞬で我に返らざるおえなかったカズトから渾身のチョップが入った。

「さてと、これで一様住む場所の確保は終わったわけだけど……これからどうする?」

軽く部屋の掃除し、二人でまったりと何も無いリビングに転がりながら話をする。

「そうねえ……とりあえずいつ始まるかわかんないし、経験値を頑張って集めて……ってこれじゃイギリスにいたときと変わんないわね」

「俺もそう思う。でもそれしかない……かな? 原作が始まれば忙しくなるし」

「やっぱり? とりあえずはしばらくお世話になるここをもつちよつと住みやすい環境にしましょうか」

「賛成! まずは何持ってるか確認しよっか」

二人で右腕を振り、現状を確認するためにステータスを開く。

右側のアイテム欄の収納しているものを確認するためだ。

一覧として、アイテム画面のようなものが現れる。

こういう所がオンラインゲームを模しているとよくわかるところだ。

「やっぱ洋服と武器に金だけかぁ。そっちは?」

「加えてお菓子つてところよ」

「だよな。使えそうなものはなし、と」

記憶能力はいいので持ち物は覚えていたが、もう一度見ればなにか役立つものがあるかも知れないと思ったがそんなことはなく、現実がそこにはあるだけだ。

「どうするかな……まずは寝るところだよな……よしっ、姉ちゃんホームセンター行くぞ！」

意気込んでアイテム画面から顔をあげる。

なぜか割りイカを食べながら持ち物を確認していたミコトも顔を上げる。

「そうね。寝袋とガスコンロ、調理器具一式は必須だし、他にもいいのがあるかもしれないから私もそこでいいと思うわ」

「ん。じゃ行くか」

結局、生活するのに必要なものを一式そろえるのに夕方までかかった。

カズトは今後のことを考えて食料品を買いに町に出ていた。

いろいろと物入りになったけれど、こっちはそのあたりも予想してお金を少し多めに用意してある。

カズトが自ら手に入れたお金ではないからこそ、なんとなくこういったことに使うことに多少罪悪感がついる。

しかしミコトとしては使うもんは使う主義である。

せっかくあるのだし、これからも自分たち以外に使う人間なんぞいない。ならば使ってなんぼ。ためらいのないすがすがしい笑顔であった。

……そうはいつでもなあ。

カズトとしては、やっぱり使いにくい。

二つの商品があった時に、なるべく安いもので済ませようとしているところに、そのあたりの心遣いが見て取れた。

緑野菜のコーナーを物色しながら、今日の夜の献立を考えていく。

……せっかく日本に来たんだし、和食でせめるか。

やっぱりお味噌汁とご飯は外せない。

よだれが口に溜まるのを自覚する。

カズトは元々料理はそんなに上手くなかったが、イギリスでの生活

でそうとう上手くなった。

というよりも飽食の時代に生まれたカズトは致命的なまでにイギリス料理が合わなかった。

そしてミコトは日本人の体でイギリス料理を食べたらすぐに太ると気がつき食べようとしなかった。

必然的に彼らは自分で作るしかなかったのだ。

カズトはなるべく自分にあつた料理を作ること心掛けていた。

ネット通販で料理本を買いあさり、練習し、やっとの思いでここまで駆け上ったのだ。

そして久しぶりの日本。

彼が少々料理に熱を込めてしまふのは仕方がない。

「さてと、野菜はこのくらいで……味噌はどれにしようかなあ」と

嬉々とした笑顔でカズトは歩く。

周りは楽しそうにしている肉体年齢12のカズトを微笑ましく見守っているが、そんなことにも気がつかずに、味噌が置いてあるコーナーへと歩いた。

「おおっ！」

みれば実に7種類以上の味噌があるではないか。

やっぱり味噌は日本の心。メーカーごとに味も違うからたくさん種類にあふれている。

一つ一つを手にとって眺めて楽しむ。

ちよっと傍目から見たら危ないかもなあ、なんて思っても手は止めない。

……ああ、ねこまんまして食べたい。思いつきり食べたい。

はつきりいってそれしかカズトは考えていない。

結局どれにしようかと悩み、かつて前世でも使っていた 宮のものに決めた。

棚の端っこの方にあるそれに手を伸ばすと、横から手が出てきた。

「ん？」

狙っていたものが同じということもあって、思わず下手人の顔を見る。

メツチャ美人だった。

彼女は肩甲骨あたりまで伸びた黒髪をひるがえして、その特徴的な少しだけ赤みを帯びた瞳を俺に向けてくる。

かなり整った美人さん。ちょっと日本人離れしている。

「どうぞぞ？」

……俺と同年代くらいだろうか。

大して身長に差はないけれど、その凜とした雰囲気年上のようにも見せている。

その彼女から直接味噌を渡される。思わず口ごもりながらも受け取ってしまった。

……美人は姉ちゃんで見慣れたと思ってたんだけど……

はつきり言って彼女はカズトの視点からみても、最高クラスだ。テレビに出させて自慢したくなるような容姿をしている。

思わずボーっとしてしまっていると、彼女はそのままレジの方へと歩いていく。

カズトも、自分の買うものが特に無いことに気がつくのと、彼女の後を追うようにレジへと歩いた。

彼女の方が先に歩いていたので途中見失う。

ちよっと残念だな、と思うのは男の性か。

レジを通しながら、笑みを張り付けた店員から読み上げられる金額を財布から出す。

諭吉が行ってしまった。

もう少し減らすべきだったか、とちよっと落ち込みつつさっさと袋詰めしてしまう。

この辺はもう手慣れたものだ。

さっさと荷物を作ってデパートから出る。

ミコトにはまた違うものを買ってきてもらっているので別行動。すこし心細く感じる自分の心を叱咤し、外へ出ると雨が降っていた。

「げえ……雨かよ」

周りの人も地下から出てきた人はそんなことをいいそうな顔をして雨を見ている。

……どうしようかな。

今の手持ちの荷物は特に濡れてはだめというわけではない。

しっかりと口も閉めてあるから、万が一もないと思う。しかしカズトの体は別だ。

カズトの体を長時間雨に濡らせば風邪をひくのは目に見えている・

……いつそ迎えに来てもらうか。

一応もつとも初歩の念話はマスターしている。

カズトはミコトに連絡をかける。

が、つながらない。

ならばと思つて、さっき契約した携帯電話を使おうと開くが、まだ連絡先を交換してなかった。

……いつそ走つて帰るかな。

と考えてから、そう言えばアイテム欄に傘を入れてあったのを思い出した。

以前雨に振られてから常に持ち歩いているものだ。すぐさま人に見えないようにウィンドウを不可視状態で呼び出して傘を取り出す。

……うむ、備えあれば憂いなし。

カズトがそう思っていると、隣に人が来た。

何気なく目を向けると、さっきの美人さんだった。

偶然つてのもあるんだな、と一人運を噛み締める。

が、よくよく考えたら自分の精神年齢は20近いのに、美少女にありがたみを感じるのってどうだろう。

ちよつと自分の思考に絶望した。俺はロリコンじゃない。

でもやっぱり美少女は目の保養です。
そつと横目で流し見た。

彼女は赤みがかった目を空に向けていた。

「……………やまないか」

出てきた言葉に驚く。

それもそのはず、普通雲を見てその後の天気を予想する女の子はいない。

しかもなぜ彼女が言った言葉が本当のように聞こえるのかもしれない。これがカリスマか。

彼女は溜息を吐くと、雨の中に足を踏み出そうとした。

艶やかな黒髪が舞い、雨粒が彼女に落ちる。

瞬間、思わず彼女の肩を掴んでいた。

「あ、あの……………！」

向こうも驚いたようで、目を丸くしている。

「はい？」

「えっと、これ……………」

カズトはあらかじめ持っていた傘を彼女に渡した。

「……………いいのか？」

話し方がちょっと男っぽい気がした。
けれど彼女にはこの話し方の方があってる気がする。

「ええ。もちろん」

カズトが持っていた傘はこれ一つだが、それでも渡していいと思っ
ていた。

ちょっとした男の子の意地って奴だ。

いくら精神年齢が上でも、女の子にはかっこいいところを見せたい
と思うのは男の常識だ。

困惑した表情でカズトを見ている。

しかしすぐに表情を整えると、微笑ましくこっちを見る。

その大人な対応になぜか敗北感が生まれた。

「ありがとうございます。必ず返します。……あなたの名前は？」

「俺？俺はカズト。内田和人です」

カズトは内心、こうしてご近所とのつながりができたことに小躍り
したいくらいの感動を覚える。

イギリスではあんまり近所との付き合いがなかったからか、友達が
いなかったのだ。

それなのに日本にきた初日にこんな美少女とのつながり。喜ばない
のは嘘だ。

しかし目の前でいきなり踊りだしたら、ちょっとひかれるだろう。
必死で衝動を隠す。

彼女はそんなカズトに気がついたのか、薄く笑っていた。

「ふふ……私は 夜だ^{ヨル}」

……ちょっと、見惚れたのはここだけの秘密にしてあげよう。

第一話（後書き）

能力についての説明。

基本的にはオンラインゲームのステ振り。
書く能力値が表わすものは言わなくてもわかると思うので割愛。
基本的にカズトは全く能力を持っていません。
あくまでオリ主はミコトのほうです。

基本的に戦闘によって蓄積した経験値をもとにレベルが上がるよう
になっている。おそらくこのあたりは神様の趣味。
結果 オリ主努力しましょう。な能力に。
基本的に楽はさせませんとも。

現在のミコトのステータス

LV 32
EXP 122760

HP 4200 (4200 + 0) *初期値1000 +

LV × 100 + DEX × 50

MP 20200 (4200 + 16000) *初期値1

000 + LV × 100 + INT × 50

STR 37 (37 + 0) *初期値5 + LV ×

1 + ポイント 主に筋力に影響

DEX	37	(37 + 0)	*初期値5 + LV x
1 + ポイント		主に防御に影響	
LEG	37	(37 + 0)	*初期値5 + LV x
1 + ポイント		主に俊敏に影響	
INT	375	(37 + 320)	*初期値5 +
LV x 1 + ポイント		主に魔力に影響	

特殊技能

・電撃使い《エレクトリックマスター》：LV5 (482 /)

電気に関係することであるならば絶対支配権を保有する。

このスキルを保有する限り、その身に電気がダメージを与えることはない。

ただしレベルによって、出せる電気量に制限がある。

学園都市第三位である超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴が保有する能力。

その能力の範囲では落雷すら引き起こす、まさに天災規模の能力。

第二話 「八方塞がりとは、このことか」

「だあああああー！ー！ー！！！」

とある管理外世界。

まだ太陽も出始めたころ。

人のような知的生命体のいない星の手がつけられていない草原のなか、カズトの叫び声が響き渡る。

「無理無理むゝゝりゝゝつっ！！」

俊敏度パラメータにものをいわせて、草原を疾風のごとく駆け抜けていく。

逃げるカズトを追うのは、巨大な体躯に二つの首をつけた魔獣。

三つ首ケロベロスによく似た生き物であるオルトロスである。

オルトロスは逃げ回るカズトを獲物と認識し、後方から追いかける。

「ちよつとカズト！！ ちよつとでいいから！！ ほんのちよつとでいいから足止めして！」

「だから無理だつっつてんだろっ」

「何言ってるのよ、あんた前衛使用でしょうが！ さっさと本懐はたしなさいよ！」

……確かに前衛使用にしてある俺としても役目は果たしたい。

後ろを少し振り返る。

全身を使い飛ぶように駆けるオルトロス。その体は縄のような筋肉に包まれている。皮膚の色は深い青、引き締まった体の上に載った野獣のような頭は二つ。

そのどちらからも鋭利な牙が顔をのぞかせている。

俺の頭なんて一飲みできるだろう。

いやその前にあの豪腕でHPが丸ごと吹っ飛ぶだろう。

あらためて考えて血の気が引く。

「ばっかやるっ、俺は俊敏特化の紙使用だ！　というか自分は空中で安全とほいい身分だな、おい！」

ミコトはカズトが全力疾走している間、空を飛び続けているのだ。翼無き身であるオルトロスがミコトを狙うことはない。

……なんで俺だけが命の危険にさらされているんだろう……考える
と腹が立ってきた。

「ああもう！　このままじゃいつか食われる。姉ちゃん！　十秒後にあいつの足を止める！」

HPが減るわけではないが、運動していれば疲れるのは条理。姉が言うには、隠しステにスタミナでもあるんじゃないか、このこ
とらしいが。

ともかくこのままじゃ速度を落としていつて最後は食われる。

どうやらこのオルトロスは電気に強い耐性があるらしく姉の主力で

ある電撃があまり効かないのだ。
他の魔法でオルトロスに聞きそうなのは溜めに溜めた砲撃魔法くらいしかない。

しかしそのためには詠唱が必要なわけで……

カズトは急激に制動をかけ速度を落す。

オルトロスが猛スピードで突っ込んでくるが、それを瞬動で左に回避する。

首はカズトを追うも、体は慣性の法則により、前へと引つ張られる。オルトロスはそのまますすぐ進み、速度を落さず半円を描きながらもう一度突っ込んでくる。

……オルトロスの巨体と今の速度で突っ込まれば俺の防御じゃ死ぬ。

あくまで突っ込まれればの話だか。

わざわざバカ正直に食らってやる気もない。

これからすることは一発逆転の方法だ。

ゆえに失敗すればそれなりのペナルティがる。

今回は死ぬかもしれない。

緊張した体に反応し、心臓の鼓動は際限を知らず、何処までも高くなっていく。

どこまでも時間が引き伸ばされる感覚と共に、オルトロスが突っ込んでくる。

カズトは意を決すると、急激に振り返りつつ、オルトロスの懐へ足を踏み出し手を伸ばす。

瞬間、オルトロスとの距離が一気に縮む。時間が圧縮されていく。

「やられて」

獲物が飛んできたときと笑みを浮かべるオルトロス。

突然のことに奴は驚きもせず鋭い爪を振りおろそうとするが、所詮は獣。

あまりにもばればれの攻撃範囲だ。

カズトは冷静に、冷や汗がたつぷりな顔でニヤリと笑いながら躲し右の拳を叩き込む。

「たまるかああああ!!」

まるで巻き戻しをしたかのようにオルトロスが進行方向とは逆に吹き飛んでいく。とんでもない勢いのまま地面にぶつかり、こまのように空中で二転、三転回り、落ちる。

ドスンと、落下音を響かせると同じくして、ミコトの魔法が完成する。

「時間には少し早いわ。まあ、遅れるよりましね」

空を飛ぶ魔法使いの手には光り輝く球がひとつと、周囲の荒れ狂う風。

時折、雷がバチバチと光瞬く。

その様子はさながら嵐のようだ。

「いくわよ!!」

左手の輝く雷球はここにきて最大の大きさへ。

大魔法を使用するとき特有の感覚がミコトの頬に弧を描かせる。

盛大に地面へと叩きつけられる形となったオルトロスは未だ立てない。
それを視界の中心へと収め、弓を引くように腕を胸の前で引き絞る。硬く握り締めた拳の前には雷球が浮き、高速回転を始める。吹き荒れる風の力がまたひとつギアをあげる。

「さあ、これでしめよ　　雷の暴風ヨウイス・テンベスタイス・フルグリエンス!!!」

力ある言葉と共に魔法が開放された。

《電撃使い》の能力とミッド式の砲撃魔法との融合によって生み出されたミコトのオリジナル魔法。
突き出された腕の先で雷球は数十倍の大きさまで拡大する。雷球は周囲の風を巻き込み魔獣へとまっすぐに突き進む。

着弾。

轟音とともに光り輝く光柱が大地に起立した。
圧縮された雷の魔力が地面を焼き、蒸発させる。

ゴクツ、つとあまりにも日常とかけ離れた光景に思わず息を呑む。
同時に魔法の余波がカズトの肌を焼く。
生み出された雷に影響され高温の風が吹き荒れたのだ。
とっさに眼を焼かぬために腕で隠し、余波が収まった頃にどける。

そこには穏やかな草原はなく、だたひとつのクレーターが出来上がっていた。

「うん、上出来」

「いや確かに倒しただろうけど……やりすぎな気もする」

「死ぬよりはましでしょ。それにこれ作ったの何回目よ。いまさら遅いわ」

確かに死ぬよりはましだが……と自分を納得させる。

ふと視線をクレーターに向ければ、五体満足のオルトロスが。

あれだけの規模の魔法を受けていながら死んだ様子はない。

普通ならば肉片も残らないと思うんだが、姉ちゃんの非殺傷設定のおかげだろう。

しばらくは起きないが、障害は残らず一日もたてば狩りもできるようになっていいるはず。

「しつつかし、相変わらず非殺傷ってのはどういう仕組みで動いてるのか分からないよなあ」

「なんども教えたじゃない。いい加減教える方の身にもなってくれる？」

にっこりとなかなか怖い笑顔を向ける姉ちゃん。

さりげなく怖い。

どうにも俺は姉ちゃんが教えてくれる魔法理論が理解できない。姉ちゃんはわかりやすく教えようとしてくれるのだが、高校の勉強よりもはるかに難しい理論の数々に俺は打ちひしがれるしかないのだ。

どうにか術式を暗記して覚えた肉体強化系の魔法で精一杯です。はい。

「まあ、あれだ。俺には向いてなかったんだよ」

「……そういつて諦める男ってかっこ悪いと思うんだけどなあ……」

ジト目で姉ちゃんが俺を見た。

「う……」

思わず、いいんだよ！俺は前衛なんだし！と言いかけたが、別に多彩な魔法ができなくてもいい理由にはならないことに気がついて、慌てて言葉を飲み込む。

一様防御にもステを振ってるから、HPはそれなりに多いが、やっぱり魔法を覚えて防御魔法を充実させた方がいいのか。

いや、でもINTにほとんど振ってないしなあ。

とりあえず俺は話をそらすことにした。

「そういえば今日思ったんだけど、姉ちゃんもずっと飛んでないでちょっとくらい射撃魔法で援護してくれてもよかったですじゃね？」

「そうね。そうするべきだったわね。次からはそうする。で、やっぱり諦める男ってかっこ悪いわよ？」

が、失敗。

「あ……えっと……う〜」

思わずうなる。

姉ちゃんしばらく俺を睨んでいたけど、しばらくすると笑い始めた。

「ごめんごめん。ちよつとからかっただけよ。とりあえず今は広域魔法の習得とLVあげしましょっか」

あれから再びLVあげに勤しんでいた。
いままで場所の関係でそんなに派手なことができなかったからか、
ついやりすぎてしまう。

……いくつクレーターを作る気だろう。

帰りの分の魔力が気になり始めたころ、ふと太陽を探せば真上に来
ていた。

わたしはぐつと腕を引つ張つて硬くなった筋を伸ばす。

「ん〜。遅くなってきたし、そろそろ帰ろうか？」

この世界ではまだ昼過ぎだが、地球に時間を合わせた時計を見れば18時を指している。

未だ成長期の体のために、そろそろ帰ったほうがいい時間だ。

前世よりも身長が伸びてほしいので、体調管理には気をつけているのだ。

「そうすつか」

「カズト？ 今日何日だっけ」

「4月24日だけど」

「じゃあ、もう14日になるのね。カズトはいくつ上がった？」

「11つてところだな。魔獣は経験値がうまい。命の危険がたつぷりだが」

やれやれと、肩をすくめる弟。

転生してから、カズトはため息や皮肉が多くなった気がする。

そんなに落ち込むことが多いとは思わないんだけど、カズトにはカズトの考えがある。

わたしは魔獣と戦うことは怖くないし、むしろ楽しいとさえ考えている。

前世なら絶対に体験できないようなたくさんの出来事。

それを経験できているわたしは恵まれているのだろう。

たしかに命の危険が付きまとう戦いになってからは経験値の所得量が一気に倍増した。
今まではちまちまとしか上がらなかったレベルもかなりの速さで上がるようになってる。
とはいっても自分たちの戦闘技術そのものも上げなきゃいけないから、やることは今までと大して変わらないけど。

それは横においておくとして、後から来たせいでレベルが低いのは仕方ないが、ここまでレベルが上がる速度が違うのは少しイラツとくる。

同じ経験地をもらっているはずなのに、少しのレベル差でここまで上がり方が違うとは……

「いいわね、そんなにあがって。私なんか5しか上がってないわよ。オンラインゲームを模しているからか、一気に上がりにくくなるわ」

「特殊スキルあるだけ俺よりいいと思う」

姉ちゃんだけ能力ありなんて間違ってるだろ、とぼやくカズト。そのことに思わず苦笑してしまう。

こっちとしては能力をいかせるようなステータスにしなきゃいけないからカズトみたいに能力値を自由に選択できない。

カズトの自由に選択していくのは楽しそうだが、これは持てる者の余裕というやつだろうか。

「落ち込んでないで、帰るわよ。ほら、元気出して。今日はシチュ
ーだから」

シチューと聞いてすこし顔をほころばせるカズト。

……「こつこつとこころはかわいい。」

精神年齢は二十を超えたのにこういう所はまだまだ子供だな。

カズトの笑顔につられこっちも頬を緩める。

しかしそれを悟られるのもいやなので、あさつての方向を向きながら、地面に魔法陣を展開。

魔力を注いでいく。

徐々に強くなる光。

ぼんやりとした光は、目にさすような光となり、魔法陣への魔力供給が一定を超え安定すると薄い青色になる。

異なる次元間を飛び、行き来することを可能とする転移魔法。

本来は物理学やら、魔法学なければ使えないようだが、そこはオリ主のいいところ。

始めから頭の中に基礎理論が入っていた。

……あくまで理論だけだったが。

初めて使ったとき、適当に飛んだらある次元世界のはるか上空でビッたのはいい思い出だ。

飛行魔法を使えないカズトはひもなしバンジーだったけどね。

「よし、準備完了。行こっか！」

振り返ればもうすでに魔法陣の中に入っているカズト。

しっかりと確認した後、魔法陣を発動させる。

まばゆいばかりの光が噴出しわたしとカズトを包み、空へ昇って行った。

第二話 「八方塞がりとは、このことか」

なぜ俺たちが原作に介入せずにLV上げに盛を出しているのか。
それは4月9日までさかのぼる。

このとき俺たちは二人してテーブルの上で頭を抱えていた。

「なあなあ姉ちゃん」

「なんだい弟」

「今ジュエルシード何個目だと思っつ？」

「さあ？　むしろ私が教えてほしいわ」

このとき俺たちはまだ原作が始まっているか分からなかったのだ。始まっているのは分かっていたがいつから始まっていたのかわからなかったのだ。

もし、近所の掲示板で海鳴りの道路が破壊されていると書かれてなければ気が付きもしなかっただろう。

「最大の誤算は俺たちに

」

「まさか私たちに

」

「念話が聞こえないとは思わなかった」

二人して一斉に溜息をつく。

俺たちとしては、ユーノ君の無差別爆撃改め念話がくるのを契機に活動を開始しようとしていたのだが、これが聞こえなかったのだ。魔力値の低い俺は別としても、姉ちゃんは聞こえると思っていたのだ。

けれども待てど暮らせど音沙汰なし。

なぜ聞こえないのか。

……謎だ。

なのはとユーノが接触してから二人だけの念話に切り替えたとしても、最初の無差別念話くらいは届くと思っていたのだが、それがない。

もしかして原作と違うことでも起きたのか……と思ったがそれ以上

の行動を起こすわけにもいかなかった。

原作が開始されているかを確かめる方法としてもっとも簡単なものは、高町なのはの近くにフェレットもどきがいるか否かである。しかしこれを確認するのが存外難しい。

翠屋と高町家を監視するという案が出たが、即刻却下。

あそこは土郎が怪我をしなかったことにより、原作以上の人外魔境となっているのだ。

監視中に気がつけば首に刀が……なんて状況はイヤだ。

では学校はどうか？

それも無理だった。

なのはが学校にフェレットを持ち込むわけがないし、マルチタスクを用いて日常生活と並行して魔導師の訓練をしている以上、頭の中をのぞく方法がない俺たちに魔法と関わっているかの判別はできない。

夜の探索中はならば？

その場合、家からの監視が不可能な状態なので、町を見て回るときなのはを見つけないといけない。

一応いっておくが、地方都市のひとつとはいえ、海鳴市は結構広い。その中から探すのはよほど運が良くなければ無理だろう。

ヴォルケンリッターとなのはが一度も接触できなかったのは、この広さが原因だ。

とはいえ市である以上かなりの広さを持っているのは当然なのだが。

結局、原作が始まってはいるけど、それを確認することができていないのだ。

そして念話が聞こえないことにより生まれた問題で最も大きいのは結果がいつできるのか分からないことだった。これに尽きる。

基本的にユーノが使用する結界魔法は関係のない人を巻き込まないようにというコンセプトによるものだ。

その判別方法は、安易だと思うが、リンカーコアの有無だろう。なのはしか海鳴市で反応した人がいなかったからできる方法だが、これが厄介極まりない。

コンセプトゆえに、関係のない人には結界があることにすら気がつけない代物。

で、もちろん姉ちゃんと俺はそれに入れるはずだった……場所さえ分かれれば。

そう。結界とは中のものを外へ出さないためにあるのだ。逆に外のものが入れない。

つまり巻き込まれる形なら最初からいるのだから結界に入れる。しかしそんな都合よく俺たちが現場にいるとは限らない。

……姉ちゃんとしては、原作の名シーンが見たい。

が、そのほとんどは結界内で行われるもので、俺たちからすれば、まさしくいつの間にか終わってる。

そもそも俺たち二人とも魔力を感じる範囲がかなり狭いようで、ユーノみたいに遠くで発動したジュエルシードの気配なんてわからん。対策を練るうにも、張られたことに気がつかないんじゃないでしょうもない。

というよりも、誰かに俺たちの活動を邪魔されているとしか思えないくらい全然に原作に絡めない。

「八方塞がりとは、このことか」

「まさかこんなことでつまずくなんて……原作には関わるだけなら簡単って固定観念があったわね。ぬかったわ」

「どうせなら結界かけないで戦闘してくれないかな……」

「ないない」

希望的展望を口にするが、力なく振られる腕で否と返される。

「だよなあ、女の子とお風呂入るのはOK。でも結界は張り忘れない！……ってどんな価値観もってんだよ」

「結界魔法は張れるのに、元の姿に戻れないって明らかにおかしいでしょ。あれは絶対役得（笑）って笑ってるわね」

「汚い。さすがユーノ汚い」

どう考えても解決策がない。
いや解決方法は巻き込まれることだが、生憎そんな幸運カズトたちにはない。

堂々巡りをする会話。

次第にわき道へと逸れていくのも仕方ないかもしれない。

「姉ちゃんさあ、神様ってどんな奴だった？」

「ん〜？」

机の上にあるさきイカをひとつ口に運んだミコトが生返事を返す。

「いや、どんな奴だったか聞いたことなかったし？」

「ああ、そういうこと。そういえばいつてなかったわね。」

また一つさきいかを口に運ぶ。

……どうでもいいが、食うペースが若干俺より速い。

「簡単に言つと……よくわかんない奴よ。」

「やっぱりか。」

あまり反応が良くなかったからか、ミコトが無然とした表情をつくる。

「やっぱりってなによ」

予想と違う反応、乾燥した答えに少しミコトの空気が冷たくなる。それでも兄弟として生きた年数は伊達ではない。二人の間の空気が悪くなるなんてよくあることだ。

カズトは少し不機嫌になったミコトの疑問に簡潔に答えに行く。

……というか、話しているときくらい食うのをやめい。
子供か己は。

「もしかしたらっておもってたんだよ。どうせあんまりよく覚えてないんだろ？」

細めていた目で見ていたミコトがうめく。

「うっ……」

俺の答えはかなり凶星をついていた。

「どうせそつだとおもったよ」

「べ、別に忘れたわけじゃないわよ？ 時間も結構立ってたし……
実際、あれはよくわかんないわ。目の前にしたとき、圧迫感がとんでもなかったしね」

テンパっているのか、手を胸の前でワタワタさせる。

「じー」

ジト目で見つめるカズトの目が暗にいつていた。
本当かよ？ と。

「なによ」

「いやーべつにー」

ブスッと唇を細めるミコト。
こういう時の姉はいじりがいあって気に入っていたカズト。
顔がニヤニヤしている。

「きよ、今日はずいぶん突っかかってくるわね？ 何かあった？」

このままではいけない。

そう判断したミコトは強引に話を変える。

カズトも話を変えようとするミコトの様子がわかってはいたが、あえて話にのる。

いい加減この生産性のない話を終わりにしたかったのだ。

「特にはなにもない。けど、焦ってんのかもね。原作が見れないなんて思っても見なかったし。」

現実はそのままで甘くない。

カズトたちは始めからかなり安直的だった。

このままならいつか怪我するかもしれないよな。いやな光景を思い浮かべてしまい、眉を寄せた。

……少し気をつけたほうがいいな。

カズトは一人で、少しだけ気を引き締める。

「こりゃ無印諦めたほうがいいかもな。たしか途中から次元航行船を中心に話が進むようになるだろ？ そうなったら完全に手だしできななし」

「それは……そうだけど」

……結局そうなるか？

そんな考えがミコトの頭をよぎる。

たしかに、原作を見なくていけない理由はない。でも無印の名シーンは見たいのだ。

諦めきれず現実から目を背けるように外を眺めた。

すると世の中には、捨てる神あれば拾う神あり。

「……………ほえ？」

目を向けた窓の外にはとんでもない光景が広がっていた。

ミコトは啞然とした表情で外を見ているが、カズトはそれに気がつかず話を進める。

「そうなるかと介入できるのは無印終わってからだな。顔合わせは空白期になりそうだな。でもA・Sの展開崩さないためには、接触控えた方がいいのかな……………って姉ちゃん聞いている？」

今後の展望について語っていれば、何時の間にかミコトが外を向いて話を聞いていないことに気がついた。

「……………カズト、あれ」

半ば呆然とした顔で窓の外を指差す。

「あ？」

震える指が指す方向を見れば町中のご真ん中に馬鹿でかい樹が立っていた。

鬱蒼と生い茂る樹がゆらゆらと動いている。

その周りを見れば小さい木もいくつも見える。

「……………は？」

あんなもの五分前には生えていなかった。
断言できる。

「もしかして……」

「これって……」

「「ジュエルシード！」」

椅子を蹴っ飛ばす勢いで立ち上がる。

この千載一遇のチャンス逃すつもりはない。

やっときた原作拝見のチャンスなのだ。

二人のテンションが一気に最高値まであがる。

今まで細かいことを考えていたが、そんなものは気にしないとわんばかりだ。

「カズト、いくわよ!!」

立ち上がりざまに机の上に置いてあったさきイカを一気に口に流し込む。

「おう!!　ってそのさきイカ俺まだ食べてない!!」

空になった袋を投げ捨て、ミコトは玄関へと足を向けると飛行魔法を発動し、滑るように移動する。

「あっ、逃げんな」

「うつさい。お菓子ごときでギャーギャー抜かすな! そんなことよりさっさといくわよ! 原作通りならなのは葛藤が見れるはずなんだから!!」

「お菓子ごときって何だよ！ 俺には大事なことだ！ …… あっ先
いくなよ！ くそ、本当に待たずに行っちゃったし！」

カズトが靴を履いている間にミコトは行ってしまった。

慌てて追いかけるが、空を飛べるミコトのほうが基本的に速い。

しかし、俊敏値に七割振っているカズトの速度もなかなかのものだ。

一步一步を踏みしめ、自動車並みの速度で駆けていく。

事件の中心の大きな樹は幸いにもかなり近かった。

到達するのにあと一分もかからないだろう。

人の波を縫うようにして樹の近くまで近づくと、すぐ隣の車の後ろ
にミコトが隠れているのを見つけた。

ミコトもカズトを見つけるとすごい勢いで手招きをする。

「ほら、あんたも隠れなさい！」

ミコトは特等席で見る気満々だった。

その顔は期待に満ち溢れて、ワクワクしているのが一目瞭然だ。

「わたしはあつちからくると思うのよ。だからカズトは反対側を見
張ってて？ 見つけたら教えてね？」

あんまりにも嬉しそうだから、カズトもまた楽しみになってきた。

さっきまでは待っていたことが起こったという理由から上がってい
たテンションだが、異なる方向へ変化していく。

ミコトの前ではポーズをとっているが、もともとカズトが原作に介

入する理由はない。

前世でも見てはいたがそこまでファンではないからか、いまいちや
る気が出てこなかった。

でもたった一人の家族がこんなに楽しそうに笑っているなら、介入
するのも悪くないんじゃないか。

心の隅でそんな考えが頭をもたげてくる。

「みて!! こっちからきたわ!!」

楽しそうな横顔に見とれていたのは、ほんの数秒。

あわててミコトの視線の先を追う。

そこには純白のスカートをためかせている正義の魔法使い（ヒーロ
ー）がいた。

第二話 「八方塞がりとは、このことか」(後書き)

おまけ

第一話時点でのステータス

高町士郎

LV 64 (年齢により・8)
EXP 1497832

*LV1ごとのポイント=8

HP	12500	(7400 + 5100)	*初期値1
000 + LV × 100 + DEX × 50			
MP	0	(0 + 0)	*魔力を保有していない
STR	205	(69 + 136)	*初期値5 +
LV × 1 + ポイント			主に筋力に影響
DEX	171	(69 + 102)	*初期値5 +
LV × 1 + ポイント			主に防御に影響
LEG	340	(69 + 274)	*初期値5 +
LV × 1 + ポイント			主に俊敏に影響
INT	0	(0 + 0)	*魔力を保有していない

アクティブ系スキル

・御神流：LV24 (2351/)

古くから不破一族に伝わっていた戦闘技法

主に小太刀を用いた剣術を中心とする戦闘論理と人を守ることに重きを置く心が共に伝わってきた

このLVであれば全ての奥義にボーナスが発生、かつクリティカル率が二倍になる。

第三話 「私がそうしたいの」

唐突に、それは起きた。

町の中心部でジュエルシールドが発動したのだ。

平和な町のだ真ん中に巨木が現れる 本来ならばあり得ない出来事。

それを人は非日常とよび、住人はそこへその足を向けることはなかった。

本能が警鐘を鳴らすのだ。

これを前にできることは何も無い。

死を回避しようとする、ごく当たり前の衝動に動かされ、人は逃げる。

大人も子供も関係ない。

だれもが必死に自分だけのことを考え走る。

ここからどこか遠くへ、遠くへ。

しかし、すべての生き物が脅威を前に逃げることでしかできないというのに、たった一人の少女だけは立ち向かう。

自分ならこれを止められる。

私がこの町を守る。

その意思を不屈の心に納め、少女は空を舞う。

手に入れてから、まだほんの一月もたっていない。

これらの技術を本来持つもの達からいえば、無謀としか言いようが

ないだろう。

日常的に魔法に触れ、扱う世界の人間ですら命の危険があるというのに、わずか九歳の女の子がその脅威に抗おうというのだから。

意思を持つ大樹。

何人も近づかせない、その願いを受けて生まれた大樹は、その存在意義を満たすために近づくものすべてを吹き飛ばそうとする。

現に桜色の魔導師はいくつかの魔力弾を牽制として放ち、かなりの速度と威力を保有したそれは大樹へと走るが、よくしなる腕が空気を切り裂く音がうなりを上げ、桜色の魔力を瞬かせながら高速で飛来する魔導師の魔力弾をもともせず、逆にその太くしなる樹を魔導師に叩きつけ吹き飛ばした。

その剛腕を振り切った際、隣のビルにぶつけるが、砂の城だったかのように崩れおちていった。

多少の衝撃などものもしない作りになっているビルが一撃で崩れるのだ。

その威力は人間が受け止められる限界を超えていた。

それを受ければ、四肢はつぶれ内臓は破裂する。

人と形容するよりも、肉片といった方が正しい状況にすらなる。

しかしただ一人立ち向かっていった少女は、それを受けて尚、立ち上がるうとしていた。

純白の防護服 通称バリアジャケットはぼろぼろだ。

衝撃を緩和するといってもすべて無くなるわけじゃない。

九歳の身に余る激痛が、彼女の体を駆け巡っているだろう。

事実、少女の足は震え、立っているのがやっとだ。

泣き叫んでもおかしくはない。

むしろ褒められるだろう。

よく生きていてくれた、と。

だがそんな言葉がほしくて立ち上がったわけじゃない。彼女はこの町を守りたくて立ち上がったのだ。

もう誰にもけがをしてほしくないから

その思いが彼女を動かす。

その瞳に決意を込めて。

感情なき大樹も、彼女から目をそらすことができない。

小さき体からあふれ出る不屈の意志が、その目を捕まえて離さないからだ。

大樹からあふれる魔力もまた密度を増やす、彼女を打倒するためにあふれ出る大樹の魔力の増加の意味をどう受け取ったのかはわからない。

だが彼女もまた空へその身を浮かべる。

ビル風が吹く空中で彼女は堂々と胸を張り、立っていた。

彼女は少しだけ笑う。

その笑みに頭の中にあつた疑問がどこか遠くへ消えていく。

彼女の魔力弾は効かないのにどうして立ち向かえるのか？

彼女は大樹の攻撃を避けられないのにどうして向かっていけるのか？

彼女は負けることが怖くないのか？

その疑問の数々は彼女にとって侮辱でしかない。

その姿を、顔を、笑みを、見た瞬間に確信した。

この戦いは彼女が勝つ。

たとえ何があるうとも大樹ごときが彼女に勝つことはあり得ない。

戦いに絶対などない。

だがこの戦いにおいてだけは彼女が勝つと確信できる。

否、そう思わさせる何かが彼女から感じられた。

その笑みを残したまま、杖を胸の前まで持ち上げ構える。

マスターの意思を受けて、杖　レイジングハートも姿を変えた。

金の短い杖状の形態から、身の丈ほどの長さへとのび、先端は金の意匠がより豪勢なものへと。

砲撃モードと呼ばれる、今のマスターに最も適した形態だ。

「いくよ、レイジングハート」

彼女の口から、鈴の音のような音が響く。

デバイスはマスターの声をうけ、チカチカとコアを明暗させた。

その足元には魔力で編まれた魔法陣が展開する。

転嫁した魔法陣はすぐさま回転を始める。

繊細な模様を写しだされたそれが、回る姿は一種の芸術に近い。

「デバイス」

閑散とした町並みを魔力光が桜色に染め上げる。

わずか一言で彼女にリンカーコアから膨大な魔力が吹き出る。あふれ出した魔力すべてがデバイスを解しその先端に集中する。まばたきの間に、当たり前のように彼女は魔力を引き出し、圧縮し、操る。

より一層強くなった魔力光が再び周囲を染め上げる。

「バスター」

静かに、しかしはつきりと、彼女はトリガーワードを放つ。

瞬間、指向性をもたされた魔法は、桜色の奔流となつて大樹に襲いかかった。

今まで彼女の魔法を防いできた障壁も奔流の前に意味はなく、割れるときの独特の音を響かせ消失。

大樹もまた、奔流の前に塵になるしか、選択肢はなく、完全な非殺傷設定が守るべき町に傷一つ付けることは無かった。

町を染め上げた魔力の残光が瞳の中から消えたころ、無人による沈黙の中、彼女の息遣いだけが音を作る。

すると、大樹がいた位置に空色の宝石が落ちてきた。

彼女はそれを見るとハツとしたような表情で近づき、レイジングハートの中へと収納した。

それを契機に息を大きく吐いた後、周りを見渡す。

崩れたビル。

ひび割れた道路。

視界には映らないもののけがをしたであろう人たち。

思いをはせる彼女の感情をその表情から読み取ることはいできない。

目を閉じ、再び開いたとき、そこにいるのは覚悟をきめた一人の少女。
もう一度あたりを見回した後、何かをつぶやき、飛行魔法を用いて飛んで行った。

風に流された言葉は、誰に伝えるつもりがなくても、しっかりと届いていた。

決めたよ。私、この町を守るから。ユーノ君のお手伝いじゃなくて、私がそうしたいの。

これが、俺たちが彼女 高町なのはを初めて実際にみたときの出来事である。

「……」

「……………」

たつぷり十分は呆然とし、人波が閑散とした道を埋めるころ、ようやく二人は再起動をはたした。

カズトは恐る恐る右手を上げると、ミコトはどこからともなくメガネを取り出しかける。
これはデフォ装備だ。

「はい、ミコト先生。魔法少女の定義についてご教授ください」

ミコトにカズト君と指名されると、やや濁った目で発言を始める。

ミコトは質問に対し、大仰に頷き、腰に手を当てる。

「なるほどカズト君、これは良い質問です。本来魔法少女とは読んで字のごとく、魔法を使う女の子。ただしロリに限る。このことを指してきました。

しかし、魔法を使うという点に着眼点を当てたとき、いくつかのグループに分けることができるでしょう。

ひとつ目に魔法を使って人助けをするということでしょうか。これに当てはまる人の魔法は、まさにほとんどなんでもできます。またこの力を使うことによる人間関係の構築とその変化に物語の中心を当てているといてもいいでしょう。このタイプの魔法少女は前世でいう昭和タイプといてもいいかもしれません」

「つまり一般的に考えられるふあふあの服をきて、ステッキを振り回し、マスコットキャラクターと一緒に事件を解決するというイメージがあてはめられる方ということですね？」

「そうとも言えますが、その認識はもう一つの魔法少女　これは近未来型といいたいでしょうか　にも当てはまります。そもそもあなたのイメージは魔法少女の最低条件といってもいい」

「では昭和タイプの条件とは？」

「そうですね、昭和タイプの条件をあえて一言で表すならば　話につき一回しか魔法が使われないということでしょう」

「おおなるほど」

「もうひとつ、これが本題ですが戦いが派手じゃない」

「つまり、近未来タイプの魔法少女は戦いが派手だと？」

「ええ、近未来タイプの魔法少女は、小さな子どもから大きな子供までをターゲットに、わかりやすくも作りこまれた設定と明らかに狙ってるとしか思えない年齢が特徴です。さらに言うならば、登場人物ごとに得意不得意が存在し、魔法は一種の技術として考えられています」

「ですがそれだと昭和タイプと大した違いがないような？」

「いいえ、大きな違いがちゃんとそんざいしてます。大きな子供をターゲットに含んでいるということが重要なのです。大きな子供は人生経験が豊富ですから、わかりやすい展開を予想してしまい飽きがきやすいのです。そのための作りこまれた設定です。これがあることで人間関係に深みを持たせ、戦闘を論理的に、または派手にすることができるようなんです。とはいえその道の専門家でもないの、物理などの方向から見れば、実際に考えてみるととんでもないよねー、なんて事態が発生するのですが。そこは置いておきましょう。とにかく近未来タイプの魔法少女は戦うんです。そりゃもう派手に」

「なるほど、大変参考になりました。ところで姉ちゃん、もう俺のいいたいことわかるよな」

「……」

「あの子

強すぎじゃね？」

……先ほどの戦闘を俺たちの視点から見てみよう。

まずなのは飛んできた。

これはいいだろう。

このときの速度も姉ちゃんより少し早い程度で、予想の範囲内だ。

次になのは様子見で撃つたであろう魔力弾。

アクセルかデイバインかはわからないが、とにかくシューターを五つ。

四方八方から全く違う軌道を描き大樹へと突き刺さっていった。

おしくも魔法障壁の前に砕けたが、その速度はとんでもないものだった。

遠くから見ていても、一瞬のできごとだったのだ。

五つのシューターというのがわかったのも、なのはがしばらく様子見に徹していたからだ。

俺にはあれを撃たれて避ける自信が全くなかった。

もしなのはと戦うことになれば、空中を攻撃する手段のないカズトは なぶり殺しだ。

『お話』なんてあったときには、バリアジャケットを着れない俺の命が危ぶまれる。

三つ目になのはを襲った大樹の剛腕？による叩きつけ。

あれだけの質量をもつ物体を飛んでいるのはにぶつけたときのエネルギーはバカみたいな桁になるはずだ。

それを受けて五体満足？

あり得ない。

どれだけ頑丈なバリアジャケットを着ているのだろう。

現段階で一番防御力をあげた状態の俺と姉ちゃんでは一発でKOだ

が、なのはは耐えきっている。

相手がどうにか砲撃の雨を抜けて攻撃をしたというのに、ダメージ
1。

それなんて無理ゲー？

最後のデイバインバスターも二人からすれば鬼畜性能すぎる。

わずかき秒ほどのためで、高威力の集束魔法。

姉ちゃんの雷の暴風ヨライス・テンベスター・フルグリエンスだつてこんな威力はない。

付け加えるなら雷の暴風は溜めの時間込みで5秒は必要だ。

そんなものをホイホイ撃ちそうなのはの総魔力量はどんなものなのだろうか。

知るのが怖くて堪らない。

「つまりまとめると　なのはに勝てる気がしない。というより原作に出てくるキャラ全員に」

我に帰ってから、いったん拠点まで帰還し、現段階で集まった情報をまとめて、考察した結果、俺たちには勝てないということが分かった。

姉ちゃんは認めてくれないので、淡々となのはの魔法のどこが優れているのかを説いていたら、うつむいてしまった。

しかし、自分としては事実を述べただけなので悪気はない。

はつきり個人的意見をいうならば、アースラの武装隊にも勝てるか怪しいとみてる。

よくて互角くらいか？

まあ、フェイト相手なら瞬殺だろう。

もちろん俺が。

原作では防御が薄いとか言ってたが、それすら破れるか怪しい。

付け加えて、リインフォースあたりが出てきたときはおとなしく天才たちに任せようよ　とあの戦闘を見た後ではいわずにいられない。

「……………」

「姉ちゃんそろそろ認めようぜ。あれは規格外だ。俺達凡人に入り込むすきは無いってことを」

しばらく喋っていたので、口がさびしくなる。

視線を動かせればさきいかの空き袋が。

そつえば姉ちゃんが全部食ったんだっけ。

「……………」

「考えてみるよ。プレシア救出なんて夢のまた夢さ。傀儡兵Ⅱ A ランクって聞いたことあるから、今のまんまじゃ瞬殺　」

「……………」

うっ？

かすかなうめき声を不思議に思い見れば、ミコトの眼元にはキラリと光る涙が。

「されるのがオチ……って、なんで泣いてるの、姉ちゃん!!」
目元の涙はどんどん大きくなり、今にも零れ落ちそうだ。
姉ちゃんの顔はゆがみ、不安そうな顔をしていた。
震わせる肩がその雰囲気一拍車をかける。

「ぐすっ…だって、カズ、カズトが……」

話し方は完全に駄々っ子。

見た目相応の泣き方になっている。

精神年齢は二十をとくにすぎた。

これは俗にいう、肉体に精神が引っ張られるというやつなのか。

泣かせたな？ と頭の中に俺をやたらと責めるやつが出現。

そのうち先生に言っちゃうぞと言いきそうだ。

いや俺はなにを言っているんだ。

頭の中に誰かいるはずがない。

完全にパニックになってやがる。

「いやいや、俺も姉ちゃんも肉体に引っ張られすぎでしょ!! ああもう!!」

予想外の事態に頭をかきむしる。

最後の悪態を怒っていると思ったのか涙が溢れ、とうとう頬を流れ落ちていく。

「だって…だって…私、原作見たいのにカズ、カズトが、無理だつて、ぐすっ、いつから……」

その理由にあきれ返ってしまふ。

まさかその程度の言葉で泣くとは……

今まで親の財産問題とかそういう外敵からの悪意には泣いたことなんて一度もないのに、兄弟から諦めると言われただけで泣く。

たった今気がついたが、相当精神年齢が若くなってる。

体に精神が引っ張られるというのは意外と正しいのかもしれない。俺達二人とも明らかに子供っぽくなってる。

「無理っていうのは『今は』だって！」

「今は？」

「そう！ 考えてみるよ、今の俺たちじゃ明らかに足手まといだろ？ このままじゃ、原作の足引っ張って最悪な展開になるかもしれないだろ？」

「……うん」

「だから、もうっとL.Vをあげてから介入しようって言いたかったんだ」

ごめん、嘘。

介入なんてしたくないです。

しかし泣く子には勝てないのが世の道理。

俺の本音を知ってか知らずか、姉ちゃんを泣きやますために、思ってもいないことを口走っていた。

姉ちゃんは俺の答えを聞くや、笑顔になる。

「そっか……そうよね。原作の流れを悪くするわけにはいかないもんね……」

何度か一人頷いたあとに、俺を見つめ返す眼には、何やら怪しい炎が。

というかおい、感情の入れ替わり早いな。

「行くわよ、カズト！ この際山籠りしてLVあげよ！」

立ち上がるや叫ぶ。

周り何だこいつ、と眼を向けるがお構いなしに俺を引っ張っていく。

そうだよね、もっと強くなる。修行フラグだよな。

こうして俺はLV上げの旅にでたわけだ。

とは言ったものの、いきなり旅に出たわけじゃなかった。

俺は一人公園の中でベンチに座りながら空を見上げる。

たまには姉ちゃんと離れて、こうして一人になる時間があった。今もその時間を使ってリラックスしているのだ。

目をさすような青をした空の中、ゆつくりと雲が流れていく。

幾多にも形を変え、時に周りとは合わさりながらも空を進む。

はるか昔から雲は自由の象徴だ。

多くの人間が空を見上げ、あれのように自由でありたいと願っただろう。

だが俺にはそう見えなかった。

風に押され歪に形を変えていくその何処が自由なのだろう。流されていく雲は自由とは名ばかりでその実ただ流されるだけの弱い生き物のようだ。

しかしそのことが俺にはうらやましい。周りに合わせてただ流れるだけで生きるその姿に、きつと何も考えなくていいんだろうな、そう考えると不思議と雲がうらやましかつたのだ。

俺はポーッと空を見上げ続ける。

世界の果てまで繋がっている空に瞳を向けて、一心不乱に見上げていた。

そんな一人の時間もそう長くは続かない。

俺の待ち人が来たからだ。

「待たせたか？」

別に待ち合わせの時間に遅れたわけでもないというのに、少しだけ俺に窺うように声をかけてきた。

俺は別に、とそっけなくいう。

実際にはかなり早めに来たおかげで待つはめになったのだが、それは完全に俺の自業自得。誰かに心配されることじゃない。

「そんなことよりも……いかないか？」

絶対に遅刻しなように早めに出たら、早めにつきすぎてしまった。

なんて恥ずかしいことを頭をふるって外に弾きだすと俺は彼女へ向けて声をかける。

彼女は黒い髪を風になびかせながら、その特徴的な少しだけ赤みを帯びた瞳を俺に向けてくる。

いつも思うが本当にきれいな瞳だと思う。本当に。

「あんまり……みるな……」

いつの間にか凝視していたのか俺の顔は彼女の顔に釘づけになっていたようだ。恥ずかしそうに顔を赤らめつつも、しっかりと俺の瞳から目を離さない。

肩甲骨あたりまで伸びた黒髪をした顔は小さな卵型で淡い赤色を秘めた瞳が宝石のように輝いている。彼女のこぶりな鼻のしたには桜色の唇が彩りを加えている。無地の黒いTシャツの上に白のパーカーを羽織り、下はジーンズをはいている。

彼女の名は夜^{ヨル}。

俺が日本に来てから出会った近所の女の子。

ふとした縁から仲良くなつて最近はたまに二人で出掛けるようになった。

正直なところあんまり話のかみ合わない同年代の子供たちよりも話の筋道がしつかりとしている彼女と話している方が気楽だからという理由で最初は会っていたが、今は純粹に彼女の反応が面白くてあつている。

なんというか、こつちよつとした仕草が可愛いのだ。

「……………？ どうした。行くんだらう？」

夜を見ていた俺に話しかけてくる。

「ん……………ああ」

すこし驚いた俺に夜は、今日のカズトは変だな。と笑う。

それにすこし口をとがらせて俺は拗ねて見せた。

夜はそんな俺の仕草がおかしかったのか、珍しくお腹を抱えて笑つた。

その笑顔はとても、そう

とてもきれいな笑顔だった。

すでに俺たちがこの世界に来てから5年。

もういろんなことがあった。親は死んでしまったし遺産の問題で大人の黒いところも見てきた。

正直な話、そんな悲しい設定は物語の中だから許されると思う。俺たちはなすすべもなく金を奪われ辛い生活をする一歩手前までいていたのだから。

あの時士郎さんが俺たちの所に来なかったらヤバかった。本当にそう思う。

姉ちゃんのなるべく原作前に関わって流れを変えたくないという意見を採用してイギリスで暮らして4年。士郎さんの呼びかけを無視してイギリスで暮らし続けるのは精神的にストレスがたまる生活だった。

そしてとうとう原作への介入が始まった。

ついていく俺もあれだが、姉ちゃんもなかなかいきあたりばかりな性格をしているとしみじみと思う。

俺は夜と商店街を歩きながら少しだけ溜息をついた。

「さつきからどうしたんだ？ 悩み事があるなら聞くぞ？」

それを目ざとく見つけた夜が心配そうに覗きこんでくる。

「いや、ちょっと家族関係でな。別に大したことじゃないから大丈夫だって」

「……本当に？」

いつもはクールな夜が本当に心配そうな表情をとる。その珍しい顔に俺は慌てて話をそらそうと周りを見渡した。

見渡すと都合よく話の矛先がずらせそうな物が目に入る。

「あー、えっと。あ、あれ！ あそこに大判焼きが売ってるぞ！
ちよつと買ってくる！」

「おい、まで、カズ …… はあ、それで話がそらせたと思ってる
のか……」

呼び止める声を無視して俺はお店へと走る。

後半の声も聞こえていたが意図的に無視。だって自分でも苦しいっ
てわかってたから。

ちよつといかつい男が店主のお店からは甘い香りが香ってきていた。
俺は少しだけメニューとにらめっこした後、カスタードとこし餡
子を一つずつ頼む。それにおっちゃんは何でかニヤリと笑うと何も
言わずに大判焼きを渡してきた。

なぜか、あの子はキープしておきな、と空耳が聞こえたのは気のせ
いだと思いたい。

精神年齢的には18の俺がなぜに12歳の少女をキープせにゃなら
んのだ。色気のいの字もないような女に興味はないわ。

……たしかに将来美人にはなりそうだが。
ある意味こういう光源氏計画も転生者の特権な気がする。

俺は受け取ったアツアツの大判焼きを手に夜の座るベンチへと足を
進めた。

「餡子とカスターどっちがいい？」

「そつだな……餡子で」

ベンチに座りながら右手に持った餡子を渡すと、夜は熱いとおつぶやく。
よくよく考えたら春先に大判焼きははずしたかな。もうすこし考え
て買えばよかった。

「ん……カズト。これこしあんだぞ」

「あれ、言っ てなかつ たっけ？」

夜が大層不満げに言ってきた。

どうやら彼女は粒あん派らしい。個人的にこしあんが好きで大判焼
きもこしあんを買っていたのだが……チョイスミスった。

「まったく。普通こついう時は粒あんだろっ」

夜が頭を押さえながら大仰にいう。しかしそんなのは個人の趣向だ
と思っただが。

「ふ……気が利く男なら買いに行く前に聞いてから行くものじゃな
いのか？」

「ほう、12の俺にそこまで求めると？」

「別に年齢は関係ないと思っが？」

そう返されるとぐうの音も出ない。

本当にこいつは12歳なのか、はなただ疑問だ。しかし本当に12
なのだからたちが悪い。

「まあ、そんなに女の子の扱いがうまいとイメージが悪いがな」

「そうか？」

夜はそう言うがすこし疑問がわいた。

普通女の子の扱いがうまいってことはそれだけ相手の細かいところに気がきくってことだろう？

そっちの方がいいと思うんだが。

俺がそう言うとき夜は静かに首を振って否定した。

「そうでもないさ。たどたどしくも思いやる気持ちにあふれている方が好感が持てる」

「……さすがに何度もあつていれば慣れてくるから、だどたどしくは無いんじゃないか？」

「あくまで最初は……だ。もちろん私たちみたいに慣れてきたなら聞いてほしいが？」

俺は首をすくめて両手を上げる。いわゆる降参のポーズだ。

「何、次気をつければいい。それに」

夜はクスリと笑ったあと、俺の一步前へ出ると振り返った。

ふぁ、と髪が舞い上がり夜の楽しそうな顔がアクセントを加える。不覚にも見惚れてしまうような笑顔だった。

夜は俺としっかり目線を合わせる。

「大丈夫。私はカズトが優しいことを知っている」

彼女の唇からこぼれた声はしっかりと届いた。

「……はいはい。次こそは完璧なエスコートを試してみますとも」

その笑顔と声にやられていたなんて知られたくなくて俺は自然と軽口をたたく。

夜はそんな男の心理を分かっているかのような顔を見ると、彼女もはいはいと俺をなだめるよう言った。

そんな年下の子供をあやすような仕草をした夜を、次こそはぎゃふんと言わせようと決めて再び町へと歩き出す。

俺にとって冒険とはまた違った楽しみがある時間。

こんな日々が平穏な毎日がほしいと、本気でそう思った。

第四話 「二律背反とはうまくいったものね」

あれからLV上げるならヴォルケンリッターみたいに次元世界を渡っていったほうが効率よくね？

ということでもリリカルの転移魔法を使って、経験値稼ぎに精を出していたが、そろそろ無印の終盤も近いということで、いったん羽を休めることとなった。

無印の終盤が近いということはプレシアの死期が近いということでもある。

二人にとってこの一点が無印で頭を悩ませる所である。

もともと普通の日本人であるミコトから言えば助けられるものは助けたい。

善良な人間として当然の思考である。

対してカズトの考えからいえば、プレシアの救出は諦めた方がいいということである。

いや、ミコトが助けると決めたのならば手伝うだろう。

とはいえ先日のなのはの戦闘を見る限り、自分たちが何の役に立つというのだろうか？

未熟な自分たちが介入したとしても、できることはプレシアが落ちないようにすることだけだ。

だが落ちないようにしたとしても何か好転するのだろうか？

元々プレシアはアリシアが生き返らないからこそ、非合法の手段に出たのであって、助けたとしても死んだままのアリシアが残る。

これはプレシアが認められることではない。

娘のためなら世界が滅んでもいいとさえ考えているのだ、生きていればどんな不都合が起きるかわかったものではない。

もし、ミコトがアリシアをよみがえらせることができれば万事解決する。

しかしそんなことは夢物語にすぎず、アリシアの復活は絶対に無いとわかっている。

死んだ人間は生き返らない。

子供だってそんなことは知ってる。

たしかにプレシアが死ななければ、フェイトは喜ぶだろう。

あそこまで母のことを思っているのだ、いやそうでなくても母親が生きていてくれたら誰だってうれしい。

だが、ロストログアの不正使用または、管理局の公務執行妨害の罪は残ってしまう。

この罪は一体だれが背負うというのか。

原作ではおそらくだが、フェイトの境遇もあつて、無実とされた。

ある意味プレシアに罪をなすりつけた形だからこそ無実だろう。

しかしプレシアが生き残った場合その手は使えない。

時の庭園の譲渡やお金でけりがつくならばいいが、そんなに世界は甘くなんてない。

管理局からすれば一個人が出せる程度のお金よりも、人材不足を補うフェイトのような高ランク魔導師のほうが貴重だろうから、どうにかして無料奉仕、または管理局による保護観察で手を打とうとするはずだ。

プレシアが生きていた場合、リンディもフェイトを養子にしようとは考えないはずだから、原作ほど裁判に力を入れてくれるか怪しい。彼女が優しい人格をしていても、人間関係がないことには、無関心

でいられるのだから。
フェイトが有罪を宣告される可能性も上がるだろう。

ここでプレシアは末期の病気にかかっていることがフェイトにばれてみる。

間違いなくプレシアの罪も私が背負うから、母さんはゆっくりしてて、とか言うんじゃないだろうか？

フェイトの母に対する献身的な愛。

なるほど外から見れば感動的なことだ。

だがここで一つ疑問が上がってくる。

プレシアがフェイトに心を開くかどうか、だ。

開くならいい。

フェイトは少ない時間だが、母との充実した時間を過ごさせる。

では開かなかった場合は？

プレシアを第三者が見たら心を病んでいると判断してもおかしくない。
い。

いや、本当に心を病んでいるかもしれない。

フェイトの看病に対して

なんでアリシアじゃないの

なんでアリシアの偽物が生きてるの

そんな考えを持たないともかぎらないだろう。

そうになったら終点には悲劇しかない。

死が黙々と迫る母を必死に看病するというのにその本人からは存在の否定と罵倒。

間違いなくフェイトは精神に傷を負う。

死に際の患者の看病中に看病する側が傷を負うというのは、実際に起こりうる話なのだ。

一番の問題として、もしフェイトが看病で手いっぱいになった場合、ヴォルケンリッターに対する魔導師の数が一人減ることがある。

原作ではフェイトとなのはがいたからこそ、闇の書の暴走を倒せた部分もある。

カズトとミコトが、フェイトの代わりとなれない場合は地球終了のお知らせが流れるだろう。

これは絶対に阻止したい。

否、阻止しなくてはいけない。

これについてはフェイトが地球で看病すればいい。

そんな案もだが、まず無理だろう。

詳しいことは分からないが、魔法という技術と次元世界をいくつもまたぎ、その技術を保有する管理局より地球の医療が優れているとは思えない。

フェイトもなのはとの別れを惜しみこそするだろうが、最後には母を選び次元世界へと渡っていくはずだ。

そんな確信がある。

悲観的かもしれない。

ネガティブな考えかもしれない。

だが原作のベターな結末を知っている以上、わざわざ賭けに出る必要はないはずだ。

自分たちが何もしなくともそこそこの結果にはなる。

これも原作を知っていることの弊害なのかもしれない。

長くなりはしたがアリシアが復活しない以上、プレシアを諦めるこ

とが『今の』自分たちに見えるベストの選択である。
これがカズトの意見だ。

第四話 「二律背反とはうまくいったものね」

今、この二つの意見が二人の間で対立している。
いつもなら最終的に折れるのはカズトだ。

今回のこともカズトが折れるだろう。

所詮他人事だ。

いくら原作を知っていて思い入れがあるとしても、看病で手いっぱいになり関わりの無くなったフェイトが赤の他人であることは事実で、数年も過ごせば忘れていく。

冷たいかもしれないが、カズトはそう思っている。

ミコトもそう諭されれば理解する。

基本的に頭悪くないのだから、ハイリスクな方法をとることの危険性も分かっている。

だが、未来を知っているのに何も行動しないというのは辛いものがあるのだ。

ミコトは前世で適度に善人であろうとしたし、なるべく人にやさしくしてきた。

そのアイデンティティーが、ここでプレシアを見捨てるのが正しいことなのかと語りかけてくるのだ。

頭で考えているわけではなく、心が見捨てるということに抗議をするのだ。

だが、プレシアを助けてフェイトが看病のために地球を離れたら地球は闇の書によって滅ぼされる。

このことを考えれば、理性はプレシアを見捨てるべきだという。

明らかに対立する二つの意見が体を満たしていく。

二律背反とはうまくいったものね。

一人そう口の中で呟く。

「なんか言った？」

カズトには少し聞こえてしまったのか反応してくる。経験値稼ぎから、滞在中の家に帰ってきて二人で今後の展開を話すこと一時間。

目の前に迫った二つの選択に対する意見は出揃った。

「で、どうする？ どっちを選ぶ？ 俺はどっちでもいいんだ」

肩を竦め、挑発するように声をかけてくる。

無責任な言葉に少し頭に血が上るが、その言葉は真実だ。

主体性が無いといわれるかもしれないが、カズトは本当にどっちでもいいんだらう。

本来原作に積極的に関わりたいくない以上、この状況がすでに不本意であるはずだ。

どっちを選んでも不本意なものならば、別にどっちでもいいのだらう。

どちらを選んでも苦勞するのは眼に見えている。

……カズトには悪いが私は

「私はプレシアを助きたい」

しっかりとカズトの眼をみて言いきった。

「参考までになんでそっちを選んだかきいてもいい？」

世界にたった一人の肉親であり、すべてを話せる相手であるカズトには誠実であろうとミコトは決めている。

他人に言うことは恥ずかしいかもしれないが、心の中をすべて話すことにした。

「正直な話、私は助けられるのに助けられないなんて真似はできないわ」

「……それで自分が大変な目にあっても？」

たしかにフェイトが看病で戦線を離れば、その穴を埋めるためにミコトが奔放する可能性は高い。

半年後のミコトのLVでフェイトの代わりができるか怪しいが、ミコトは後悔をしないと確信できる。

なぜなら、その結末では自分は少なくともプレシアの命を救えたということなのだから。

ミコトにとってそれは価値のあることなのだから。

「そんなの考えてもいないわよ。私はね？ 自分の心に正直に生きたいと思ってる。それに言うでしょ ねだるな、勝ちとれ、さすれば与えられんって。

私はベターじゃなくてベストがほしいの」

そうするとカズトは眼を瞬いたあと、なにか噛み締めるような表情をとり やっぱり姉ちゃんは姉ちゃんだな、と納得した。

「なによ、文句あるの？」

「いや、姉ちゃんの素晴らしさに改めて感服しただけ」

苦笑。

次に真剣な顔をとる。

「でも姉ちゃんこれだけは覚えておいてくれ。俺たちがこれから介

入を行うことで、本来の流れから変わるかもしれない。原作では悲しいこともあったが、たしかに世界は救われていたんだ。もし俺たちが世界の流れを悪い方向に変えてしまったとしたら、それはある意味俺たちが世界を滅ぼしたということだ。

この世界に生きる数えきれない命を殺した　　殺戮者になるかもしれないということ、覚えておいてくれ」

現実には常に予想の斜め上に行く。

その言葉の通り、人生経験の少ない私たちが考えた介入は、予期せぬ出来事で失敗するかも知れない。

原作では戦いの終末には世界の命運がかかわっていた。それに加え流れを変えろということは、世界の命運を動かすことと大差ない。

介入者の行動一つ一つが世界の運命を左右する。

肩がズツと重くなつたきがした。

緊張か、重圧か、はたまた怖気づいたのだろうか。

「……」

呼吸が浅くなる。

目の前の床が歪んでいるように見える。

殺戮者とは、ひどい言い方だ。

だがいくつもの命を奪った点を見ればそれほど相応しい名もあるまい。

ミコトはそんなものになる気はさらさらない。

だが、失敗は誰にでも平等だ。
Ifの可能性を考えれば足がすくむ。

がちがちに固まった体と心をもつてもなお、首を縦に振るう。
誰とも知れないものでも確かに生きている命と平穩を天秤にかけて、
それでも関わりたいのだ。
この世界の中心の物語に。

誰に何を言われようとも、譲れない。
それがミコトの意思だ。

私の目を見るとカズトは諦めたような、否達観した表情を作る。

「そっか……ならもう何にも言わない。姉ちゃんのやりたいことが
決まったならあとはやるだけだ。細かいところまでやることを詰め
ていこう」

頂点にあつた日が傾き始めて、俺と夜は公園のベンチに座ってた。

「昨日のテレビ見た？」

商店街のパン屋で買ったできたてのパンを二人揃って食べている時に俺は切^{カスト}りだした。

「いや。なにかやってたのか？」

俺はカレーパンを。夜はメロンパンをかじりながら話を続ける。

「ああ、ちよつと昔の映画なんだけどな、Shall We Dance? って題名の映画なんだけど見たことない？」

最近は二人で町を巡り、最後にどこかで買った食べ物を食べながら話するのがコースになっている。

今日は客引きが嫌に強気だったからか、あんまり買わないパンを買わされてしまった。

「Shall We Dance? 直訳だと、ダンスを踊りませんか、だな。アメリカの映画か？」

それなりに美味しいから別にいいか。

俺は結論をすぐにはじき出しつつ、夜をみる。

別にアメリカだけじゃないけどな。元々は日本の映画でそれをリメイクしたのがアメリカでやって人気になったんだ。

「いや、これがなかなか面白くてな？」

あんまりにも面白かったので、俺は夜に映画の内容を教えたくなくなってしまった。ついでに言うと、これを見て俺は本当に驚いた。なんせ俺が前世でみた映画のものと結末が違ったんだから。それが俺を余計に物語の中に引き込んだのかもしれない。昨日の夜に携帯のワンセグ機能が大活躍だったよ。

「映画ではある女の子に興味をひかれた独身の男がその女の子がコートをしているダンス教室に入るところから始まるんだ」

個人的に本当に面白いエンターテイメントは人に紹介したくなる。

「女の子に興味あつて始めたダンスだけど、そのうち男はダンスに本気で打ち込み始めるんだ」

「なんでだ？」

夜はうまく俺の話の合間に疑問をはさんだりして聞いてくる。

「楽しかったからさ。だから周りの奴をさそつてみんなでダンスをやつて、もつと楽しくなつて……」

本当は妻子持ちの男だった主人公の妻ができていろいろと物語が二転三転するんだけど、この世界の物語はちよつと違う。

「ある時、その男のダンスに打ち込む姿に女のほうも忘れていたダンスへの情熱を取り戻すんだ。そしてお互いに惹かれあつていく」

夜は惹かれあつていくという所で、どうにもオチが読めたらしく面白そうな顔をした。

「でも男は惹かれるからこそ、好きになったダンスを彼女を誘う口実にしているようで嫌になるんだ。女の方も男とダンスを天秤にかけて苦しむ。ダンスをやりながら色恋に時間をかけていられるほど彼女は器用でないと自分でもわかっていたからな」

二人のすれ違いが始まる。

お互いに意識しているのに一歩が踏み出せず、ただ時間が過ぎていく。それをもどかしく思っただけでもどうにもできない。そんな時間が続くのだ。

「でも、ある時転機が訪れる。ほんの数カ月後に世界の大きな大会があつて、そこにふたりででることになったんだ」

俺はぐつと拳を握りしめる。

あの映画は言葉にできない魅力があつた。あんまり映画を見ない俺にだって最後まで見てしまう魅力。二人の行き違いに画面越しに見ていた俺がやきもきしてしまうような魅力があつたのだ。

「練習を重ねる中で、一層近くなる二人。それでも二人は互いに尊重しているから気持ちを言葉にしなかつたんだ」

男は女のダンスへの情熱を知っていたから。

女は男のダンスへの真剣な思いを知っていたから。

お互いにその関係を崩そうとは思わなかつた。

「二人とも好きだという気持ちを溜めに溜めて、そうして大会の日が来る」

溜められた思いは何処に行くのだろうか 何処にもいかない。何時かはそれがあふれて止まらなくなる時が必ず来る。

「男は今までの努力に自信を持っていただけだから万全の態勢で大会に臨む気持ちがあった。でも……女はそうじゃなかった。大会の直前、緊張で体が動かなくなっちゃった。必死で体を動かそうとしても動かなくて……」

健気に体を動かそうとしていた彼女。その時が限界だったのだろう。

「その時、男は立ち上がって彼女に言ったんだ

俺は映画のラストシーンを脳裏に思い浮かべ、万感の思いを込めてそれを言おうと口を開くが 夜の指が唇に当てられ遮られる。

「……？」

なぜここで止めるのか。俺の疑問余所に夜が立ち上がり俺の目の前に立つ。

夜はぼーっと見上げる俺の顔を見てニヤリと口もとを釣り上げると

「 Shall we dance? 」

片手を伸ばしながらそう言った。

「……へ？」

思考が飛んだ。

立場が入れ替われど完全に映画のラストシーンの再現だ。
啞然とする俺のよそに夜が俺の手を引く。

「ほら、男ならエスコートくらいしてみせてくれ」

挑戦的な笑みに俺の口角もつりあがる。

夜の手を握って立ち上がると、もう片方の手も掴んで身を寄せる。

ちょっと大胆だったかな？

自分でやっておいて恥ずかしくなったが、

「ほら、もっとこうやって」

夜はそんな俺の内心に構わずにもっと体を寄せた。ほとんど抱き合っているようだ。

「片手は腰にまわして」

さらに俺の右手を掴んで腰を抱くような位置に持って行かせた。

「うあぁっ……………えぁ……………!？」

「……………何言ってるんだカズトは」

うぶな反応を見せる俺を澄ました目で見つつ夜は俺の体勢を整える。

「よし、それでいい」

満足げに彼女は頷くが、俺からすれば……………や、やわらかいっす。という状況。

彼女の腰に回された手と胸板に押し付けられた彼女の顔が俺に暖かさを伝える。

「いくぞ?」

夜の元から音が溢れる。溢れた単音は重なり合つと複雑に絡み合い、俺の耳へと届いた。

合わせたように動き出す俺たち。

しかし俺にダンスの経験なんてものはなくて、頼りない踊りだった。それでも夜は楽しそうにしている。

夕日をバツクに、夜が口ずさむ音を頼りに二人で踊る。楽しそうに笑う彼女が弾むように歌を口ずさんでいる。

「おいおい、どこでこんなダンス覚えたんだよ」

くるっとターン。彼女の黒髪が夕日を受けて情熱的に揺れる。

テレビでしか見たことのないダンスを目の前で披露する夜に素人ですらない俺でも彼女の気品のようなものが伝わってきた。

「ふふ、秘密だ」

ステップ。

その何気ない動作に惚れられしそうだ。

「そんなことよりも私にリードされていていいの?」

無意識に体が動く。

夜の動きは俺を常に誘導し、素人でしかない俺に負担をかけない踊りをしてくれる。

「お、いったな？」

誰もいない公園の中で俺たちは踊りを踊る。

彼女の唇から漏れ出した音は空気を媒介に何処までも伸びていく。

小鳥のさえずりのような小さなメロディだというのに、澄んだイメージを俺の脳内へと刻みつける。

「リードしてみせようじゃないか」

もう曲はある程度回った。夜の圧倒的な存在感のおかげである程度は覚えられた。

夜の一步先をいきリードするように踊る。

「そつだ。上手いぞ」

踊る踊る。

繋ぎ合う手と合わさる視線。

彼女の瞳から伝わる楽しいという想い。

清流が心の底へ溜まっていた淀みを攪っていく。

気がつけば、曲はもうクライマックス。

もう夜は口ずさんでいない。だが俺たちの間には音楽が無くてももう大丈夫だった。

さあ、もう終わりだ。

彼女から伝わる言葉。これが終わるといのが残念で仕方ない。やっと踊れるようになってきたのに。

曲が終わる一秒前。

世界の何もかもが遅い。静かなこの世界の中で俺たちだけがいるよ
うな錯覚。
知らず口が開き

「
」

なにも言わなかった。
音のない言葉がもれることはなく、何を言おうとしたのかさえわか
らない。

曲が終わり、立ち尽くす俺を彼女は見ている。夜はじっと俺を見て
いる。

「
……………」

そこに言葉はなく、つないだ手だけが暖かった。
世界にはもう俺たち以外にも息をしている。あの感覚はすでにどこ
にもない。

「夜……………」

あれほどあった会話はなく、彼女との時間ではわき出ることを止め
られなかった言葉の数々が今は何一つ浮かびあがろうとはしない。
俺は情けなくて瞳を閉じた。

「……………カズト」

そんな俺の頬に彼女が両手を合わせる。
羽毛に包まれるような感覚だというのに、俺の瞳が開かれるような
強制力があつた。

「次こそは、エスコートをしてほしいな」

気がつけば俺の手は彼女の手を包むように重ね合わされている。彼女は気がついてるのかもしれない。

俺が戦いという非日常へ足を踏みいれていることを。

「ああ、約束する」

ただ俺はそう言って彼女と次のダンスの約束をしたのだった。

幕間1 「僕だつて 男なんだ」

町のなかを人に踏まれないように気をつけながらユーノはジュエルシードを探し歩いてた。

フレットの体は小さくて見つかりづらいが、同様に誰にも気がつかれないで踏まれることもある。さすがにそんなことをされたら中身が飛び出ちゃうのでユーノは最大限の警戒を持って道の端に行く。

歩くたびにカリカリと足の爪が音をならし、探知魔法を起動させておく。

ユーノの魔力はそこまで回復しておらず、なのははまだ探知魔法を使えない。そこでミコトが単純に足を使って探そうということになり、今三人で町中を歩いているのだ。

さすがに効率は悪いが、それしか方法はない。

ユーノは大して役に立たない自分の体を恨めしく思いながら、地道に歩き続ける。

時おり道行く人がユーノに気がつくが、物珍しそうな視線を向けるだけだ。その視線はユーノをのらの犬や猫をみる目と大差ない。

「あつ」

そこで視線から逃げるように俯いていたユーノが転ぶ。

……みじめだ。

みれば躓いたのは小さな石ころだった。そんなものに躓いてしまった自分の状況を振り返って　ふとそう思ってしまった。こうして道を歩き、視線にさらされる自分がちっぽけに思える。本当は人なのに、動物　ペットとして扱われる自分が嫌になる。そもそも自分があの時暴走体に負けなければこうはならなかった。そしてなのはが戦うことも……

検索魔法の結果を見ながら歩き続ける。

特に反応もないことにながつくりと肩を落とすも、諦めない。

今なのはは何処まで行ったのだろう。

あと一時間もすれば今日の探索は終わりだと決めているから、そろそろ待ち合わせ場所へ引き返そうとしているころだろう。

彼女の残念そうな顔が浮かぶ。

こういつては何だが、彼女の顔はかなりいい。部族間でのつきあいしかあまりなく、かなり狭い世界で生きてきたユーノではあるが、最近毎日みているなのはのルックスが平均以上はすぐわかった。

なのはの元気な表情は周りを元気にしてくれる。陳腐な表現かもしれないが、彼女は周りを照らし続ける太陽。ユーノにとってはもう大切なものだ。

彼女が助けてくれたからこそ、今ユーノは生きていられるのだ。口では言い表せられないくらいの感謝を、彼は感じているのだ。

そんなことを考えていたからだろう。

いけすかない神様のいたずらが起きたのは。

突然感じた悪寒はジュエルシードの魔力。

間違いない。この魔力は……ジュエルシード！

背筋に走る悪寒の元をたどれば少し先の森の中。

間違はなく三人のなかでユーノが一番近い場所にいる。このままいけば一番初めにジュエルシードにたどりつけるだろう。

突然の反応だったが、ユーノはこの程度では冷静さを失わない。

落ち着いてなのはたちの位置関係と発動した地点のことを考えて、そこまで被害は出ないだろうと考えると、まずなのはとの合流を優先とした。

今のユーノにできることは少ない。だからこそなのはたちのような直接戦闘ができる人材を待つべきだと判断したのだ。

だが神様のいたずらはこれだけに終わらない。

念話をつなごうとしたユーノの目の前で結界が広がる。

「そんなんっ……！？」

結界。

それは異なる位相を展開することで現実への被害を極力減らすというものだ。

展開と同時に魔法を隠ぺいすることも可能な優れた魔法で、管理局は管理外世界で魔法を使う場合はこれの使用を特別な場合をのぞい

て義務付けている。それが展開したということは　そこに魔導師がいるということだ。

だがなぜこのタイミングで出てきた？

今まで何度もジュエルシードは発動していた。それに関わってこなかったくせに、今に限って発動してからすぐに結界を発動したのだ。これまでのことを考えるに、この町に近くに魔法を使える人材はいない。

では誰だ？

ユーノの頭に天啓がひらめく　　違法魔導師。

おそらくジュエルシードを狙った魔導師がここまで来たのだろう。だからこそ今になってこうして結界を用いているのだ。そうでない可能性はあるが、そうである可能性も高い。

いてもたってもいられずにユーノは暴走をしているだろうそこへ走り出した。

走り出してから気がついた。

……走ってどうするんだ？

自分があそこへ行ってどうなるというのだろう。

あそこにはジュエルシードだけではなく、今は違法魔導師がいる可能性が高いのだ。自分でそう結論をだしたはず。

なのになんでこうして自分は走っているのだ。

今一番にしなくてはいけないことはなのはたちを待つことだ。

頭のなかでは分かっている、四肢を動かし息切れしそうになるくらいに全力で走り続ける。

バクバクと音をならし鼓動をならす心臓。上がる体温。体内をめぐ
る血潮に『熱さ』が加わる。ぐるぐると廻る血が熱い血潮へ変わる。
こんな緊急事態なのにこの熱さが心地いい。

血は巡る巡る。そうしてたどりついた 彼の脳へと。

そうして理解した。この熱さが教えてくれた。

なぜ自分が走っているのかを。

なぜならば自分は 男なのだ。

古来より男は女を守ってきた。

他の男を蹴落とし手に入れた女を守るために力をつけてきた。時には
獣のように、時には狩人のように生きてきたのだ。泥にまみれ、
四肢の一つをなくそうとも男は女を守るためにその命を輝かせてき
た。

そうやって強いものが女を獲得して生きてきた。

遺伝子に刻まれた男の本能、それが叫ぶ。耳元で雄たけびをあげる
のだ。

女に守られることをよしとするな、と。

女の後ろで震えていることをよしとするな、と。

ユーノの体の中にかつてないほどの怒りが満ちる。

なぜ自分は今まで女の後ろに隠れていたのだ。まるで自分が去勢された犬のようでは無いか。

違う。自分は決してそんなものではない。未だ体の中に牙を隠す獣だ。

ならば

やることは決まっている。

ユーノは今までにしたことのない肉食の笑みを浮かべるとひたすらに目的地へと走り出した。

すでに彼の頭の中に、なのはたちを待つという選択肢は消え去っていた。

雷鳴が唸りを上げる。

魔力によって生み出された稲妻が空気を焼き、空を染め上げる。落ちた雷が木々を焼き、大地を黒く染めた。

「これは……」

結界に覆われた森の中でユーノは一人声を上げる。
自然現象を再現した稲妻の魔法は魔法世界出身のユーノでもめつた
にお目にかかれぬレベルだった。

しり込みしそうになる気持ちを抑えて頭を振った。

正確には男の本能がそれを上回る勢いで脳を沸騰させようとする熱
さを和らげようと頭を振ったのだ。このままでは自分がどうにかな
りそうだった。

……なのははいない。僕が、僕がやるんだっ！

ほんの少し前まで一緒にいた少女の笑顔が頭のなかに焼きついてい
る。

彼女ならばこんな場所でも、こんな状況でも何とかしてくれるかも
しれない。自分ひとりでは力足りないかもしれない。それで
も彼女を巻き込みたくなかった。

昨日彼女の家族が見せたなのはを心配する表情は、巻き込んだと自
覚しているユーノに重く突き刺さる。

だから今日ユーノはなのはにジュエルシードの発動のことを教えず
にここにきた。今いるであろう高町家にはすでに結界を張ってなの
はがこれないようにしてある。彼女がここにくる可能性は低いだろ
う。

ユーノはフェレット形態のまま森の奥へ。ジュエルシードの暴力的
な魔力の元へと急ぐ。

小さな体では走ったとしても、そこまでの速度が出なかった。
なのはの肩につかまっていたときが懐かしい。

……だめだ。僕がやらなきゃ。

気がつけばなのはのことを考えている甘い自分を叱咤する。

いつからここまでなのはに頼りきりになったのだろうか。初めは一人ですべてのジュエルシードを確保する気持ちで管理外世界へ向かったのに。

もう自分は男としての自分を思い出してしまった。

自分よりも才能があるうとも彼女は戦いなど無縁でいなくてはいけないただの少女。ユーノは男であるからこそ彼女たちを巻き込まないために一人で彼女に挑む。

ユーノは四肢を動かし、木々の合間を抜ける。

ドドドンッ！

目的地の上空で爆音が響いた。

見上げればそこには一人の魔導師が手に持ったデバイスを振り切ったところだった。暴走体はすでに彼女が魔法で鎮圧したのか、暴走体としての形を保てずにジュエルシードに戻っていた。彼女はそれにデバイスを近づけて格納をする。

風になびく金髪。ふありとゆれるバリアジャケット。なによりも特徴的なのが横顔から見える射抜くような赤眼。血のような色を湛えたその目は手に持った鎌がたのデバイスと合わさって死神を連想させる。

まるで死を運ぶ戦士。

その魔導師がこっちを向いた。

かすかなユーノの感情の揺らぎから生まれた気配から彼の位置を割

り出したのだ。
スツと持ち上げられたデバイス。

「
」

遠くて声は聞こえなかった。

膨れ上がる魔力。金色の魔導師のデバイスの前に集中した魔力弾が、
二つ。

「ファイア」

ユーノめがけて打ち出される。

初速からトップスピードをたたきだした直線弾は正確にユーノの体を狙っている。

「くうっ！」

警告なしで放たれるとは思っていなかったが、ユーノは得意の防御魔法で機敏に反応して見せる。

こと防御と転送系の魔法は得意の彼だ。体の前面に展開したプロテクションで直線弾をはじく。

弾かれた魔法が地面に突き刺さり粉塵を上げる。

えぐられれ作られた射撃の後を見て　ブルリ、と震える体。

今ので確定した　彼女は敵だ。

もし偶然このあたりに住んでいた魔導師で善意で強力していたとしたら、こんな警告なしでの魔法なんて使わない。訴えられたらたまたまのものではないし、誰かをいきなり攻撃しようなんて思わないだろう。

なにか後ろ暗いことがあるからこそ彼女はユーノへ口封じをしようとしたのだろう。

ユーノを見つけてから魔法を打ちだすまでにためらいが無かった。慣れているのか、それともどうとも思わないのか。

そんな違法魔導師が相手なのだ。

魔力の少ない体で勝てるのか？

自分と同じ年くらいにしか見えない少女を前にユーノは自問する。

ここで負ければ命は無いかもしれない。

大けがをするかもしれない。

戦うとしてもまだまだジュエルシードはたくさんあるのだから、ここは引いて魔力の回復を待った方がいいのではないのか？

否、魔力があろうとなかろうと関係ない。

今のユーノがしなくてはいけないことは、そんなことでやるやらないを決めることではないのだ。

キツと表情を改める。

……これは　　僕の戦いなんだ。

事件の原因を作ったのは自分。

事件が起きてなのは巻き込んだのも自分。

ならば事件を解決するのも　　自分でなくてはならない。

いつかみたなののように覚悟を決めた。

ユーノもまた男であるがゆえに、彼は自分で戦いジュエルシードを

集めることを今選んだのだ。

しかし攻撃魔法の適性が低いユーノに戦いは向いていない。魔導師同士で戦うならば必須の技能が彼には致命的なまでに足りていない。

だがジュエルシードは集めなくてはいけない。

彼は自分の信念に従い、ジュエルシードを集めないという選択肢を選ばない。

足元に輝きを放つ翡翠色の魔法陣。

術式は捕縛魔法。

適性の低いユーノが選べる精一杯の魔法。

腹の下に力を入れ己を鼓舞するようになってないほどの意地を込めて、ユーノは叫んだ。

「いくぞおおおお!!」

さあ、男の意地をみせてやろう。

ユーノは自分の体の耐久性の無さを自覚している。同時に今の自分が空へと飛ぶことができるほどの魔力的余裕が無いことも。

今のユーノは他の魔導師に対する決定打がない。攻撃魔法に対する適性が無いということが魔導師同士での戦闘におけるネックになっていた。

ゆえにジユエルシードを封印しようとしていた時もバインドから封印という流れを作っていたのだ。

もっともなのは直接封印砲だけで暴走体を無力化できるのだが…
…ユーノにはそんな芸当は空がひっくり返ったってではしない。

では、どうするのか？

簡単だ　　周りを利用してやればいい。

そのイメージは以前からできている。

ユーノは三本のチェーンバインドを発動させる。

蛇のようにうごめく鎖を生み出し制御する。淡い翡翠色をしたその鎖はやけに森になじんでいた。が、突然四方へ広がると近くにあった木々を力づくでぶち折った。

自然と調和の取れていた鎖のいきなりの奇行。森を保護する教会の人ならば速攻で失神しそうなぐらいいい感じで叩き折っていた。

もしこの場に彼をよく知るものが入れれば口をあぐりと開けていただろう。

そのくらい彼がむやみに森を破壊するなんてことが信じられなかった。

彼はそんな周りのことなんてお構いなしに、たたき折った木々に鎖を巻きつけると、その木を違法魔導師に向かって　　投げつけた。

突然地上から飛んでくる巨大な物体。思わず勢い余ってランサー三つで破壊してしまった。

パラパラと散る木くず。大量の中空を踊る木が彼女の視界をふさぐ。

それを確認するや否やユーノは森の中へと一目散にかけていった。

ユーノはフェレットに体を変化させているため、体が小さい。その点を利点とするために森の中へと駆けたのだ。

そうすることでユーノはみつかることを極力少なくしようとしたのだ。

木の根で陰になっている部分。それを利用してじっと隠れ見る。

……やっぱり。

彼女がユーノをすぐに見つけたときは驚いたが、今の彼女は自分を見つけることができてない。

おそらくあの時は戦闘中ということもあってかなり鋭敏な感覚があったのだろう。しかし今はユーノは魔力も抑えている。そう簡単に見つかるつもりはない。

ユーノは息を潜めながらもじっと時を待っていた。

あの黒い魔導師。

ユーノがみるにそこまで戦闘訓練を受けているようには見えない。

確かに魔法を覚えることに年の差はなく、幼い子供が高ランク魔導師になって一騎当千の活躍をするというのはたまにある話だ。

だがそれらの出来事の裏には必ず年長、つまりベテランの後押しあつての活躍だ。

幼いゆえにできてしまう経験のなさ。ユーノはそれをつくしかない。自身もそこまでの経験はないからこそ　　攻める。

攻めて攻めて攻めて、相手がぼろを出すそのときまでユーノは失敗できない。

彼女のあの攻撃ならば、直撃すればユーノを落とすのに……二発もあれば足りうる。もし彼女がでかい魔法も持っているならば防御の上からでも貫かれるかもしれない。さすがに防御には自身があるが、彼女がそれ以上でない可能性がないのではなく、あの魔法をみるにその可能性のほうがるかに高いのだから。

ユーノは再びチェーンバインドを発動して周りの木々を投げつける。同時に彼女へと念話をつないだ。

「その魔導師！　なんで君はジュエルシードを集めるんだ!？」

ちよつとした小細工をしてすぐさま移動。落ち葉の下に隠れるように動く。

さすがに彼女も二度もあたる気はないようだ。

飛行魔法をたくみに操り木々をかわすと、そのまま魔法の反応があった場所の上空まで飛んでくる。

彼女は質問に答えるつもりもなく、ユーノを赤い相貌を光らせて探し始める。

「　　ッ!！」

と、まるで図つたように上空から大木が落ちてきた。

ちよつとした小細工。彼女の目が投げた木に移った瞬間に空へと放った木が落ちてきたのだ。

さすがにあれだけの質量が動く音はごまかせずに気がつく。とっさに手を突き出すことで張られた魔法障壁は三枚。

胴回りがメートルを超える大木が生み出す衝撃が彼女を地に引きずり落とそうと牙をむく。

そのうち重力という物理現象を味方につけた木は二枚を破壊する。が最後の一枚は破る前に彼女が向きを変えて矛先をそらすことではなしてしまった。

「あれは危険なものなんだ。発掘した僕にはあれを回収する義務がある。君はそれでもあれを集めるのかい!？」

ユーノは再び隠れた場所からあるものを魔導師に放って見せる。今度は純粋な体の動きだけで投げたのだ。魔導師は彼のその動きには気がつけない。

しかし彼女のデバイスはそれに気がついていた。

『マスター!』

はっとなるような動きで、デバイスの言葉を疑うこともなく雷光の一線が走る。

パンツと一刀両断にされた 泥の塊。

「! きゃああ!」

基本的にどんな動物も臆病者だ。

厳しい自然界の摂理から逃げ切るために彼らは危機に敏感になることで生き残ってきたのだ。そうしていった結果人はそれを臆病と呼んだ。

が動物には臆病と呼ばれようとも関係ない。彼らは本能に従い危険から逃げるのだから。

そして魔法によって変化した人間もその影響を強く受けるときがある。

例えばその動物になりきろうと自分から思っているとき、または今のユーノのほうに興奮状態に陥つてるときだ。

落ちた場所では重なり合った木々の重さであたりはめちやくちやだった。その総重量はかなりのはずだ。

「あれなら……………！！！」

あれほどの重量と共に落ちたならあの魔導師は意識を失うかバリアジャケットが取れているはずだ。大樹を空から落としたときの障壁の強度の具合を見るに彼女は防衛系の魔法が得意ではないのだろう。

落ちた……………？

残り少ない魔力の放出で肩で息をするユーノ。もう体の中に残っている魔力はほとんどない。あと二、三回の魔法がせいぜいだ。

落ちていてくれ……………！

そっと重なり合う木々の元へ向かう。フェレットの姿からみれば山のように積まれた木々。その中にいるだろう魔導師の場所を探知魔法を使って探す。

「よかった……………彼女は中で気絶してるみた　　っ！？」

検索結果をみた瞬間、ユーノは再び全力で森の中へと逃げる。

まさかまだやる気なんて……………！！

検索結果……………魔力反応増大。

あの魔導師は木々のなかに埋もれようととも気を失わなわず、じつと魔力をため込んでいた。

すべては姿の見えない魔導師ユーノがこの場所に近づくまで。

木々が吹き飛び。

舞い上がった木々がくるくると空を舞うのをユーノはみた。

フウっとうきあがった魔導師。泥にまみれた彼女はその双眸を光らせる。

体の周りに浮き上がるスフィアの数々。

バチバチと放電を今か今かと待ちわびたそれはユーノを殺傷するには十分過ぎる魔法。

落ち着け。

ユーノはそう自分に言い聞かせる。

彼女の魔力にすぐに気がつきたおかげで彼女が見つける前に森に隠れることができた。

落ち着いて考えればそのスフィアを適当に打ったところであたりはしない。

彼女が落とせなかったのは残念だった。だからといってすぐに諦められるほど今のユーノは諦めがよくない。何としてでも生き残って見せるつもりだった。

だがそんな淡い想いは決して実現しなかった。

「……………どこにいても、もう関係ない　　っ！」

膨れ上がったスフィアがお互いに共鳴し合う。

爆発的に膨れ上がった魔力を保有したまま、あたり一帯を取り囲むように配置される。もちろんその範囲の中にはユーノも含まれていた。

「まさかつ！」

その魔力量と形に一つの魔法が浮かぶ。

この範囲指定との魔力量は……………！

広域殲滅系魔法。

砲撃魔法が、どちらかといえば単体の目標に対しての魔法であるのに対し、こちらは最初から複数目標を対象として放たれ効果範囲全てを攻撃する魔法。

そもそもこれをユーノ程度に使う魔法ではない。

大規模魔法に分類される魔法は魔力消費も激しい。ゆえにもっと考えて使わなくてはいけないというのに。

……………まずい。

あんなものを食らえば魔力量の少ない自分は死んでしまう。だが逃げようとしても……………どこへ？

あたり一帯はすでに彼女の攻撃範囲だ。少ない魔力では空を飛ぶこともままならず、転移をすることもできない。

焦るユーノをしり目に魔導師は広域魔法を解放するため、そのトリガーワードを紡ぐ。

「サンダーーーーーレイジ!!!」

耳に残る綺麗な声が紡ぐ死の足音。

それはユーノを含めたあたり一帯へと向けて
くさんばかりの雷光が地面に突き刺さった。

視界を焼き尽

降り注ぐ雷。

すでに逃げるすべは魔力の少ないユーノに残されてはいない。

……なにか方法があるはず!!

しかしユーノは諦めていなかった。

自分が諦めればそこで守ろうとした彼女が危険なことに巻き込まれることは目に見えている。ならばこんなところでくたばっていいはずがない。

ユーノはなるべくスフィアから距離をとると、自分ができる最高の防御魔法を発動させようとする。本来ならばデバイスの補助なしでは難しい魔法だが、それでもユーノはその魔法にかけた。それしか彼が生き残る方法がないゆえに、彼はばくちに出るしかないのだ。

「
」

ユーノはこれからあるであろう胸の痛みへの覚悟をしながら己に許された最鋼の魔法を発動させた。しかし発動までの魔力が足りない。足りなさすぎる。だがそれをユーノは気合いで何とかした。

普通足りない魔力は気合いで補えるものではない。だが気合いでなんとかできる場合もある。それはリンカーコアを無理やり絞って魔力を出す方法だ。

常人が行えば溢れる魔力に比例して心臓を掴まれるような激痛が身を苛み、最悪死に至る技法だ。それをユーノは知りながら行う。そうすることが一番の方法だと信じて。

「
つつー!!」

リンカーコアへと走りだした痛み。

思わず眉が力が入ってしまった。だが耐えられないほどではない。魔法の構成にゆがみを出さないように気をつけながら魔法を構成する。

……やあ、こいー!

極限まで絞った魔力で作り上げた魔法が世界へと姿を現す。自らの魔力光である翡翠の光が周囲を染め上げる。しかし

「ガッ!？」

魔法を完全に発動させた途端、自分の予想をはるかに超えた激痛が身をむしばむ。

ユーノはもともと研究系の人間だ。痛みには慣れていないユーノではそれを耐えることができるわけがなかった。ましてそれが予想していた以上の痛みならばなおさら。

起死回生の一手。己の命を守る最後の守りである楯が魔法として顕現できずに空気へ解けていく。

「ああ……!？」

……ここまでやって……なんで!？」

正真正銘最後の一手だった。

彼は賭けに勝ってなかったのだ。

ユーノのいる地点の先で、稲妻が鳴動する。

来る!

だが何もできない。あれほどの範囲魔法ならばここら一体を吹き飛ばすことが容易くできる。そしてそれほどの魔法を防ぐすべをユーノは先ほど失った。

膨れあがった稲妻の塊が解放される瞬間がスローで見える。
うねりを上げる稲妻の魔力はそのまま下方へと狙いを定めると、一
気に周囲を破壊せんと降り注ぐ。

もう、だめか……………っ!?

千分の一秒よりも凝縮された時間の中で自分へと迫る光を前に思わ
ず目をつぶり

「まだまだ。終わっちゃいないわ」

「へ？」

目の前には見知らぬ人間。

肩までの黒髪をがバチバチと青白い光を纏って跳ねている。

……誰だろう？

まったく知らない人間が目の前でユーノに背中を見せていた。

「だから。まだあんたが退場するには早いのよ」

そんなことは聞いていない。

ユーノが聞いたかったのは、今まで降り注ごうとしていた稲妻はどこへ消えたのか。そしてお前は誰なのかということだった。

あれほどの魔法ならばここまで吹き飛ばすに十分すぎる魔法だ。ならばここにも魔法の影響が来たはず。

そう考えて周りをみて愕然とした。

あたり一帯が吹き飛ばされていたのだ。

なのに無傷なんて……この少女はいつたい……ッ！

「はいはい、また一人の世界に入っちゃったのねえ。そんなのは後にしてなのは戦いは心配じゃないの？」

ユーノは顔を上げると不思議そうな顔をした。

……なんでなの。……ッ。もしかして……

「なのも……来てるの？」

少女は勿論といい笑顔で笑っていた。

「みなさい」

空中にいる魔導師の方へと指をさす。

促されるままに魔力切れでだるい体を気合いで動かしながら空を見上げれば、金髪の魔導師のそばにはユーノが戦いに巻き込まれなかった一人の少女が。

「……なのは」

……きちやっただね。

ユーノは呆然と彼女を見上げながら、自分には不相応のあの少女の輝きに目を奪われたのを自覚した。

「なんで一人で突っ込んだのかは知らないけど、見てなさい。あの子はユーノに心配されるほど弱くはないって所を……というかこんな知らないんだけどなあ」

後半は小さくて聞こえなかったが、少女は腕を組んでなのはのことも見つめていた。

一方、空を飛んでいたなのは目の前の魔導師の姿に困惑していた。初めて会う自分以外の魔導師。

ユーノの近くにいる魔導師のことも気になるが、今は目の前の女の子の方が先決だと感じていた。できることならば仲良くなりたいたい。しかしさっきの魔法を見るにユーノとは敵対している。しかし目の前の彼女はジュエルシードのことを話しても教えてくれないだろう、となんとなくわかっていた。

「あの！　なんでジュエルシードを集めてるんですか!？」

そうとわかっていても聞かずにはいられなかった。彼女が強い敵意をもった目で自分を睨んでいたとしても、なんでこんなことをしたのか、ユーノを傷つけようとしたのかを聞きたかった。

「……………」

しかし返答は沈黙とデバイスをかまえた音のみ。

金髪の魔導師はデバイスを横抱えにかまえると、先端部分を変形さ

せて鎌のような形状にした。

「あ、あの！」

明確な敵対の意思。それを受けてもなのはは対話をしようと声を張り上げる。

金髪の魔導師のデバイスの先端に魔力が集まる。

『Scythe Form』

夕暮れの中に金色の光が灯る。

瞬間　　なのはの視界から彼女が消えた。

完全に人の知覚速度を上回る速度へと一気に加速したのだ。

『Protection』

咄嗟に勘だけを頼りに防御魔法を発動。

「　　っ!？」

しかし防御魔法を切り裂いて魔導師の刃がなのはへと襲いかかった。

なのはの魔力の瞬間出力は魔導師の中でも上位に位置している。その魔力量で作られた防御魔法を容易く切り裂くあの斬撃魔法はよほど高性能なのだろう。

なのははマルチタスクの一つで斬撃魔法へ対する抵抗力を上げた防

御魔法を構成しながら、体をひねって斬撃を交わす。飛行魔法で常に重力と反対に出ている力の方向を変えることで筋肉の動きではなく魔力の動きでかわしたのだ。筋肉へと伝わる神経伝達速度では避けられないと本能で悟ったなのはの判断だった。

金髪の魔導師は全く体を動かさずに飛行魔法の力だけでかわすという奇妙な回避をしたなのはに驚くも、体は正確に二撃目を放つ。振り下ろした刃を返したのはの胴体を真つ二つにしようとさらに接近して振り上げる。

「ここだっ！」

そこでなのはが金髪の魔導師の思ってもいない方法をとる。

斬撃魔法の先端へと手を当てたのだ。

手で止められると思っているの？

魔導師には斬撃魔法に対する自身があつた。かつての魔法の師が太鼓判をおした魔法だ。同年代の彼女が止められるわけがない。腰から振ることで遠心力も味方につけた音速の斬撃がなのはへ迫る。

「えっ!？」

しかしそれは届かない。

なのはの手に生み出された防御魔法が斬撃の先端を噛むようにして止めていたからだ。

なのはは動揺する魔導師にデバイスを抑えたまま一気に近づく。防

いだ時の姿勢の関係で、なのはと魔導師の顔が近い。まるでつばぜり合いのような姿勢のままお互いの瞳の中をのぞく。

「どうしてこんなことをするのか……理由、教えてくれる？」

……なんで悲しそうな瞳をしているの？

なのはから見せる紅い宝石のような瞳の中に、彼女はかすかに寂しさの色を見た。彼女もまた、それを知っていたからこそ、この刹那の合間に気がついた。彼女の姿は堂々としているようで、アンバランスな瞳が不安定な光を湛えている。

もっと彼女のことを知りたいと、目をのぞきこむようになのはがさらに身を乗り出すと 視界の端で光が揺らめいた。

「……ッ！」

咄嗟に身を翻すと、金髪の魔導師の後ろから三発の魔力弾が一瞬前までなのはがいたところを通過していく。

危なかった、となのはは冷や汗と共に思った。

体の後ろの資格を利用して問答無用に攻撃されるとは思っていないかった。視界の端に映っていないければ、今頃地面の上に落とされていただろう。

にらみ合う形でなのはと金髪の魔導師は対峙する。

「……………あなたと」

金髪の魔導師がゆっくりと口を開いた。

なのははそれを聞きもらすまいと、神経を集中させていく。

「……………あなたと話すことなんて　　ない」

『Photon Lancer』

彼女の答えは、決別。

なにも話す必要ないと、なのはに言った。

しかし彼女は気が付いているだろうか。こうして言葉に出している時点で、その言葉は嘘にしかならないと。

なのははそれに気がついていた。彼女の今までの経験。それが金髪の魔導師の心の中に巣くうなにかの存在を、次第に鮮明にさせていった。

魔導師の周りに現れるいくつもの魔力スフィア。彼女のスキルの一つであろう魔力変換により、電気がうねりを上げなのはへと迫る。

……早い……ッ！

それはなのはが放てる魔力弾よりも、はるかに速度があった。直線的とはいえ、この早さならば誘導しなくとも十分に驚異的だ。

『Protection』

レイジングハートの咄嗟の魔法によって防がれる。なのは自身は完全に動けていなかった。

彼女が何かしらの言葉を話してくれると思っていたなのは、戦闘という意識を薄れさせていたからだ。まだまだこのあたりは未熟ともいえる。

『マスター。集中してください』

その不甲斐ない姿にレイジングハートから叱責の声が飛ぶ。

「……うん。ごめんなさい」

驚きで固まってしまった彼女だったが、次第に強い光が目にも宿る。その双眸で目の前に飛ぶ金髪の少女を睨む。

あくまで話し合いで解決したかったが、彼女は話す気はないようであれば……力づくでも話をするだけだ。

なのはは以前ジュエルシードと初めて戦った時のように覚悟を決めた。

幼い姿の彼女から、まさしく戦士と言うべき威圧があふれる。

「……………！」

金髪の魔導師が息をのむ。目の前で起きた変化に戸惑うように。

「お話……………聞かせてもらおうよ」

この日、二人の魔導師がしのぎを削る戦いを繰り広げた。

結果は誰もが知る通りのものでしかなかった。未だ魔法に出会い数週間の少女が金髪の魔導師に勝てるはずもなかったのだ。

しかし、この日から少女は目標を決め、自分のすべてを用いて彼女

へと追いつがる。

そして彼女は世界を救うため、少女の瞳の色の理由。それを知るために魔法の世界へと身を入れた。

そんな世界を救う少女の物語。

それはまだ、誰も知る物語のままであった。

だが、それはもうすぐ終わるだろう。

この世界には決められた物語に潜む他の誰かがいるのだから。

さあ、その日はもう近い。

もうすぐ、もうすぐ、世界は変わる。

第五話 「上等オ!!」

時の庭園外縁部に二人の子供が立っていた。

片方はローブをまとい、もう一人の少年は足元まである皮のコートを着ている。

色は二人とも黒で揃えてある。

「とうとうきたわね。原作介入」

「そうだな、例えば一ヶ月と半月も前になるのか……そう思うと感慨深いものがある」

この一カ月半のあいだ、二人はひたすらにLV上げに没頭していた。倒した魔獣の数知れず、いくつもの無人世界を回ってあらゆる敵と戦った。

今着ているローブとコートもその戦利品の皮をなめて作ったものだ。さらにオリジナルの魔法もいくつか作ることができた。

……まあ、本職の人が作った魔法には完成度が遠く及ばないけれども。

巨大な敵とも戦った。

数十メートルの、ビル並みの大きさをした魔獣との戦いでは一度カズトが丸呑みにされるアクセシントも発生したくらいのでかさだった。

中には殺されかけた相手もいる。

一番危なかったのは、原作でシグナムが戦ったミミズのようなやつ

だろう。

傷ひとつつけられない悔しさに唇を噛み締めながらも、幾多の触手と頑丈な甲殻の前に逃げるしかできなかった。

リベンジしても勝てず、こいつにも危うく食われかけたが。

カズトは戦いの日々を回想していく。

ここまで来ることができたことで、もう何かを達成した気にすらなる。

しかしそんな慢心を姉は許しはしない。

「何言ってるの。あと半年後にはもう一回あるんだから、ここはある意味通過点であり、分岐点よ。ここでへばってたら終点まで着いてこれないわよ」

発破をかけるように口をつむぐミコト。
それにカズトは心外な、と顔を変える。

「別に疲れたわけでもやめたいといったわけでもない。純粹にいるいるあったなと思っただけ　　っと、時間だ」

少し遠くで魔力の高まりを感じた。

おそらく武装隊がプレシア逮捕のために転移したのだろう。

「そう？　ホントだ。でもプレシアに一撃でやられちゃうのよね、武装隊のみんなって」

遠すぎて魔力の高まりを感じたことで、真剣な顔つきに変える。
これからが本番だぞ、そう表情が語っていた。

「まあ、Sランク魔道師の攻撃だ。Bランクくらいなら一撃でやら

れてもおかしくないだろ。それに、これからあれと戦うんだろ？
勝てそうか？」

挑発するように声をかけるが、真意には緊張するミコトをほぐそうとする家族への心配が見て取れる。

Sランクの魔道師、それも相手は手加減なんてしてくれそうにもない相手だ。

次あったとき、消し炭なんて結末は認められない。

誰に頼ることも無く、弱肉強食の世界の中で暮らすことで、二人には精神的強さと、心のゆとりが生まれた。

たった二人だけで過ごし、旅をしたこの一カ月半は二人を精神的に大きく成長させていた。

事実現在のカズトを見てみると、以前はあまり乗り気でなかった介入なのに、今では力が試せることにわくわくしている。

「ん〜、いろいろ準備してきたし、プレシアが戦闘がそこまで得意つてわけで無いってもの確認済み。予想通りに行けば、うまくいけるはずよ。そっちこそあの辺にいる傀儡兵と戦うわけだけど……予想より数が多い。気をつけなさい？ 特にでつかいのが出たらすぐに逃げることに。いい？」

ミコトは注意を重ねるが、根本的なところでカズトは大丈夫だろうと思っっている。

死にかけるような傷を受け、HPの危険域に限界が迫ったとこのあるカズトは、自分よりも死に対する恐怖を分かっている。

……私が無茶をする場面でも、カズトはきつとしない。

冷静に自分にできる最大限のことをやってみせる、そう信じている。

「分かってるって。どんな作戦を考えたか知らないけど、そっちの
ほうが難易度高いんだから、まずは自分のことに集中しろよ」

自分には何ができて、できないのか。

二人はそれをよく把握している。

数値でも、実感としても、自分の限界を知っているがゆえに、冷静
に考え判断を下していく。

「余計なお世話よ。古今東西、弟を心配しない姉はいないの。甘ん
じて頷いておきなさい」

「はいはい、分かりましたよ。我が麗しの姉君よ……じゃ、行って
くる」

「行ってらっしゃい、気をつけてね」

時の庭園は個人として持つのなら破格の大きさを誇る。

その大きさは巡航艦アースラとくらべてなんら変わらないほどだ。

プレシア個人がどうやって手に入れたかは知らないが、テストロックス一族の所有するものだと言われたほうが納得できる。

傀儡兵まで搭載された時の庭園は戦艦といってもいい。

原作では次元振の影響で、虚数空間に落ちてしまったが、これがフエイトのものになる未来がないわけではない。

もしかしたら、未来でフエイトが子供とプレシアをつれて時の庭園で次元旅行なんて未来もあるのかもしれない。

だが、それはこの世界じゃない。

隣り合わせの鏡に映るように隣りあわせとなった、平行世界のどれかだ。

ミコトはベストを目指すと行っていたが、失敗するとカズトは考えている。

ハッピーエンドなど、どだい無理な話なのだ。

プレシアが末期の病気に犯されているのも、アリシアが死んでしま

つたのも、フェイトがクローンであることも、すべては物語を盛り上げるための要素であり、フェイトが辛い人生を送ることはすでに決まっていることなのだから。

その悲劇をどうにかしたくて、ミコトはもがき、足掻く。きつとくそつたれな神様とやらは、そのオリ主であるミコトが、悩み、苦しみ、もがき、足掻く様を見たくて仕方ないのだ。

だからこそ失敗する。

完膚なきまでに失敗する。

不幸にも偶然に偶然が重なり、予期せぬ出来事により、失敗する。

そもそもこの状況すらおかしいと思っていた。

一カ月半のランダム転移で、なぜか狙ったようにLV上げにちょうどいい世界に行けたり、時の庭園に誰にも気づかれずに転移できたのも

まるで誰かが舞台を整えているようじゃないか。

一度それについてミコトに聞いたことがある。

だがそれは、突然の魔獣の襲来によって途切れさせられた。

図ったようなタイミングだ。

それとなく聞いてみたこともあるが、そのすべてが最後まで話すことができない。

明らかに第三者の介入。

この場合は神様の介入といえればいいか。

さらにいうと、ミコトは意識操作をされているような気がするのだ。理論武装を重ね、いかに介入が不利益を起こすかを説いても絶対に意見を変えたりしない。

転移が都合よすぎることも、疑問に思ったりしていない。時の庭園にランダム転移してたどり着いた時点で、おかしいと思うはずなのだ。

それに、もともとは普通の人間だったというのに、魔獣との命がけの戦いを行ったりするだろうか？

するわけがない。

いくらと特別な力を得ようとも、毎日のように戦うなんて考えようともしないだろう。

殺戮者と呼ばれる覚悟を持って、そう言われてもなお介入することにする人間がいるか？

ここに来て確信した。

姉ちゃんには神様の手が加えられていると。

そして、カズトは家族を見捨てられないゆえに、原作に関わることは決して避けられないのだと。

この世界の中で異物であるカズトにとって、ミコトとは唯一の肉親であり、決して手放せない人なのだから。

意識を操作されているであろうミコトは最後まで原作にかかわり、命の危険に晒され続ける。

決してその意見を曲げないミコトを守るためには傍にいるしかない。そのためにミコトと一緒に行動しているのだ。

しかし、ここでひとつ疑問がある。

……なぜ俺は神様の手が加えられていないのか？

人の意識を変え、世界の流れすら修正してみせる神様が、なぜ俺一人にこんな疑問を持たせた。

これもまた物語を彩る演出のひとつなのかな？
それとも完全なイレギュラーなのか？

その疑問は尽きることは無く、常に意識の片隅で燻っているのだっ
た。

走る、走る。

ただひたすらに時の庭園内部を、カズトは目的地目指して走る。

武装隊が撤退し、ジュエルシードの暴走が始まるまでもう時間がな
い。

……二人で考えた計画では、俺は傀儡兵の早期破壊を担当している。
これができるなければ、俺たちの考えではアウト。

この考えというのが、プレシアの落ちた虚数空間への穴を作らない
こと。

プレシアが自ら落ちてしまうかもしれないならば、その穴をなくし
てしまえばいいという考えだ。

じゃあ、なんでその穴ができたのかといえば、ジュエルシードの暴走が挙げられる。

だから暴走されるまでの時間で、ミコトがプレシアを止めるのが目的となる。

しかしこの速攻でとめに行くには、プレシア打倒に加え二つほど障害が加わる。。

一つ目は傀儡兵。

これがプレシアの周りを囲ったら攻撃力に乏しいカズトたちは不利になる。

原作では玄関口を守るのに使われたが、二人が侵入することで内側に何体かまわされるだけでも、妨害までの時間は長くかかってしまう。

そうするとジュエルシードの暴走により、プレシアが死ぬ可能性が大きくなるわけだ。

二つ目に魔導炉。

これを使うことでプレシアはジュエルシードと傀儡兵を制御していたが、最初のほうで挑んだとき、一旦ジュエルシード蜂起を中止し二人をその莫大な魔力で潰しにかかるかもしれない。

そうなると勝ち目ゼロで、原作通り暴走、落下の流れになる。

傀儡兵のほうはタイミングさえ測ればよかった。

傀儡兵はアースラを警戒し、玄関口にほとんどが行くはずだ。

残りの物は魔導炉の警護に回るはず。

こちらは空戦ができないカズトは手出しができないので、なのは達に任せる。

しかし魔導炉のほうはどうにもならない。

原作ではなのはが封印砲を用いた砲撃を使って封印していたが、カズトたちにそんなことはできないのだ。

つまり二人にはどうしようもなく、なのはたちを頼るしか方法がない。

だが、なのはたちは玄関口で傀儡兵との戦闘で多少とはいえ時間を取られてしまう。

早期解決が目的の二人からすれば、その少しの時間すら惜しい。

よって、ここで俺の出番となる。

あらかじめ潜入することで、アドバンテージをとり、なのはたちがくるまでに傀儡兵を破壊し時間に余裕を作り、魔導炉の破壊までの時間を短縮させる。

そのために現在、時の庭園を爆走しているのだ。

カズトは俊敏パラメータが許す範囲で最高の速度を叩きだし、オリジナルの高速移動魔法　瞬動を連発。

もはや走るといふより飛ぶのほうが表示が正しい移動方法で玄関口を目指し、数分間走ったころ、ようやく時の庭園の玄関口に到着した。

「はあ……はあ……」

あたりを見回すがアースラの人員が戻ってきたようすはない。

一心不乱に走っていたため、プレシアが魔法を使ったのかわからない。

肩で息をする呼吸を整えつつ、状況を確認していく。

……まだ、プレシアは暴走を開始していないのか？

不安に思っただけあたりを見回していれば遠くから足音が聞こえる。

……武装隊が戻ってきたか？

違う、足音が若干人工的だ。

よく目を凝らせば、傀儡兵の群れ。

基本を金の人型とし、その手には剣を装備している。

キラリと光る剣にすこしびびる。

魔獣の爪なんかは見慣れたが、人が作った凶器を向けられるのは初めての経験だ。

冷静に対処しなければならぬのに、体が萎縮してしまう。

こういうときは違うことを考えるに限る。

……なんで武装隊帰ってこないんだろう？

帰ってくるのをタイミングに図ろうと思っていたのだが、でも待てよ。

そういえば、リンディ提督が緊急回収していたような気が……

でもそれができるなら、そこに直接武装隊を送るはずんだけど、してないってことは……

冷静になるために考えをめぐらせようとしてあふれ出た疑問に、体が動きを止めてしまう。

つまり、結局は体を動かしていないことになってしまった。

傀儡兵の目が赤くひかる。

カズトを敵と認識したのか、姿に似合わず駆け出し、その右の剣で

斬りつけてくる。

「うおっとー！」

それを後ろに飛ぶことでカズトは回避する。
完全に脳天力チ割りの軌道だった。

……プレシアのことだから、非殺傷設定とかしてないんだろうな。

その考えが頭のなかで生まれると背筋が冷たくなる。

目の前に移るのは少なくとも三十近い傀儡兵。

奥にもかすかに見える。

数えてみれば切りよく100体いた。

「一対百なんて、御伽噺に出てくる英雄でもなければ無理なことだろう。」

普通なら死刑コースまっしぐらだ。

圧倒的数の戦力差というものは簡単には覆せない。

囲まれ、背後からの一撃を受ければそれで終了だからということもあるし、何より一人の体力では足りないからだ。

しかしそれをわかっていながらも、一カ月半の戦いを経験したカズトからすれば今の状況は

「上等オー！」

望むところだった。

鉄槌が鉄を打ち据えるような鈍い音が響く。
息つく暇無く音は六度、繰り返す。

沈黙。

また六度、音は繰り返す。

一連の流れは、途切れず機械のように音を生み出す。

「ハッ！！」

ひたすらに音を量産するのはカズトだ。

攻撃をする度に、傀儡兵が一体、また一体と破壊されていく。

「所詮は機械、この程度か！」

その顔に、数の不利を悟るものは無く、ただ笑みがある。

勝利を確信するような、否、確信した笑みを貼り付け、拳を振るう。

連続した六度の攻撃は正確に傀儡兵の頭を叩き、粉々にする。

崩れ落ちる傀儡兵を乗り越え、アリのように奥から現れる傀儡兵もまた、同じ末路をたどる。

すでに三十の傀儡兵が倒れたというのに、彼らは未だに対策が取れないでいた。

だが、傀儡兵が機械である限りこの結末は当然の帰結だった。

傀儡兵を続々とスクラップにさせる最大の理由は、カズトの攻撃魔法《居合い拳》にあった。

ただポケットに手をいれ、立ち尽くしているだけの構え。

突発的なことには、なんの対応もできないであろう、傀儡兵もそう認識していた。

しかし実態は違う。

ポケットを刀の鞘と見立てて、居合いの要領で目にもとまらぬ速さで拳を繰り出しているのだ。

肉体強化系の魔法によって加速された拳は前方へ飛ぶ拳圧を生み出し、射程は10m前後まで伸びる。

所詮拳圧である以上威力は低い、その技の発動は恐ろしく静かで、早く、連射も効く。

レベルを上げている時にふとした思いつきから試してみたらできた魔法だが、カズトからすれば牽制としてはこれ以上ない使い勝手をもちスキルだ。

そしてこの構えが傀儡兵を惑わせていた。

傀儡兵は高性能で、メインカメラから得た情報进行处理し、相手の拳動を分析、把握までする優れモノだ。

だが、機械の範疇を超えることはない。

膨大なデータから作られたアルゴリズムには類似するもののない行動にはどうしようもなかったのだ。

もし居合い拳で打ち出されるものが魔力をまもっていけば、魔力を感知し、回避もしくは防御の手段がとれたかもしれない。

もしただ拳圧ではなく、物質としての質量があれば、カメラが認識し、迎撃できたかもしれない。

もしカズトが武器を持たない一般人のような構えでなく、何かしら武器を持っていけば、違ったアクションを取れたかもしれない。

それゆえ、傀儡兵にとってカズトのスキルは認識できない攻撃であり、対処することすらできないのだ。

そうして、今なお傀儡兵はカズトの未知の攻撃を前に地に沈んでいるのだ。

一方カズトは傀儡兵が前に進んで転送ポートに行かなくてはならない通路に陣取って迎え撃つという、陣地の理を持って迎え撃つてていたが、時間の経過と共に焦り始めていた。

傀儡兵の数は多少多いが予想の範囲内だった。

しかし考えていたよりも傀儡兵のメインカメラ部　この傀儡兵は頭部だった　が硬かったのだ。

居合い拳は威力が小さいが、三発も打ち込めばカメラごととき破壊できるだろうと根拠もなく考えていた。

だが、実際にやってみれば六発撃ち込まなければカメラを完全破壊できなかつた。

実はこの居合い拳には厄介な性質があった。

一回使うたびにHPもしくはMPが減っていくのだ。オンラインゲーム風の能力ここに極まり、といったところか。さっき使っていた瞬動もそうだ。

漫画やゲームを参考にミコトと作り上げたスキルだが、そのどれもが使用にHPないしMPを使わなくてはいけない。

どうやらこのHPというのはまさしくカズトの体力を表しているらしい。

だから運動をすればするほど、HPは減っていく。

例えば居合い拳ならば一回の発動に30のHPないしMPを使う。

つまり傀儡兵を一体倒すためにはこれを一度に六発使うため、一体ごとに180のHPないしMPを消費するということになる。

潰した傀儡兵は約半分の48で、居合い拳で180×48＝8640使用している。つまりHPの3/4に匹敵する量を使ったわけだ。カズトのHPはLV38で10750、MPが8850。

ここに来るまでの瞬動連発で43回使用している。

瞬動で使用したMP3010を引いた残り8850 - 3010＝5840で、居合い拳5840 - 8640＝ - 2800を使用したので、実際に使ったHPは2800となる。

また、もともとカズト達には自動でHPが回復していく能力がある。能力と言っていていいかは微妙なところだが、自動でHPないしMPが回復していくのだ。

これのおかげで三十秒×4%のペースでHPを今の時点で回復している。

この値はどうやら防御の値に比例しているらしい。

つまり五分(300秒)×430＝4300

よって現在のHPは10750 - 2800＝7950に回復した4300を加えた10750と全開になってはいる。

またひとつ傀儡兵を破壊しながら、視界の右上に移るHP残量を見ると、着実にその量は減っていつていた。

カズトは自分の使用エネルギーを考えて、どうにかしなければならないと焦ったのだ。

確かに今はHPが全開だからいいだろう。しかしもうMPは空っぽだ。これからはHPがどんどん減っていくのだ。

もし残り半分の52体の傀儡兵を五分で倒したとしよう。

すると、 $52 \times 180 = 9360$ で、ヒーリングが4300となり、使用HPが5060になる。

つまり10750（現在の残りHP） - 5060（52体の傀儡兵に実質使用するHP） = 5690。

HPが半分しか残らないわけだ。

しかもこれは一度も失敗をしなかった場合だ。

もしかしたら一度くらいミスをするかもしれない。

そうなれば少ないHPがさらに少なくなることになる。

未だに攻撃は受けていないのでわからないが、不意打ちで一撃でも受ければ5690なんてすぐになくなるだろう。

カズトはDEXにほとんど振ってないし、何よりバリアジャケットなんていいものは着てないのだから。

アースラ組に間違われて魔法をくらっても無くなる。

傀儡兵に余剰戦力があるだけでこっちはもつと厳しくなる。

それを倒した分だけこっちはHPが減っていくのだから。

またひとつ、傀儡兵を潰しつつも、カズトの冷や汗は止まらない。

さっきは上等などと叫んだが、カズトはまぎれもないピンチであった。

もつとこいと思っていたハイテンションな十分前の自分を殴りたく
なったカズトであった。

ともかく、現状のままであればこの戦いは高確率で勝つが、カズト
のHPが5690 最大HPの1/2 ではその後の戦いが厳しい
ものとなってしまふ。

それではだめなのだ。

おそらく失敗するだろうこの作戦ではミコトが傷つく可能性もある。
それをさせないためには、ミコトの近くにいななくてはかばえない。

だがHP5690では、足手まといになる可能性が高い。

どうすればいい？

あくまで冷静になるように努めるが、焦りは止まらない。
こうして傀儡兵を壊す間にもカズトのHPは減っていく。

このままでは焦れたミコトが一人でプレシアと戦ってしまうかも知
れない。

これならば、念話をもつと練習しておけばよかったと一
人愚痴る。

カズトの念話可能範囲は狭いのだ。この時の庭園のどこかにいるミ
コトに届くとは思えない。

念話をもつと練習しておけば、今の状況をミコトと相談できたはず。
ステータスの関係上、念話をあまり練習しなかったことが裏目に出
た。

数は減らしたし、なのは達を残していくか？

いくつかの案が浮かぶが、できない。

迅速な魔導炉の封印は必須だ。

封印することでプレシアのジュエルシールドへの影響力を少なくし、リンディ提督による次元振の抑制という構図が完成するのだから。

その時、出口のない思考の迷路を彷徨っていたカズトの下に、影が落ちた。

「ッー!!」

咄嗟に後方に飛び退く。

すると、カズトがいた位置で轟音と爆風が舞う。

上空から何かが落下した。

それも巨大な何かだ。

もし避けるのが遅れていたら、その重力も合わさってペチャンコになっていた。

そう理解し、砂埃りのなか見上げたそこには巨大な傀儡兵が立っていた。

「おいおい……ウソだろ……」

照明の光を青く反射するそれは、原作で魔導炉を守っていた二対の傀儡兵のうちの一体だった。

見上げるような体躯をもつそれをよく見れば、少しだけ歪んで見える。おそらく魔力障壁だろう。

カズトはこれに近い現象を旅の途中で、魔獣が何度も使っているのを見ている。

同時にその硬さもわかってしまった。

勝てない。

常に冷静であろうとする理性が、正確に現状を分析する。視線を戻せば、通路に押しとどめていた傀儡兵も続々と現れていた。これで地の利も消えうせた。

巨大な傀儡兵とその配下達を前にどうすればいいのか？並列思考を用いて指向していくが、何の答もでなかった。

いや、するべきことはきまっている。

傀儡兵をすべて倒せばいい、それが実現可能なら。だが、この巨大な傀儡兵を相手にしながらそれができうるのか？この戦力差では逃げることにすら怪しいというのに、倒すなどもつてのほかだろう。

固まっていたカズトをよそに、傀儡兵の前方に魔力が集中していく。魔力弾だ、それもかなりのの。

それを見たカズトの思考が真っ白になった。この通路では逃げ場がないことに気がついてしまったからだ。

半分を切ったカズトのHPを消し飛ばすにたる魔力をチャージし終えると、なんのためらいもなくカズトへと撃つ。

目の前に迫った魔力に一步も動けない。

いや、どこに動けばいいのかわからない。

数秒後に訪れる絶望を前に目を閉じるその瞬間

桜色の魔力光がカズトの視界を覆い尽くした。

同時に爆音と衝撃。

中心の近くにいた俺はたまらず、吹き飛ばされる。

地面を転がった衝撃ではつとなり、現状を理解した。

おそらく傀儡兵の魔力弾を桜色の魔力が相殺し、その余波で吹き飛ばされたのだろう、と。

まさかあの子が……？ なら傀儡兵は……

魔力光の残滓がおさまった視界のなかには、予想した通り、巨大な傀儡兵の残骸だけが残っていた。

もはや、これから最初の姿を予想することはむずかしい。

「あ、あのつ、大丈夫ですか!？」

突然、あまりのことに呆然としていたカズトに声がかけられる。

聞き覚えのありすぎる声に振り向けば、そこには思った通り、以前みた魔法使い（主人公）がいた。

第五話 「上等オ!!」 (後書き)

五話時点でのカズトのステータス。

LV 38
EXP 240500

*LV1ごとのポイント=10

HP 10750 (4800+5950) *初期値1
 000+LV×100+DEX×50
 MP 8850 (4800+4050) *初期値10
 00+LV×100+INT×50
 STR 38 (42+0) *初期値5+LV×
 1+ポイント 主に筋力に影響
 DEX 119 (42+76) *初期値5+L
 V×1+ポイント 主に防御に影響
 LEG 308 (42+266) *初期値5+
 LV×1+ポイント 主に俊敏に影響
 INT 81 (42+38) *初期値5+LV
 ×1+ポイント 主に魔力に影響

第六話時点での高町なのはのステータス



高町なのは

L V 36
EXP 194837

*LV1ごとのポイント=13

HP 6700 (4600 + 2100) *初期値10
00 + LV × 100 + DEX × 50
MP 39800 (4900 + 34900) *初期値
1300 + LV × 100 + INT × 50
STR 37 (37 + 0) *初期値1 + LV ×
1 + ポイント 主に筋力に影響
DEX 42 (42 + 0) *初期値5 + LV ×
1 + ポイント 主に防御に影響
LEG 37 (37 + 0) *初期値1 + LV ×
1 + ポイント 主に俊敏に影響
INT 698 (230 + 468) *初期値

50 + LV × 5 + ポイント 主に魔力に影響

アクティブスキル

・デインバインシューター：LV4 (352/)

MPを50消費し生成する。

非常に操作性の高い魔法弾を生成する。

このレベルでは12個の魔力弾を完全に操作することができる。

・デインバスター：LV4 (304/)

MPを2000以上消費し使用可能。

自らの魔力を圧縮し撃つ長距離射撃用魔法。

このレベルでは500m以内はうごかない標的に対してほぼ必中となる。

・スターライトブレイカー：LV (/) *レベルが存在しない。

MPを最低1以上消費して発動可能。

周囲の魔力を集束し巨大な魔力弾を作り撃つ、遠距離系広域殲滅型高濃度魔力集束砲。

自らの魔力を上乗せすることで威力の上昇を図ることができるが、その魔法のコンセプトは”使いきれずに散らばってしまった魔力”

の利用であるため、実際にはトリガーを引く魔力さえ残っていれば使用可能である。

・フライアーフィン：LV5（456ノ）

使用時間、使用出力に応じて使用魔力が変化

足元に飛行魔法の核となるフィンを生成し、飛行を可能とする。

パッシブスキル

・分割思考：LV6（581ノ1000ノ）

自らの思考を複数に分けことで、並列的に考察することを可能とする。

このレベルならば、完全な思考を可能とするものを3つ。簡単な思考ならば14まで展開できる。

・魔力的ダメージ：LV（ノノ） *デバイスによる非殺傷設定のためレベルが存在しない

魔力を用いて行った行動全てに、魔術的保護を施し、相手を非殺傷で確保する技術。

このレベルならば限界を超えた魔法以外の全てに適用可能となる。また、任意にスキルを使うか選択できる。

・念話：LV (/) *レベルは存在しない

魔力を用いたあらゆる会話を使用可能にする。

特殊技能

・主人公補正 ただ前へと進む者 : LV (/)

おもに経験値と、戦闘時の体調、カリスマに影響を及ぼす。

世界の中核をなす人物のみがもつことができる。

彼らは目の前の困難に屈しない限り、常に世界からの補正がかかり続ける。

・特化技能《集束》：LV (/)

こと集束という分野において一切の追隨を許さぬ才能を発揮する。

高町なのはは集束という点において、歴史上類を見ないほどの才能を誇る。

その集束はどんな方法を用いても出すことのできないほどの収縮率を叩き出し、彼女の魔法の根幹を支える。

第六話 「なに、執務官はだてじゃない」

「どうして民間人がここににいるのかは、わからないがまずは残りの傀儡兵だ。なのはは彼を監視していてくれ」

俺が呆然と彼女を見ていたのは一瞬。
すぐさま我に返る。

すると桜色の魔導師高町なのはの隣に立っていた黒い魔導師がそう
いった。

肩のとげとげしか印象に残りそうにない服装をしているこいつが、
たぶんクロノだろう。

なるほどたしかに背が小さい。
本当に俺の二つ上なんだろうか？

身長がコンプレックスだと周りにいじられていたが、前世では俺も
もっと身長がほしかったのであんまり笑えない。

そうやって、きっと君も大きくなるさ、と優しい目線で見れたのは
ほんの少しの間だけであった。
そう、ほんの少しだけだった。

クロノは通路からあふれ出す残りの傀儡兵を睨みつけると、デバイ
スを構え、魔力を練る。

「なのはは魔力を温存していてくれ。ここは僕がやる」

「え、でも！」

「なに、執務官はだてじゃないさ」

クロノはそう言い残し、傀儡兵に走り出すと、先端が鋭く上がった魔力弾　ステインガー・レイ　を発動。魔力を圧縮し先端を鋭利な物とすることで、少ない魔力で敵を撃破できるように改良がくわえられているのだらう。

魔力弾の軌道は単調であるものの、速度は以前のものは以上で、瞬く間に前面にいた傀儡兵のメインカメラ、動力部を正確にスクラップにする。

それだけに終わらない。

対象を打ち抜いた魔力弾は、霧散せずにそのまま後ろの傀儡兵を貫いていく。

練度の低い魔導師の魔力弾は、強い衝撃や魔力とぶつかったり、時間の経過で霧散していくのだが、よほど強固に魔力弾を作ったのだらう。

少しずつ削れて小さくはなっていくが、わずか八個の誘導弾で残り35の傀儡兵を破壊してしまった。

なんとという魔力運用技術！

戦闘の無駄をとことん切り詰めたその魔力弾に目を奪われる。

少ない魔力を効率よく運用しているのが非魔導師である俺にも分かった。

圧倒的な魔力運用技術とは、言いかえれば努力の集大成のことだ。基礎に基礎を、努力に努力を重ねた者が手に入れる境地に、目の前の青年は辿りついているのだ。

一体どれだけの訓練をしたのだらう。

クロノの戦技の前に今の俺は足元にも及ばない。

事実、俺が八分近くかけて行った戦果を、クロノはわずか三十秒足らずで叩きだしたのだ。

その力量の差に嫉妬すら浮かばない。

これが原作に関わる人間の力量。

これが法の番人、執務官の実力。

その事実の前に、ただ身ぶるいする。

もう通路には傀儡兵の残骸が残るだけだ。

第六話 「なに、執務官はだてじゃない」

クロノは通路にいた兵が全滅したことを確認すると、息を吐き、なのは達の所へ戻ってくる。

カズトを一瞥した後、虚空に向かって「三言いうと、カズトに水色のバインドをかけた。

「――！！」

バインドとは、魔力によって編まれた捕獲用の魔法だ。

より丈夫なバインドを編むためには、魔力を練り、綿密な構成の元で出せる。

しかし、魔力を練る時に相手に察知されるのが普通なので、いかにばれないように設置するかが戦闘の要になる。

俺はそのバインドが姿を現すまで、全く気がつかなかった。

いや、気がついたことは気がついたが、避けられなかったのほうがいいか。

魔力の高まりを感じた瞬間に後方へ飛ばうとしたときにはバインドがかけられていたのだ。

魔力弾をみてわかつてはいたが、とんでもない構成力だ。

捕獲され試しに力を込めてみるが、びくともしない。

以前、環境保護隊とか名乗る局員と戦闘になった時もバインドをかけたけれど、その時はすぐに破壊して脱出できた。

今までの魔導師への認識は執務官には通用しないようだ。

エリートの名は伊達じゃない。

「ク、クロノ君!？」

突然のバインドになのはが抗議の意味を込めてクロノを見るが、クロノのひと睨みで肩を縮めてしまう。

「なのは、ここは戦場で敵地だ。この男が何の目的でここにいるかは分からないが、不審な点がある以上一時拘束をしなきゃいけない」

「でもお話も聞かないでバインドなんて……」

「僕たちには時間がない。こうしている間にも次元振の予兆は始まっているんだ。ゆっくり話している暇はない」

「……………」

なのははすこしうつむいてしまったが、俺はなるほど、とむしる納得していた。

……最初はバインドにかけられて焦ったが、クロノがバインドをかけたのは当然だろう。

今の俺はかなり怪しい。

警戒するに足る状況だ。

まずここに『今』いることが怪しい。

時の庭園は次元航行空間に位置しており、ここに管理世界の一般人が紛れ込む可能性はほとんどない。

ないことはないが、宝くじに当たる確立より低い確立なんじゃないだろうか。

管理外世界に囲まれたここに来るとしたら魔法を使えない人間だ。となると来る確立はさらに少なくなるだろう。

とはいえ、本当に漂流者なのかもしれない可能性がないわけではない。
次元航行空間を漂流し、時の庭園にたどりつく可能性もとんでもなく低いがおじやない。

だか、時の庭園では何が起きている？

Aランククロストロギア ジュエルシード 絡みの事件が起きているのだ。

次元崩壊規模の事件の渦中に、魔法を使えない一般人が来る。

さらにその一般人が魔法を使わずに傀儡兵を壊している。

これで俺が一般人である確立は、すでにあり得ないと切り捨てていいほどだ。

あり得ないと切り捨てていくくらい低い可能性よりも、ジュエルシードを奪いに来た犯罪者のほうがよっぽど可能性がある。

だからクロノはバインドを俺にかけた。

俺が何者かなど判別している時間は無い。

今しなければいけないことは、ジュエルシードの暴走を止めることだ。

詮索はあとでいい。

俺は心の中で舌打ちをした。

無意識のうちに、原作組と出会えばすぐに共闘できると勝手に考えていた。

これもまた原作を知っているがゆえの弊害だ。

物語の登場人物がやさしいことを知っているからこそ、彼らなら大丈夫と思っていた。

たしかに彼らはやさしい。

犯罪まがいのことをしたフェイトの境遇を想い、手を貸したし、罪のない人々を助けるために身を粉にして働いている。

だがそれは初対面の不審な男にまでやさしいわけじゃない。

むしろ一般的感性と同様に警戒するのが当然だ。

俺はこの警戒をどうにかして解こうと口を開いて　何も言えなかった。

なんとさえばいい？

私は怪しくありません？

むしろ怪しいじゃないか。

共闘しませんか？

今はまだフェイトがいないから戦力が足りていないが、こんな初対面の怪しい奴の力を借りるデメリットを犯すほど戦力がないわけじゃない。

このバインドを説いてください？

論外。

しかし、このままでいるわけにもいかない。

そのうちミコトが特攻をかけてしまうかもしれない。

用意周到に準備したと言っていたから、単独でも戦えるのかもしれないが、できることならば近くにいたい。

……どうする、どうすればいい。

「なのは、いくぞ」

「あ、うん。ごめんなさい。あとで必ず迎えに来ますから！」

ほんの少しの時間も惜しいのだろう、俺を置いて先へいこうとする。なのはも申し訳なさそうに頭を下げてるが、そのことは頭に入っ
てこなかった。

そうやってクロノのあとをなのはが追うその瞬間

「ちよつと待つてくれ！！」

名案を思い付いた。

「なあ！ 君、高町なのはだろ？」

俺の待ったを悪あがきと思ったのか、そのまま走ろうとしたクロノ
だったが、一度も言っていない高町の名を出されて足が止まる。

「……なんでなのはのを知っている」

かかった。

明らかな警戒を見せるクロノ。
だが、このまま放置はどうしても避けたいカズトからすれば、この
会話はチャンスだ。

「遅れたけど、俺は内田和人。そこの高町なのはの実父高町士郎に
恩義があつて、手を貸しに来たんだ」

二人が驚く雰囲気伝わってくる。
なのは特に大きく目を開き、こっちを見ている。

士郎さんから写真で見せられ知っていたとしても、こんなところにいるなんて思わないはずだ。

だから、今まで俺がカズトだと気がつかなかったはずだ。

実際それを狙っていたからこの反応は予想通りだ。

今まで名前だけ聞いていた人間が現れたのだから、それだけ驚くのも無理はない。

「…………カズト君…………？」

「なのは、知っているのか？」

クロノはなのはの驚きようをみてもまだカズトを信用できず、なのはに確認をとる。

「う、うん。何度か、写真でお父さんに見せてもらったことがあるけど…………」

「そうか…………」

わずかな静寂が場をみたす。

あと一步と思い、口を開こうとした、その時

「！？ これはっ！！」

「な、何！？」

「！！」

膨大な魔力流が俺達に襲いかかってきた。

時の庭園深部から外へと拡散する波動のようにあふれ出る魔力流。

おそらくジュエルシードの暴走。

プレシアが魔力を用いてジュエルシードを蜂起させたのだろう。

原作ではフェイトが町中で強制発動させて発見し、なのはとの戦いでジュエルシードが暴走したときは、たった一つの暴走で空にかかっていった雲がすべて吹き飛んだ。

その威力推してしるべし。

あふれ出る魔力流は濁流に流される流木のようになのは達を飲み込み、押し流す。

魔導師組の二人は流されながらも、バリアジャケットの出力を上げて身を守ることで大した怪我はしていない。

一方俺は勢いよく押し流されたせいで壁に叩きつけられるが、その衝撃と魔力の奔流によってバインドが粉々に砕けた。

バインドから壁にぶつかつたおかげでほとんどダメージは無く、粉々になって散っていくバインドをみて笑ってしまう。

カードを一枚切ろうとした途端に、これだ。

運がいいのか、悪いのか。

少なくとも名前を名乗ったのが吉と出るか。

もしこれ以上管理局と接触してほしくない第三者がいるなら、あわてて事故を起こしたようなタイミングだ。

これもまた、神様の介入なのかもしれない。

あんたは一体何がやりたいんだ。

一人虚空に毒づくが、経緯はともかくチャンスだ。

厄介なバインドが無くなった今しかミコトの所へ行くすべはない。

バインドがとけていることにクロノが気がついたようだが、またバインドをかけられるのはゴメンだ。

俺は立ち上がると一気に深部へと走り出す。

このままいけば二分程度で深部に辿りつく。

こういう時のために内部の通路は暗記してある。

最短ルートを瞬時に思い出しながらさらに速度を出すために瞬動を使うことにする。

が、一言言うのを忘れていた。

これを忘れたら洒落にならん。

走りながら振り返り、大声をだす。

必ず伝えなくちゃいけないことだからな。

「なのは！ 魔導炉の方任せた！」

言い終わるとすぐさま瞬動を発動、通路の闇に消えていった。

クロノ・ハラオウンという男は、ある意味で魔導師の理想形だ。

クロノは一流の技術を持っているが、魔力量はそこまで多くない。あくまで一般管理局員より持っているという程度だ。

執務官の中で比べるなら、下から数えた方が断然早い。しかし、それらを合計した戦闘となると彼はとたんに上位へと食い込む。

彼は圧倒的な魔力運用技術をもって戦う、まさに魔力量が少ない魔導師からすれば目指すべき形といってもいい魔導師だ。

とはいえ、そこまでの強さを得るまでの道のりが楽なものだったわけでは決していない。

クロノは魔力量の差を埋めるために幼いころから魔力運用技術を必死にあげた、経験をつんだのだ。

それこそ死にかけるような訓練をしてきたのだ。

その辛い経験をのりきれた理由には、管理世界に知れ渡る名門ハラオウン家の跡取りとしてのプライドがあったこともあるだろう。

歴史にも名を残したことのあるハラオウン一族の人間は大量の魔力を保有して生まれてくる。

もしくは母リンディのようにレアスキルをもって生まれてくる珍しい一族だ。

まさに魔導師として最高の特徴を持つ系譜ともいえる。

だが、クロノは違う。

初めて行われた能力測定では過去最低の魔力値をだし、レアスキルもなかった。

あの瞬間ほど神を呪った時はない。

父や母の力を継いで立派な魔導師になりたかったのに、自分の魔力量では一流にギリギリなれる程度の魔力しか持てないと知らされたからだ。

幸い両親はクロノに惜しめない愛情を注いでくれた。

しかし、クロノに期待していた人間は、彼を落ちこぼれとさげすみ、その子供たちも彼をそう呼んだ。

子供の純粋な悪意ほど傷つくものはない。

クロノは一時ふさぎこみ、両親に「こんな落ちこぼれが生まれてごめんなさい」とあやまったことすらある。

そんなクロノに二人は、おまえは私たちの息子だ、そういつて抱きしめた。

あふれ出る涙を止めることはできず、その愛情に、この二人の元に生まれたことを感謝した。

その愛情に触れてクロノは決めたのだ。

自分は両親が誇れる大人になる、と。

だからクロノは必死で魔力運用技術をあげ、経験を積み、ここまで来れた。

クロノは自分の能力をはつきりと認識している。

才能がたいしてないことなんて、とっくの昔にわかってる。

魔力がもう増えないことはよくわかってる。

自分がたいしたことない強さだと認識しているがゆえに、より多く

の手札と経験を求め、ここまで強くなった。
そんな一流の魔導師であり、それにふさわしいだけの知識を持つクロノだが、その知識の中にも、たった一步で10メートル以上を魔力による強化なしで移動する方法はなかった。

カズトと名乗る男が魔力をもちいらすに傀儡兵を淘汰していると聞いたときは耳を疑った。

そして現場に直行し、実際に目でみて　　呆然とした。

ただ立っているだけだというのに、次々と傀儡兵が破壊されている様は、まるで映画のように現実味のないものじゃないか。

さらにいうなら、拳を振るい出る拳圧で敵を倒せるといふのになぜ一タポケットに手を入れるのか不思議だった。

効率を考えるなら、そのまま連続して振ったほうが早いはずなのに、いや、そもそもなぜ拳圧で傀儡兵が破壊できる。

一体あの男はどれだけの早さで拳を振るっているんだ、どう考えてもあり得ない。

明らかに物理法則を超越した光景に一瞬見入ってしまったのは、仕方ないといえるだろう。

その点、なのはは巨大な傀儡兵にすぐさま対応したのは見事だと言える。

しかしクロノは呆然としていても頭の片隅で、執務官として冷静に彼が対なにもものなのか思考していた。

……敵か否か。

それはこうして話してみても決まった。

敵だろう。

いや、敵ではなくともジユエルシード目的か。

一瞬まきこまれた一般人かと考えもしたが、その可能性は無くなつた。

傀儡兵を叩き潰しておいて、一般人などありえないし、一般人ならクロノたちが来た時点で保護の要請何なりしているはずだ。

今は暴走による余波で彼には逃げられてしまったが、彼に何かできるとは思えない。

傀儡兵にあれだけのアドバンテージがありながら、長時間の戦闘をしていたのだ。

傀儡兵一体いつたいに時間がかかっていたことから、攻撃力不足が伺える。

あの程度の攻撃力ならば、クロノはともかく、なのはの防御は貫けない。

もしかしたら切り札のようなものがあるかもしれないから、油断はできない。

それになのはも彼が気になって実力が出し切れないかも知れない。

彼がここにタイミングよくいたのも気になる。

もしかしたら内通者もしくは協力者がいるかもしれない。

そうなるならさらに厄介だ。

とわいえ一番の問題点は彼がここにいることで場が混乱することだ。

ここに不確定要素の彼がいると、それだけ場が混乱する。

この緊急事態でそれは歓迎できない。

……ならばどうするか？

尋問をして内通者がいるか聞いてもいいが、それに時間をとられれば本末転倒だ。

となると、捕獲して、放置。

これだろう。

捕獲することで、彼の動きを封じ、なおかつ時間もそれほどとられない。

彼の目的が分かっていたら、協力もできたかも知れないが、それは無理だろう。

それだけの信頼関係を築く時間がない。

しかし、なぜ彼はこの場所で戦っていたのだろうか？

確かにここは狭い通路で彼の攻撃方法からすれば、傀儡兵は良い鴨だ。

だが、ここで戦闘を行わずともある程度は無視してジュエルシードの方に向かったほうが効率的なはずだ。

それに最後の、魔導炉についての言葉も気になる。

なぜ、こちらに頼むのだろうか？

魔導炉自体は傀儡兵と時の庭園の動力源として使われており、時の庭園の制御分の魔力がジュエルシードの制御に使用されている。

ジュエルシードの実験がしたいのならプレシアを排除し、その後魔道炉を使用して実験を行ったほうが楽で費用もかからない。

止めるということは、これは当てはまらない

ではジュエルシードがほしいのか？

確かに魔道炉を止めることで、管理局より早くプレシアに辿りつけば一時は手に入る。

だが、ここまでジュエルシードが空間に影響を与えては、しばらく転移魔法を使用する事はできない。報告では近くに運航船もないとの事だから、逃げる脚も無い。それでは管理局が時の庭園で彼らを捕獲するもの時間の問題だ。

傭兵との戦いで有利に進めようとするあの姿勢を見るに、彼がそれに気が付かないわけが無い。

しかも彼は本名を名乗ってしまった。それではすぐに足がつく。

管理局は管理外世界に影響力は低いが、一人探すくらいなら簡単に行えるだけの組織力はある。

クロノは彼が何をしたいのか分からなかった。

プレシアのところへと走りながら考えた事は、あいつは何かするはずだ。

だから、油断するな。

という、いたってシンプルなものだった。

自分は執務官なのだから、事件の解決に全力を尽くすことが第一であると、気を引き締める。

なのはと行動を別にし、時の庭園深部へと足をむけて早数分。最初にプレシアがいた場所を目指して走る。

途中残りの傀儡兵が襲いかかってきたが、それらすべてを極力魔力を消費しないようにしながら、粉碎。

そして、とうとう庭園のそこへ辿りついた。

金で装飾された巨大な扉。

荘厳な雰囲気醸し出すそれには鍵がかかっているのか、少しくらい押してもびくともしない。

時間がない。

クロノはそう判断し、プレイズキャノン砲撃魔法を発動、扉ごと吹き飛ばすことにする。

デバイスに命令を送り、魔力の流れを操り、いざ放出せんと扉を睨みつけたその時

「いやあああああああああああ！！！！！」

扉の奥から鼓膜を震わす悲鳴が聞こえた。

第六話 「なに、執務官はだてじゃない」(後書き)

一般人Aのステータス

Aさん(戦闘力たったの5か、ゴミが)

LV 12

EXP 3216

*LV1ごとのポイント=3

HP 2810 (2200+710) *初期値100

0+LV×100+DEX×30

MP 0 (0+0) *魔力を保有していない

STR 34 (17+17) *初期値5+LV

×1+ポイント 主に筋力に影響

DEX 27 (17+10) *初期値5+LV

×1+ポイント 主に防御に影響

LEG 26 (17+9) *初期値5+LV×

1+ポイント 主に俊敏に影響

INT 0 (0+0) *初期値5+LV×1

+ポイント 主に魔力に影響

現時点でのクロノのステータス

LV 65

EXP 1572992

*LV1からのポイント=7

HP	14000	(6200+)	*初期値1000+
LV×80+DEX×50			
MP	11855	(1000+10885)	*初期値
1000+LV×0+INT×35			
STR	152	(70+82)	*初期値5+L
V×1+ポイント		主に筋力に影響	
DEX	156	(70+86)	*初期値5+L
V×1+ポイント		主に防御に影響	
LEG	116	(70+46)	*初期値5+L
V×1+ポイント		主に俊敏に影響	
INT	311	(70+241)	*初期値5
+LV×1+ポイント		主に魔力に影響	

第七話 「不吉を、届けに来たわ」

閃光が空を走る。

プレシアの手元から打ち出された閃光は稲妻だ。それは一瞬で皮膚を焼き、肺を焼く死の稲妻だ。秒速150kmにも届く速度の死を避けることは誰にもできまい。

だが、それが何時何処を通るのか、どこを狙っているのかわかるのであれば、避ける避けないの話から、当たる当たらないの次元へと移り変わる。

当たらないものを脅威と呼べるのか？

否、呼べはしない。

脅威をなくした攻撃はただの見世物へと成り下がる。

事実、稲妻の対象であるミコトの顔に負の感情はない。

軽々と閃光を防いで見せる。

その表情は、この程度なのか、とプレシアへと問いかけているようだ。

「なるほど……信じられないことをするのね、あなた」

対するプレシアの表情は驚嘆。

プレシアは数回の攻防の果てに、少女に感嘆の意を送る。

よくぞわたしの雷撃を防いで見せたわ、と。

彼女が放った魔法を目の前の少女は思いもしない方法で防いだからだ。

そう、この幾多の次元世界でも100人足らずしかいない大魔導師と呼ばれる人間であるプレシア・テスタロッサの魔法をだ。

そもそも大魔導師という名は、機械で再現することができない魔法を行使する者に送られる『二つ名』だ。

プレシアは攻撃魔法そのものに次元転移属性を付加することで発動する高難易度魔法　次元跳躍魔法の使い手として大魔導師の名を送られた。

この次元跳躍魔法は、非常に難易度が高い。

まず、転移魔法と砲撃魔法を同時起動できるだけの、処理能力と魔力を要求される。

そして、高密度の順魔力の塊である魔法を正確な地点へと転移させることのできるほどの魔力操作。

むき出しなつた魔力そのものを転移させるほどの技術を使用しつつも、攻撃魔法を維持させる　まさに神業。

プレシアはこの魔法で、若い頃は魔導師100選に常連として乗っていたほどだ。

異なる次元世界から一方的に攻撃することを可能とするこの魔法は、まさしく『無』敵。

なぜなら、魔法の行使者が違う世界にいるのだから。目の前に居ない相手など敵にすらなりえない。

さらに、プレシアの場合は先天性技能の魔力変換による電撃の付与まであるのだ。

光の速度にも届く稲妻を察知してから避けることはできず、奇襲で

この魔法を使ったとき、プレシアは歴史でも類をみない97%の撃墜率を叩き出す。

彼女が仕留められなかったのはただ一度だけだ。

受ける相手からすればどうやっても止められない天災のようなもの。終わるのをただ待つだけしかない。

プレシアは戦場に現れずして、戦場を稲妻とともに支配する女王。

ゆえに彼女は大魔導師の名とは別に、もうひとつの名をもつ。

電撃使い《エレクトリックマスター》

そう呼ばれた彼女だからこそ、こと電撃というカテゴリーでは誰よりもうまく使える自信があった。

事実彼女の稲妻はほかの魔力変換資質をもつものと比べて、大きく引き離す性能を持っている。

その稲妻をミコトは防いで見せたのだ。

プレシアは敵であるということのを忘れ、心から感嘆の意を表した。

「別に大したことじゃないでしょう。魔力変換資質の電撃があるなら誰でもできるわよ」

「たいしたことよ。そもそも電撃をそらすなんて発想を実行できる度胸は普通ないわ、っ！」

もう一度稲妻の槍をミコトめがけて撃つ。

一息の間すらない一瞬で稲妻はミコトの体を焼くはずだった。

しかし、目に映る残光はミコトの目の前であらぬ方向へ曲がり、背後の装飾へと延びていた。

そうミコトは稲妻をそらして見せたのだ。

「体の前面に稲妻の軌道をあらかじめ用意することで、そらしているのね。なるほど、たしかに理にかなっているわ。よほど電気に詳しいのね」

例えるなら、川の流れを止めるのではなく、新しい道を作ってやる。そのイメージに近い。

するとミコトからお返しとばかりに何条もの稲妻がプレシアめがけ迸る。

しかしそれらはすべてバリアジャケットの前に霧散する。

プレシアは自らも電撃の魔法を使うこともあって、電撃対策は一通りしてある。

自分の電撃で感電し、怪我するのが馬鹿らしかったからだ。

そして、ミコトの密度の薄い稲妻ではまだプレシアの電撃対策が施されたそのバリアジャケットを破るにはいたらない。

……電撃の扱い方と発想はいいけれど、まだまだ、練度が足りないわね。

プレシアからすれば、まだまだ攻撃の仕方もなっていなかった。

とはいえ、敵にそれを教えてやる義理もない。

今は時間がないのだ。

一刻も早く目の前のミコトを排除し、実験に移らねばなるまい。だからといって、あまり魔力も使いたくはない。

あの程度の電気の膜であれば、全力でやれば貫いてしまえるだろう。いかに、水路があるうともその許容範囲外の量の水を入れれば溢れ

るのは必定。

サンダーレイジでも撃てばミコトはなすすべもなく黒こげになっているはずだ。

黒こげにするのは、いい。

だがこんな小娘に魔法を使って、その分減った魔力のせいでこの計画に支障が出るなんて間抜けもいいところ。

あとすこし、あと少しですべてを取り戻せる場所まで来たのだ。

こんなところでつまづくわけにはいかない。

今のプレシアは病魔に侵されているのだ。

それも末期の。

すぐさま手配しなければ、余命一年もない。

そんな状態で全力の魔法行使などもつてのほかだ。

すでに一度行っている今の状態では、あと使えて一回。

二度目は死ぬときだろう。

それはジュエルシードの蜂起にとって置かなければいけない!

だからこそ、違う手、それも効率的な手で行くべきだろう。

「たしかに、それは私の電撃を防げるわ。でも私は電撃以外の魔法も使えるわよ」

アリシアを奪っておきながら、蘇生すらも神は邪魔しようというのか。

させないわ。

必ずアリシアをよみがえらせる。

アリシアはこの世に生まれ、祝福されるべきなのだ。

こんなはずじゃない未来を取り戻すために、この小娘を 殺す。

プレシアの心にまたひとつ、暗い火がともる。

そして静かに、電撃使い同士の攻防は始まった。

第七話 「 不吉を、届けに来たわ」

話はプレシアがジュエルシードを蜂起させ、順調に共鳴、次元振の規模を拡大していた時まで遡る。

プレシアは体に負担をかけないようにゆっくりと歩きながら、計画の実行場所となる時の庭園最奥部へと向かっていた。

時の庭園最奥部でなければいけない予定はないが、なぜかあそこでやるべきだと思ったのだ。

特に戦略上の利点は無い、しかし広い場所で行わなければいけないことも確かだ。

そういう意味で最奥部はちょうどいい。

釈然としない思考に特に疑問も覚えず、プレシアは最奥部へとさらに近づいていく。

すると一本の念話が届いた。

『時空管理局所属リンディ・ハラOWN提督です。あなたをロストロギア不正使用、並びに暴走の容疑で逮捕します。無駄な抵抗は止め、執務官の命に従ってください』

だがプレシアがそれにかまってやる義理はない。

一人歩き続ける。

『最終通告です。ジュエルシード蜂起による次元振の発生を中止し、こちらの指示に従いなさい』

再三の忠告。

しかしプレシアはそれを、聞くこともなく。

……つざつたいわね。

その程度にしか感想をもたなかった。
今プレシアはもうすぐ来る愛娘との会合へと想いを馳せることで忙しいのだ。
他の者を考える隙間などありはしない。

交渉の余地なしと悟ったのだろう、念話がこれ以後届くことはなかった。

それでいい。

プレシアにとってアリシア以外のすべてが邪魔なことではかないのだから。

やがて、目の眼には金の華美な装飾が施された扉の前へとたどり着く。

扉に手を這わせ、魔力による認証で扉を開く。

中は多少地面が隆起しているが、かなりの広さを誇っている。
中心には祭壇のような場所がある。

そこで最終段階を起こせばいいだろうと、歩を進める。

一歩前へと進めるたびに、ここまで来れたことの念があふれる。
思い起こせばアリシアが死んでから二十年以上。
アリシアを蘇らせるためにあらゆる方法を探し、試した。
この身が病魔に侵されようとも歩みを止めることなど一時もなかった。

アリシアによく似た人形のせいで、さらなる絶望にも叩き落とされもした。

ようやく蘇らせたと思ったのに、その逆、アリシアによく似た人形

だったのだ。

余計にアリシアに会いたくなる。

あれを見るたびに、なぜアリシアでないのか、人形風情が動いているのか、憤怒が体にあふれる。

利用価値があつたから、あれに微笑みかけた。

だが、あれが目の前からいなくなるたびに、陰で胃の中のものを吐き出す。

あれを見るだけで、体が拒絶反応を示す。

辛い体に鞭をうって研究しているというのに、それをさらに悪化させるあれは、もはや悪魔としかいえない。

だがその日々も今日で終わりだ。

失われた都へ行けばすべてが元通りになる。
アルハザード

あの幸せだった日々へ。

アリシアと共に笑っていられたあの日常へと。

中心へとたどり着いたプレシアはジュエルシードをアリシアの周りにセツトする。

あとは徐々にジュエルシードの蜂起の段階を上げていき、時空のはざまに存在する『道』へといけばいい。

これからはミスは許されない。

だが自分は大魔導師プレシア・テストロッサ。

この程度の魔力行使で失敗するはずがない。

リンカーコアに存在する魔力を電撃に変化させないように外へとくみ出す。

外へとあふれた魔力は紫色の球となり、ジュエルシードへとまとわ

りつく。

絡みだした高密度の魔力に影響され、ジュエルシードの魔力も共鳴し青い光を発する。

すると連鎖するように隣のジュエルシードも青く発光、次々と光りだす。

成功だ。

次々と共鳴蜂起していくジュエルシードは非常に安定している。

とうとう最後のジュエルシードも共鳴し、魔力をはきだす。

それを確認して、安堵の息を吐いたとき、突然ジュエルシードが大きく鳴動した。

ドクンッ。

突然のこの原因を調べる前に、プレシアは本能に従い、前方に全力でシールドを張る。

「！！！」

間一髪で間に合ったシールドの魔力流が襲いかかる。

あまりの威力に、肉体が悲鳴を上げる。

踏ん張りの効かないこの体では吹き飛ばされると判断し、飛行魔法を発動。

空中に魔力で体を固定する。

「クウウウ　　！！！」

ここで吹き飛ばされてもして壁に叩きつけられれば、もう立ち上がれない。
意地でも吹き飛ばされるわけにはいかない。

だが決意をあざ笑うかのように魔力流はさらに強くなる。

もうだめか？

シールドがきしみ、ヒビが入る。

一瞬、無理か、と思うが唐突に魔力流がやむ。

呆気ない終了。

だが助かった。

もう少し長ければ、プレシアは吹き飛ばされていた。

シールドを張っていたとき無酸素運動だったのか体が酸素を求め、肩で息を始める。

この体に無酸素運動はきつすぎる。

「……………はあ、はあ」

残っているのは中空に漂うジュエルシード。

どうやら一過性の魔力放出だったようだ。

予想外のことではあったが、見る限りその兆候はもうない。

今はもう完全に安定している。

……………しかしなぜ？

原因が分からない。

プレシアの知識を動員しても、その原因が分からなかった。
とはいえ、今はもう完全に安定している。

また、魔力流が起きるとは思えないが、また起きたら厄介だ。すぐさまジュエルシードの最終段階へ移行しようとした。

その時

「　　こんにちは、プレシア」

どこからともなく一人、妖艶に微笑む少女が現れる。少女には場違いなほど整った容姿が。

それは御伽噺の祝福を運ぶ天使のようにも見える。

「私はミコト、内田ミコト」

プレシアに微笑む彼女からあふれ出る何かに気圧され一歩後ずさる。崩壊しかけた時の庭園が彼女のために用意された舞台なのか。桜色の唇がはにかむように開いた。

ただなんとなくわかった。

彼女の唇からあふれるメロディーは、私にとってメリットのかけらもないものだ。

彼女が運ぶのは祝福をなんてものではなくて

「　　不吉を、届けに来たわ」

こうして一人の少女が世界の命運を決める物語にとうとう足を踏み入れた。

第七話 「不吉を、届けに来たわ」(後書き)

プレシア・テスタロッサ

LV 61 (年齢により-24)
EXP 4592341

*LV1ごとのポイント=11

HP 3909 (6100+3050) - 5241 *
初期値1000+LV×50+DEX×0-5241(病気による
バットボーナス)

MP 50200 (7100+43100) *初期値

1000+LV×100+INT×50

STR 138 (61+72) *初期値5+L

V×1+ポイント 主に筋力に影響

DEX 124 (61+58) *初期値5+L

V×1+ポイント 主に防御に影響

LEG 66 (61+0) *初期値5+LV×

1+ポイント 主に俊敏に影響

INT 862 (61+796) *初期値5

+LV×1.5+ポイント 主に魔力に影響

特殊技能

・次元跳躍魔法：LV18 (1752/)

跳躍距離と対象魔法の魔力、跳躍魔法のMPを消費し発動

よって、跳躍魔法そのものの発動では魔力を使わない。

むき出しの魔力である魔法を跳躍させるというのは非常に繊細な調整が必要不可欠。

機械の場合、その場その場で莫大な量の計算と調整その他もろもろの設定から、ほとんど使用不可であり、できてもCランク魔法が精いっぱい。

だからこそAランク以上の魔法を跳躍させる場合、類まれる才能が必要となる。

今ではこの魔法ができるものは大魔導師の二つ名をいただける高難易度魔法。

あまりの難易度に、特殊技能扱いされるほど。

現在Sランク以上の魔法を跳躍できるのはプレシアを入れて、片手の指以下といわれている。

ちなみに当時プレシアの撃墜率100%を誇っていたのを止めたのは、管理局のギル・グレアムで、あとにも先にもそれのみ。

・魔力変換資質《電撃》：LVMAX（1000/1000）

意識のあるなしを問わず、体外に放出する魔力に電撃を付与する。

このレベルでは体外に放出するときに変換するかを選択可能。

また、雷の属性を付与するだけでなく、ほぼ完全な電撃に変換することも可能。

第八話 「ここが私の物語の幕開けよ」

ジュエルシードが暴走した。

今は安定を見せているが、もう一度あの魔力流を放出しない保障はない。

ミコトは魔力流を前面に集めた魔力障壁で耐えると、隠れていた岩の陰からプレシアの目の前に躍り出た。

「不吉を、届けに来たわ」

もちろんネタは忘れずに披露した。

これを考えるのに三日もかかったのだ。

プレシアをおちよくりつつ、含みを持たせられるような言葉で、ネタとなると選別が難しいこと。

「管理局……じゃなさそうね。それにしても不吉……ですって？」

プレシアは訝しげにこっちを見てくる。

含んだ意味が分からなかったらしい。

「ええ、不吉以外のなにがあるのよ。ここに来た以上、あなたの計画を阻止しに来たことは分かりきってるはず。あなたにとって計画の頓挫の可能性をもつ私は不吉を運ぶ黒猫。でしょう？」

とはいえ、プレシアにとって不吉でも、私のすることが成功すればそれはフェイトにとって幸いとなる。

まさに表裏一体。

災い転じて福をなす。
これはすこし違うか。

どちらにしてもプレシアにすれば不吉に違いないか、フェイトを娘だと思えば話は違うのだが。

というかこつちを睨むのを止めてほしいと思う。

プレシアは体調が悪いから顔が青い、だからメツチャ怖い。
ちよつと腰が引けそうだ。

もしかしてスキル《威圧（笑）》とか発動しているのか。

「あら、不吉じゃ不満かしら？」

「不満？ ええそうね。あなたみたいな空気の読めない人には不吉じゃ足りないわ」

空気の読めない人発言に少し大仰に驚くミコト。

……失礼な。

確かにいきなり管理局員以外の人間がここに来るのは空気が読めてないかもしれないが、クロノはもっととひどいぞ。

いや、どつちもどつちか。

どつちにしる雰囲気読んでないし。

「何しにきたのかは知らないけれど、時期が悪かったわね。死になさい」

魔力の高まりを感じた瞬間、雷撃が放たれていた。

同時に後方で何かが発火する音が聞こえた。

神速の攻撃を見てから防ぐことはかなわず、視界に現れたそれは軌跡。

見えたときにはすでにあたっている。

奇襲であれば必ず食らう攻撃だろう。

あたれば死んでいただろう。

本当にプレシアは容赦がない。

だが、当たらないのならば意味はない。

命の危険が無いのならば悠々と見てられる。

「なっ……… いったいどうやって！」

大きく目を開き、体はこちら側に乗り出し、プレシアはいかにもな驚き方を表現している。大きなりアクションありがとう。

かなりの自信があったのだろう。

いや、今でもあるのだろう。

他の管理世界でみた資料では、奇襲時97%の撃墜率をもっているのだ。

並々ならぬ自信を持っていても不思議ではない。

それにミコトはパッとみると大して魔力を持っていないように見えることもある。

格上のこの驚きようにミコトはほくそ微笑む。

ここまで驚かせるのにやけるのが止まらない。

「どついつたトリックを使ってるか分からないけど……これならどつかしら!」

再びプレシアの手元が閃く。

今度は視界に七本の残光が残っていた。

……数できたか。

だがその考えはハズレだ。

私は自分を中心とした一メートル以内のところに特殊技能電撃使用エレクトリックマスターで電気の幕を張り、軌道をそらしているのだ。

いくら本数が上がろうとも、この幕を吹き飛ばすものでなければ、表面を滑って当たらないだけだ。

それに一言いいたい。

これはどうかしら!は失敗フラグだよ、プレシアさん。

やはり、電撃の槍はミコトには当たらず、背後の壁を焼く。

幾度か繰り返されるが、そのすべてが後方へ流れ、ミコトに当たることはない。

……そろそろこつちから行かせてもらいますか。

電撃の膜を消さないように気をつけつつ、前髪の部分から雷撃の槍を生成。

チチチ、と火花をちらし可視化し、それをプレシア目がけて撃つ。

ドンッ、と着弾時におよそ電気のイメージからかけ離れた音が鳴った。

だがしかし

「あちゃあ、やっぱり駄目か」

プレシアには傷一つついていなかった。

電撃の膜を張るための余力を残さなければいけない以上、これ以上の威力はだせない。

一応考えてはいたが、Sランクは伊達じゃないようだ。

……これは元々のプラン通り行動した方がよさそうね。

ミコトはあらかじめ考えていた流れを作るために行動を開始し始めた。

特殊技能は本来習得することができないスキルのこと、と二人は定義した。

明らかに個人の資質に頼ったもので、ステータスコントロールの条件から外れるということでは習得が不可能なもの。

カズトが使う瞬動や居合い拳は一応既存の魔法概念で作られた新しい魔法。

とはいえこの広い次元世界の中には似たような魔法なんて腐るほどあるから、オリジナルと言ったところで少し語弊があるのだが。

元々二人で遊びながら前世の技を再現しようとした時に偶然瞬動ができたのが始まりだ。

だがミコトが始めから習得していた電撃使い（エレクトリックマスタ―）だけはカズトが習得できなかった。

それにどの漫画の技も再現できるわけではなかった。明らかに物理現象を超えてしまっているものなんかは再現できない。普通に人間ができる範囲のものだけだ。

ミコトの能力だけは物理現象を超えているが、そのあたりは神様にもらった能力だからだろう。

もしかして、私がミコトだから？

名前と同じ能力なんて安直にもほどがあるが、特殊能力って聞くとかっこいいから良しとした。

カズトにはありもしないのだから、これでも我慢できる。

とはいえ特殊能力と言われても、不満もある。

エレクトロニックマスター

ミコトの特殊技能電撃使いはそこまで攻撃力がないのだ。

熟練度によって自分から生み出せる電気量に限界があるからだ。

だが、能力そのものは強力とっていい。

能力とは、こと電気に対する絶対操作権。

それが電気に属するのであれば、相手がだれであろうと、どれだけの電力を有していようと、ミコトの支配に入る。

もともとミコトはプレシアの電撃に対して電気の膜なんてものを張る必要はないのだ。

プレシアが生み出した電撃はミコトの支配権へと映るのだから。

避ける必要すらない。

むしろ食らってから、自分の電力として使用した方が断然いい。

だが彼女の電撃変換を使わない攻撃でもこちらを潰せる以上、余裕ぶっこいて突っ込むわけにもいかない。

あくまでミコトは電撃が効かないだけで、普通の魔法は食らうのだから。

電撃を撃ちつつ普通の魔法を撃たれたらミコトはやりづらい。

『この程度の電撃は防ぐそこその魔導師』と思われた方が楽だ。

ここで電撃使い《エレクトロニックマスター》のスキルを前面に出して戦ったとしよう。

そうすればプレシアは電撃を使わずに戦うことになるだろう。

しかしここで『この程度の電撃は防ぐそこその魔導師』と思われ

た状態で戦い、プレシアが普通の魔法を使ってくるならば、最後のシメは信頼する電撃系の魔法にするはずだ。そうなればプレシアが絶対に仕留められると思った時に反撃することになり、ミコトが優位に立てるだろう。

もしいきなり電撃の大規模魔法を使うなら、その電力をこっちが利用して一撃かませばいい。

プレシアが形成した電撃ならバリアジャケットを貫くだけの威力はあるだろう。

それらの理由が重なり、ミコトは電撃の膜を張る小細工に出ているわけだ。

……さてと、どうしますかね。

一応ミコトも近距離の戦う方法がないわけではない。

しかし、魔力特化のステータスのミコトが前に突っ込むわけにもいかない。

ミコトは防御には一切振ってないのだから。

ここまで魔力にステータスを全振りしておいて、突然魔力以外の所に振るわけにもいかないのもあるだろう。

ともかく、現在のミコトには身を守るべきがあっても、自らが生み出せる電力に限界がある以上、この状況を打倒する手段がないのだが絶対に打倒できないわけではないではない。

今するすべがないのならば、その状況を作りあげるまで。

プレシアといくつかの攻防を繰り返しつつ、並行思考で状況を整理していく。

まずこのままの流れだった時だ。

今のミコトはプレシアの電撃を防ぐすべは一つしかもっていない。

ゆえにこちらから電撃の膜を解除するわけにもいかない。
しかし、この防ぐすべはプレシアの攻撃すべてを確実に防げる優れモノ。

このままであれば決着がつかず、時間だけが無為に消費されることになる。

时空管理局が後ろに控えている以上、なるべく時間はかけたくない
プレシアがこの手段をとってくるとは思えない。

では途中で得意のサンダーフォールでも撃ってきた場合は？

さつきも言ったが、それこそよいカモになる。

溜めの途中に魔法に切り替えて妨害してもいいし、わざとくらって
油断したところに反撃をいれてもいい。

むしろこの選択肢を選んでもらうのがミコトにとって一番望ましい。

……プレシアが電撃のみの特化魔導師なら楽なんだけどなあ。

だがその考えが通用しないことはプレシアの経歴を調べたときから
分かっている。

彼女は戦闘こそ大したことはないが、魔法を使うのであれば、未だ
はるか高みにいるのだ。

その彼女が電撃系の魔法以外を使えないわけがない。

電撃をお返しとばかりにいくつか放ってみるが、彼女にダメージは
ない。

電撃使いとして、こっちの方がスペックは上だが、向こうのほうが
レベルが高い。

このままではいつまで経っても決着が使えないじゃないか。

……長期戦は面倒よね。

ミコトはそう考えていた
すると向こうも同じことを思ったのか、口を開く。

「たしかにそれは私の電撃を防げるわ。でも私は電撃以外の魔法も
使えるわよ」

ミコトは、やっぱりそっちの手段で来たか、と身構える。

おそらくこれからは電撃使い同士の戦いではなく、魔導師同士の戦
いへとシフトする。

正直な話、電撃以外の魔法がどの程度の熟練度なのかが分からない
ので、うかつなことができない。

だが、勝つためには自分から動くことも時には必要だ。

足を止めた状態でプレシアの魔法を食らってはひとたまりもないか
もしれない。

病気と年齢で下がっているとはいえ、レベル差が二十近くあるのだ。
下手な魔法でもHPが全損してしまう。

ミコトは緊張で乾いた唇を舐める。

そして飛行魔法を起動。

空中へと浮かびあがる。

……さあ、今までは小手調べだ。

ここからが本当の魔導師VS魔法使いの戦い。

観客はない。

だがここが私の物語の幕開け。

いずれ百億の観客が喝采する劇がこれより始まる。

第八話 「ここが私の物語の幕開けよ」 (後書き)

現在のミコトのステータス。

LV 43
EXP 391160

HP 7700 (5300 + 2400) *初期値10
 00 + LV × 100 + DEX × 50
 MP 26800 (5300 + 21500) *初期値1
 000 + LV × 100 + INT × 50
 STR 48 (48 + 0) *初期値5 + LV ×
 1 + ポイント 主に筋力に影響
 DEX 48 (48 + 0) *初期値5 + LV ×
 1 + ポイント 主に防御に影響
 LEG 48 (48 + 0) *初期値5 + LV ×
 1 + ポイント 主に俊敏に影響
 INT 478 (48 + 430) *初期値5 +
 LV × 1 + ポイント 主に魔力に影響

新スキル

特殊技能

・電撃使い《エレクトリックマスター》：LV5 (482/)

電気に関係することであるならば絶対支配権を保有する。
このスキルを保有する限り、その身に電気がダメージを与えること
はない。

ただしレベルによって、出せる電気量に制限がある。

また、超能力であるため、魔術または魔法との併用は不可。

最大レベルまで上昇した場合、デスペナルティが発生する代わりに一
定時間の使用が可能となる。

学園都市第三位である超電磁砲レールガンの御坂美琴が保有する能力。

その能力の範囲では落雷すら引き起こす、まさに天災規模の能力。

第九話 「私を殺すんだね」

管理局員にはデバイスによる非殺傷設定というのが義務付けられており、ほとんどの場合が例え相手が犯罪者であろうとも魔力ダメージのみで捕えられる。

アームドデバイスでバリアジャケットを抜いてしまって、けがをさせてしまうこともあるが、それもまれだ。

その非殺傷設定魔法のおかげで、最近の魔導師の戦いは『削りあい』が主流となってしまうている。

血が流れることもないため出血死はなく、お互いの魔力もしくは意識を先に削りきったほうが戦いに勝利となる。

ゆえに削りあいと称されるのだ。

だが、それは本来はあり得ない。

本来の戦闘とは一撃にすべてをかけ、命を奪いあう、殺し合いではない。

一振りが四肢を切り落とす、一発の魔力弾が体をえぐり内臓をまき散らす。

それが魔導師の本来の戦闘だ。

そして忘れられたそれは、ここ時の庭園最奥部で繰り返されている。

第九話 「私を殺すんだね」

ミコトは補助魔法による肉体強化が発動したことを確認すると、すぐさま曼荼羅状の魔法障壁を構築。

魔法に対する防御力のさらなる上昇をさせる。

個人的にはネタに走りたかったのだが、相手は明らかな格上、ぐつとこらえる。

それにこれだけやってもレベルに差がある以上万全とはいえないのだ、遊んでいたらすぐに落とされてしまう。

プレシアの攻撃を食らうわけにもいかないため、浮遊術を用いて回避行動を取るべきだろう。

幸いにもここ最奥部は半球状のドームになっており飛ぶことに支障はでない。

さらにプレシアは病気で、戦闘の余波でアリシアに被害が出ないようにするために、中心からは離れられない。

プレシアを中心に円運度をする事で、戦闘を有利に進めることができる。

ならばそれを最大限に利用すべき。

いつ空へ飛び上がるのかチャンスを探しつつ、プレシアに対する目的を達成すべく口を開く。

「……アリシアってあなたにとって……なに？」

「いきなり何を言うかと思えば……そうね、私にとっての”すべて”よ」

いきなり口を開いたミコトに一瞬驚いた顔をするが律義に返事をする。

ミコトは思わずこういう所に根がまじめなんだなあなんて思ってしまった。

……普通戦う相手に返事なんてしないよ。

戦闘経験が足りないからか、それとも彼女がまじめなのか。両方だろう。

きっと彼女はアリシアが生きていた時は本当にいい人だったんだ。今でこそフェイトに虐待なんてしているけど、きっと彼女なら大丈夫。

「そう……」

きつとみんなで笑いあえる未来がつかめる。

その言葉を胸に刻んで戦う意思を決める。
ミコトにはやりたいことがたくさんある。

この世界の悲劇を無くしてみんなで笑いあうこともそうだ。

だからこんなところで躓くわけにはいかない。

押しつけがましい考えかもしれないが、みんなが笑顔になればいいと、本気でミコトは思っているのだから。

本当はどうやって説得しようか、たくさん言葉を考えてきた。

けどそれはこうして言葉を交わして無駄だったわかった。

子供こそいないけど同じ女だ。

彼女はアリシアのために、その思いがある限り自分からは絶対に曲がらない。

だったら 無理矢理でも、その意思をぶん曲げてやる。

ミコトは先手必勝とばかりに縦横無尽に空へと駆けようとする。
プレシアもその場合の不利を分かっているのか、ミコトを飛ばせまいと魔法を撃つ。

まずは小手調べでフォトンバレット　ほとんどの管理局員なら一度は使ったことのある基礎射撃魔法　を撃ってくる。弾速はそこまで早くないが、操作性に優れることと魔力消費量が少ないことから士官学校でも教えるなかなか使える魔法だ。それを背後に五つ作り出し順に撃っていく。

五つすべてが別の軌道を描きミコトを襲う。

しかしこの程度で落ちるのならミコトはここに来ていない。

両手を突き出しでたらめな軌道の電撃の槍を放つ。

打ち出された電撃は目にも止まらぬ勢いで機敏に動き、フォトンバレットと接触。

対象と接触したことでフォトンバレットの効果である爆裂が発動、ほかの魔力弾を巻き込み、連鎖的に爆発していく。

爆発の影響で吹きあげられた土がプレシアの視界をふさぐが

「邪魔よ」

ただの魔力放出で土煙は吹き飛ばされ、視界がクリアになる。しかしそこにミコトの姿はない。

今の爆風で隠れたであろうミコトにプレシアは小さく舌打ちをうつ。

……面倒な真似を、だが逃しはしないわ。

周囲に魔力を放出する。

プレシアは非常に熟達した電撃使いだ。

咄嗟のことが相当力まなければ電撃にならず、純魔力として扱うこともできるし、電撃を用いた応用も扱うことができる。

これもそのうちの一つで、放出した魔力は電気ではなく電磁波へと変化。

プレシアは電磁波で、目による確認ではなく体で戦闘の流れを直接感じ取ることにする。

いわばソナーのようなものだ。

すると、電磁波を流してすぐに右側からの反応がおかしいことに気がついた。

本来なら電磁波が反射し帰ってくることで認識するのだが、全く帰ってこなかったのだ。

つまり、そこに電気だけでなく電磁波まで操れる何かがあるというわけで

「そこね!!」

視線を向けても何も無い。

だがこの反応から何かがいることは確か。

おそらく幻影魔法か何かを使って隠れているのだろう。

プレシアはフォトンバレットの上位互換であるフォトンバーストを撃つ。

「げっ」

およそ女性がという言葉でないものが聞こえるが無視。
その妙な反応がある地点を吹き飛ばす。

「チッ」

が、当たった時特有の手ごたえがない。

……外したか。

プレシアは今までの経験からすぐさまもう一度電磁波による位置の逆探知を行う。

いた。

今度は上空、それも壁にほどなく近い場所に飛びあがっていた。

視線を向ければ、ミコトが何かを準備しているのが見える。魔力をためているのだろう。

上空に飛ばれたのは厄介だが、魔法のために足を止めているならば関係ない。

プレシアは速度に優れるフォトンランサーを三発発動し、ミコトを落としにかかる。

対しプレシアは自分のことを見失っていると思っていたミコトは大いに焦る。

さつきも透過魔法オプティックハイドを使用して自分を見破ってきた。

どういう方法かはわからないが、完全にこっちの動きがばれている。これでは不意打ちすらできない可能性が高い。

プレシアが撃ってきたフォトンランサーを避けるために、呪文を唱えて構成していた雷ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンスの暴風をキャンセル。準備中に放出した魔力が、結合力を失いたただの魔力素に戻っていく。それをもつたいたいと思いつつも天井際の壁を蹴ってフォトンランサーを回避。

が、壁にぶつかると思われたフォトンランサーは直前で停止。

「ターン」

三発すべてが矛先をこちらへむけて一気に加速する。

「まじ?」

プレシア戦を考え何度もイメージトレーニングしていたのがあだとなった。

『フォトンランサーは曲がらない』その先入観から避けた後にまったく意識を向けていなかった。

フェイトのフォトンランサーが曲がらないからといってプレシアの曲がらない道理などないというのに。

プラズマランサーじゃないのに曲がるなんてズルイ……っ!

急いで体をひねろうとするがフォトンランサーのほうが早い。

三発すべてがミコトの体に直撃する。

激突の瞬間に魔力障壁の強度を上げようとするが、間に合わない。障壁が破られるとき特有のカシャン、という音が聞こえる。

「~~~~っうっうっ!」

一応魔力障壁が壁になったが、すでに十三枚のうち九枚が破られた。それでも衝撃もすべてを防ぐことはかなわず、ミコトの体に響く。予想を超える痛みに、戦闘中ということのを忘れ、思わず着弾箇所を抑えてしまう。

「そんなことをしていてもいいのかしら?」

はっとなって回避行動をとろうとするが、間に合わない。

プレシアをみれば、その顔には隠しきれない笑みが浮かんでいる。さらにその周囲にスフィアが四つ、今か今かとはちきれんばかりに輝いている。

「ファイア」

一つにつき一つのフォトンランサーがミコトを襲う。ミコトの体が衝撃でがくつと揺れる。さっきよりも強化した魔力障壁のおかげでなんとか耐えられた。しかしこれですべての魔力障壁がなくなった。

もう一度食らっては堪らない。

今度こそ逃げようとするがまだプレシアのターンは終わっていない。

「ファイア」

未だ空中にあったスフィアからフォトンランサーが飛び出す。

しまった、ファランクスシフトか！！

ただのフォトンランサーだと勘違いしていた。

フェイトが発動したときは三十機近く作っていたが、数が少ななくても発動はできる。

プレシアは魔力の消費量の点から少数を選択したのだろう。

咄嗟に手元に魔力障壁を展開。

常時展開の物よりもはるかに強力なタイプの障壁を展開する。時間が足りず一枚しか作れなかったが、これに魔力を注ぎこみ続ける。

ドン、ドドドンー！

衝撃が四回。

着弾したフォトンランサーを防ぐことはできた。

だが衝撃を防ぐことはやはりできず、背後の壁に押し付けられる。

背中に壁の感触を感じるとともにミコトはプレシアの思惑を悟る。

……しまった、これじゃあ逃げられ

ない。

そう続けることは思考ですらできなかつた。

「ファイア」

追撃。

衝撃で思考は途切れ、壁へめり込んでいく。

「ファイア」

もう一度。

着弾と同時に、ピキッと嫌な音が聞こえた。

「ファイヤ」

ミコトは障壁に必死で魔力を込めていく。

負けるわけにはいかないのだ。

しかし、絶え間なく襲い来るフォトンランサーはそれを許しはしない。

歯を食いしばって衝撃に耐えるが、背後の壁はそうではない。

ミコトの体がさらに食い込んだ。

完全に身動きなんてできない状況に追い込まれた。

プレシアはそれを確認すると、浮かんでいた四つのスフィアを、完全開放した。

「ファイア」

他の時と変わらず抑揚のないトリガーワード。

しかし、今までとは完全に反応が異なった。

四つのスフィアからはマシンガンのようにフォトンランサーが飛び出す。

一つ当たり二十二個打ち出され、ミコトの視界が紫に染まった。

「……………」

いくつかを障壁で防ぐことはできたが、とつとつミコトの体にクリンヒットする。

血が逆流するような衝撃に、ミコトは一瞬意識を手放した。

しかし、絶え間ない衝撃が再びミコトを覚醒させる。

フォトンランサーの雨はわずかな間とはいえ、ミコトに一瞬あの世すらみせる。

だが飛行魔法を保てずにゆっくりと落下していくミコトからプレシアはまだ目を離さない。

まだだ、まだプレシアのターンは終わってはいない。

プレシアは撃ち尽くして浮かんでいたスフィアと、撃たれた後に空間に漂っていた魔力を右手に集束させる。

あまり使ったことのない集束技能だが、プレシアは人並み以上に集束技能を使うことができる。

右手に集束した魔力を握り、振りかぶる。

限界まで引き絞ったとき、魔力が形を細い槍へと姿を転じた。

プレシアは集束した魔力を魔力刃に変えたのだ。

バチバチと鳴り始めたそれをミコトめがけ

「スパーク

」

投擲した。

「 エンド」

魔力の槍はミコトにあたると、その地点を中心として爆ぜた。眩しい閃光と共に衝撃波が生まれ、それは最奥部を走り渡り震わせる。

殺傷設定で撃たれたスパークエンドは中心で炸裂し、ミコトを吹き飛ばすにたる威力をしめした。

プレシアは苛立っていた。

あの程度の小娘に時間と魔力をとられすぎたことに。

たしかに魔力の節約を心がけたおかげで、大魔法を使うほど減ってはいない。

しかし、あのイレギュラーな小娘がいなければ、この時間と魔力が減ることは無かったのだから。

そう考えると、消し飛ばしただけでは腹の虫がおさまらなかったのだ。

あまりにも苛ついたせいで最後の一撃は力が入ってしまった。

最後が収束系の魔法でなければ思った以上に魔力を使ってしまったていただろう。

あまり真正面からの戦闘をしたことは無かったが、あの程度の敵であれば敵ではない。

現状で厄介なのは、時空管理局のクロノ執務官とリンディ提督の二人だけだ。

あの二人さえ来なければプレシアはこの計画を成功までもっていきえる。

だが向こうも馬鹿じゃない。

あのハラオウンの跡継ぎだ、かならず二人のどちらかが来るはず。

普通に考えれば指揮官のリンディが来ることはないから執務官のほうだろう。

さっきのジュエルシードの魔力流のおかげで、ただでさえ不安定だった転送系の魔法は一切使えない。

直接転移、または次元跳躍魔法　できる人員がいるとは思えないが　に警戒する必要はない。

いまやプレシアがいかに素早く次元の狭間を開くかの勝負だ。

今の戦闘で使った時間はかなり貴重だ。

一刻もはやくジュエルシードを使用しなければ。

プレシアはジュエルシードに魔力を注ぎ込め、次元の狭間へと道を開こうとする。

ザッ

背後からの何かが動く音。

戦闘直後でピリピリしていたということもあつたのだろう。

プレシアはとも学者とは思えない速度で反応、背後にいる何かを確認せずにフォトンランサーを叩きつけた。

だがその何かは

「えっ……………」

プレシアの狙い通りフォトンランサーは何かの胸部を貫いていた。

「なん……………」

思わず口に出す疑問、と思考の停滞。

プレシアにとってそれほどの光景だった。

口元から血を滲ませたそれが口を開く。

また私を

茶色い瞳と細い金の髪を、どこかプレシアに似た顔立ちをした少女。プレシアが魔力弾を当てた胸部からは血がにじみだしている。それは小さな少女には明らかな致命傷。

なんでここにいるの？

その疑問は頭の中をめぐるだけで決して答えはでない。
ただ今頭を占めるのは、なぜという疑問。

何かは見せつけるようにゆっくりと開かれる口を、プレシアはただ見ていることしかできない。
そこから漏れ出すものは

私を殺すんだね。

死に際の呪詛。

愛する愛娘アリシアからの。

救いたいと願い、救うはずだった彼女の、言葉は容易くプレシアの心を

「いや、いやあ」

プレシアにとって絶対に認められない光景。
アリシアを殺した。

ちがう、これはアリシアじゃない。

そう理性が叫ぶが関係ない。

彼女の思考にそんなことを考える余裕など存在しない。

プレシアが動くことのできないなか、アリシアは頬笑み、崩れ落ちる。

その倒れた光景は、かつてプレシアがアリシアの息絶えた遺体を救出したときと同じ倒れ方で

「いやあああああああああああああ！！！！！」

完全にプレシアの心を破壊した。

それだけには終わらない。

プレシアの背後からミコトが飛び出してくる。

そう、ミコトはまだ負けていなかったのだ。

この幻影もミコトがフェイクシルエット幻影魔法で作ったもので、音声はボイスチェンジを用いたものだ。

一瞬でもいい。

一瞬でもいいからプレシアを動揺させれば勝てる。

そう踏んだミコトの最後の賭けである。

本当なら動揺を誘ったところで攻撃なんて悪役のやることだ。

だがこれ以外に勝つ方法は今ない。

勝たなければハッピーエンドには絶対に届かない。

だから卑怯と言われようとかまわれない。

プレシアが生きていなければ話にならないのだ。

真正面からやれば負けることは先ほどの戦闘で分かった。

呪文を唱えればプレシアはすぐに幻影と気が付くし、電撃はそもそも

もプレシアのバリアジャケットを破れない。

もうほとんどないHPが簡単に削りきられてしまう。

もうミコトに用意された勝つための方法はこれしかない。

「いめん」

言うと同時にプレシアの後ろからプレシアにつかみかかり、その口に手を突っ込んだ。

おそらくバリアジャケットの唯一の弱点である口に。

バリアジャケットは肉体を魔力で覆うものだが、絶対に覆えないところがある。

それは呼吸をしなければいけない口だ。

もし魔力でコーティングすれば酸素が通らずに死んでしまう。

もちろん災害時用の特殊ならば話は違うが、今のプレシアがそれを着ているはずがない。

そしてバリアジャケットがないというのならば　　電撃は通る。

ミコトは電撃使いのスキルを起動。

電流をプレシアの体に流し、いつきに電力を引き上げる！

口を何かに防がれる感覚がプレシアに伝わると同時に激痛が走る。

「　　ッッ！！！！」

体が意識とは無関係に跳ねる。

そしてプレシアの意識は暗転していった。

運がよかった。

それがミコトのプレシア戦を終えてからの感想だ。
横たわるプレシアを見ながら本当にそう思う。

ミコトは電撃使いとしての戦闘が硬直するなんてことは分かっていたし思い通りに事を運べた。

だから、魔導師としてのプレシアの戦闘も余裕を思っただけで望むことができた、とはいえず予想外のことが多すぎた。

イメージトレーニングが悪い結果を生むとは想像すらしてなかったが。

たしかによくよく考えれば魔法は一人ひとりが使いやすく調整してあるんだからあのくらいは予想の範囲内じゃないといけなかったか。よくもまあ若干十二の少女が五十越えの大魔導師に勝てたもんだ。いろいろ考えてはいたけど、周りから見れば無謀でしかないから。

フランクスシフトのときは冗談抜きで死んだかと思った。

着弾する直前に目の前で電撃の槍で誘爆させて直撃を避けなければ間違いなく死んでいた。

さすがに目の前で爆破したから、爆風でHPが持っていけなかった。

……それでも半分ちよつとしか消せなかった。

魔力障壁で防いだ分もあわせてかなりの数が削れたけど二十ちよつとは普通に当たってしまった。

魔力全振りのおかげで魔力耐性が高かったからか、ギリギリHPが残ってくれたが、とんでもなく痛かった。

走馬灯すら見えたくらい。

完全に死んだのかな、ってあきらめそうになったし。

きつと幸運だったのだろう。

最後のシメでプレシアがスパークエンドを使ったのだったそう。

もしあそこでフォトンバーストみたいな純魔力攻撃ならば死んでいた。

HPの残量的にとてもじゃないが耐えられなんてできなかった。

だが実際には生きてる。

あるときプレシアは私の能力が電撃の支配ということに気がついてなかったから、あそこでスパークエンドを選択した。

そしてミコトを倒したものと勘違いした。

これは幸運いがいの何でもない。

電撃で構成されたスパークエンドだから能力のおかげでHPを削り切られなかったし、プレシアに直接戦闘経験があまりなくてミコトの死体を確認しなかった。

だからミコトは生きている。

一つ目の関門をクリアした。

そう思うと急に喜びがあふれて来る。

「いいい、よっしやあああああ!!!!」

思わず空中へ向けてガッツポーズ。

この喜びをどう表現していいかわからず、小躍りしてしまう。

喜びに一人浸っていると、突然、ここ最奥部への扉が吹き飛ばされた。

突然のことに一瞬身構える。

だが視界に移ってくるのは、肩にトゲトゲの突起がついた特徴的なバリアジャケットを着た魔導師。

まだ見たことは無かったが、そのトゲトゲで誰か思い当たる。

……クロノか。

実際見てみると、なぜかあのトゲトゲがやけに印象に残る。

14歳だからああいうのに憧れる年ごろなのか。

多分そうなんだろうな。

クロノはミコトと倒れているプレシアを見て、杖を構えた。現在の情報をまとめてみても、ミコトが味方である保障はどこにもなく、プレシアを打倒したならばよっぽどの腕を持っているはず。いつでも応戦可能なように魔力をたぎらせる。

対するミコトからすれば、そんなことしなくていいのに……というところか。

HPは少ないし、MPも結構減っている。

今ミコトがクロノとやりあったら、逃げることもできない。

よからぬ考えなんて起こす気もないのだ。

だから、クロノがこうして警戒しているのをみると、ああお仕事先ばってるんですねえ、と思ってしまう。

フォトンランサー連射のせいで体の節々が痛いミコトは回復魔法で体を癒したいのだが、そんなことをしたらクロノに戦闘行為ととられて攻撃されそうだ。

ミコトはしぶしぶと治療をすることを諦め、視界に移るHPが早く回復しないかなと、上の空になっていた。

「君たちはいったい……？」

「ん？ カズトから聞いてないの？」

クロノからの質問に、いかにも気の抜けた顔で答える。

一瞬まじめに答える！と怒鳴りそうになるがクロノは我慢して続ける。

まずは二人の目的ないしそれに準じる情報を手に入れることが先決だ。

「あの黒いコートのも導師か？ 特には聞いてないが」

「あちゃー、でも、いつか。私たちのことはともかく、早くプレシアを確保してくれない？ もう一回起きられると面倒だし」

確保してくれない？

クロノにとって意外な言葉が出てくる。

ほとんどの犯罪者同士の争いでは口封じの意味もあって非殺傷設定が用いられることがほとんどだ。

だからフェイトには残念だがプレシアが倒れているのをみて、死んでいると思っていた。

「……確保？」

「なに？ 一応ちゃんと生きてるわよ。捕まえなくていいの？」

「いやしてもいいというならするが……君たちの目的はジュエルシードか？」

「へ？ 別にジュエルシードみたいなふざけたロストログアなんていらぬわよ。私たちの目的はプレシアの確保」

ここでも、まさかの言葉が出てきた。

プレシアの確保、それならばたしかにプレシアを生かしている理由も納得できる。

だがニコトの言葉を鵜呑みにするわけにもいかない。

……なぜこの二人がプレシアを生かそうとする。

「……信じられない？ それでもいいわ。とにかく今は確保が先決。事情聴取ならアースラで受けるわ」

明らかに舐めているとしか見えない態度だが、プレシアを確保してもいいならば拒否する理由もない。

クロノはミコトを警戒しつつ、プレシアにバインドをかけようとする。

その時

ふらあ

音もなくプレシアが立ちあがった。

「」

肺まで焼いたのだ。

そう簡単に起きるはずがない。

血走った目をプレシアはミコトへ向ける。

その目に映る感情は 憎悪。

らんらんと光る目からは よくもアリシアを出しにしたわね。

そう言っているように見えた。

クロノとミコトはその目からあふれる『何か』で一步も動くことができない。

プレシアの腕が上がる。

その手の先からは環状の魔法陣が。

魔力が装てんされた魔法陣は前方に魔力の塊を。

この時点でクロノの目が覚めるように動けるようになり、横に飛ぶが、

なんで逃げない！！

ミコトは回避しようとするしななかった。

もう一人のミコトは地に足が固定されたかのように動かない。

本人も動こうとしているが、肝心の足が全く動いてくれないのだ。

とっさにクロノが魔法弾を発動し、ぶつけることで射線上から逃がそうとするが、遅い。

すでにプレシアの魔法は完成している。

刹那の時の中でプレシアが口をミコトはみた。

何を言うのだろうか？

だが焼かれたのどが音を発することはない。

それでもミコトにプレシア言葉が聞こえた。

地獄へ落ちろ。

完成した魔力は紫の残光を引きながらまっすぐにミコトをめぐらして放たれた。

50cmはありそうな大きさの魔力弾はミコトの胸部へと吸い込まれるように空を走り

「だからいったろ。介入なんてやめとけって」

背後から飛び出た彼がミコトの前へと躍り出た。
いつもみたいな笑みをしながらミコトの方をむいている。

「まったく、姉ちゃんには俺がいないとだめなんだから」

まったく場に合わない笑みをしたカズト。
まるで何でもないような顔をしているが

「！……がふっ」

血を吐き出す。

ミコトを魔力弾からかばったおかげで背中には焼けただれている。
衝撃で折れた骨のうち、肋骨が肺に刺さったのか、だらだらと血が
口からあふれている。

「……え？」

カズトが吐き出した血は地に落ちて血だまりを作っている。
その小さな体からは考えられない量の血が外へ出たのだ。

なんで……？ 勝ったはずなのに……

ミコトはその光景を前に見ていることしかできない。
世界でたった一人の家族が怪我をしたのに。

いずれ思考は現実へと追いつく。

だがその前にカズトに限界が来た。
崩れ落ちたカズトは自分で作った血だまりに落ちると、バシヤッと音を立てる。

その音はやけにミコトの頭に響いた。
そしてそれがカギとなる

「あつ……」

思考が現実へと追いついた。

「ああつ……！」

血だまりに沈むカズトはもう目も開けてはいない。

「あああああああああ……！！！」

その音を最後にカズトの意識は闇へと沈んでいった。

第十話 「……私は、私は半端だったんだ」

意識を失ったカズトが目を覚めたのは、白い部屋の中だった。半分寝ぼけた頭でいつものように体を起こそうとしたとき、背中に激痛が走る。

「……がっ」

背中から走る鈍い痛みが頭まで上ると、視界に真っ赤な火花が映る。火花は視界を焼き、明細に映っていた景色が暗くなっていく。

力が入らず、ドスンと背中が落ちるが、顔をしかめながらも意識だけは手放すまいと、歯を食いしばる。

その痛みでようやく思い出した。

プレシアの攻撃魔法からミコトを庇ったのだ。

……あれからどうなった。

クロノ達の所から瞬動で走り去ったのはいいが、そのまま連発するとHPが切れることに気がついて普通に走っていった。

しかし途中で傀儡兵に遭遇し時間を取られてしまい、ミコトの所に到着するのが遅れたのだ。

ちょうどクロノとミコトが会話しているのをみて、タイミングを見計らっていたとき、プレシアが立ち上がったことに最初に気がついたカズトはすぐさま瞬動でミコトの前に躍り出た。

プレシアの魔力弾の直撃を食らったものの、決戦の舞台に遅刻したおかげである程度HPが回復していたのだろう。

そのおかげでぎりぎり生き残っている。

カズトが覚えているのはそこまで。
それ以降はまるで覚えていない。

あたりを見回してみるが、一般的な病室そのもの。
申し訳程度の花が飾られている部屋に窓は無い。

……アースラ……かな。

窓がない病室なんて聞いたことがないし、何より時の庭園で倒れた
自分が運ばれる場所なんてひとつしかない、とあたりを付ける。

「はあ……」

……あれからプレシアはどうなった？

次元振は？

姉ちゃんは？

聞きたいことはたくさんあるがそれを知るすべはない。
体すら満足に動かせない自分に腹が立った。
思わず白くなるほど拳を握りしめる。

何もできなかった。

結局自分にできたことは何も無い。
傀儡兵を叩き潰しはしたが、クロノ達なら自分がいてもいなくても
関係なかっただろう。

ミコトを庇うことはできたが、最上は庇うという状況を作らないこ
とだった。

そして自分は最後まで舞台に立っていることができなかった。

そうもしかしたら姉ちゃんはあるのあと怪我をしたのかもわからない。
だから今自分の所にいないのかもわからない。

悔しくて涙が出てくる。

カズトにとつて『家族を守ること』は自分の命と等価であるといっ
てもいい。

どこぞの正義の味方のように自分の命を投げ捨てても助けよう
とは思わないが、家族は大切でかけがえのないものだ、カズトはそう
思っている。

共に支えあい、泣き、悲しみ、怒り、そして笑う。

これほど近い関係は他にない。

赤の他人であるうとも、恋人、そして夫婦へ、最終的に家族へと変
わる。

家族とは人の集合が表す最上級の単位なのだ。

そしてカズトはこれがミコトしかいない。

一般人がわけのわからない力を持たされ、誰もいない場所へ移され
る。

世界の異物として一人生きていくことを余儀なくされる転生者とし
て、カズトの心は弱すぎる。

だからこそカズトはミコトを失いたくないのだ。

しかし家族だからこそミコトには自由に笑顔で生きていてほしい。

笑顔と危険を天秤に乗せたカズトの選択は 笑顔。

カズトは天秤にのる危険を少なくするために、自分の天秤へ移すこ
とを決めた。

そうすることでミコトの危険を少なくしたのだ。

だが実際はどうだ。

自分は危険の重さに耐えられず脱落し、その重さはすべてミコト一

人に背負わせた。

それどころかカズトが落とした分まで天秤に乗せてしまった。

それでは本末転倒だ。

すべては自分が弱かったこと。

それがすべての原因だ。

「はぁ………」

息をはく。

体外に放出される二酸化炭素と共に、体の中の黒い何かも出てほしくて、息をはく。

このまま考えていたら自分が別の人間になってしまいそうだった。

腹の底で生まれた『黒い何か』は消えたりしない。

だがたしかに小さくなっていくのが感じられた。

少し気分がよくなった。

カズトは今まで閉じていた瞼をあける。

「……知らない天井だ」

すると壁の一部がスライド、人が入ってくる。

「なにネタかましてんのよ。カズトをそんなキャラに育てた覚えは無いんだけど？」

「……残念なことに育てられた記憶はないな」

彼女は入ってくると手に持っていたリンゴをバックから取り出し、皮をむき始める。

「……姉ちゃん」

「ん？」

カズトが呼んだことに意味はない。
ただなんとなく呼びたくなっただけだ。

しゃりしゃりと包丁がリンゴをむく音だけが聞こえる。
お互いに無言でいると、ミコトが小さく、いたっ、と声をだす。
リンゴを持つ手からは少しだけ血が出ていた。

「ばか、慣れないことするからだよ……」

「ふふ、そうね。こついうのはカズトに任せるわ」

二人は顔を見合わせるとくすくすと笑いだす。
カズトの中に黒いなかはもう欠片もなかった。

第十話 「……私は、私は半端だったんだ」

カズトが倒れてからどうなったか。

ミコトから話を聞いたところ、やはりプレシアは

死んだ。

ミコトはギリギリで生きながらえたカズトを助けるために治癒魔法をかけた。

プレシアはそんなミコトに興味は無いのか、ジュエルシードを活性化させ次元の扉を開こうとした。

クロノはそれを阻止しようとしたが、重傷者であるカズトとミコトをジュエルシードの魔力流から守るので手いっぱい。

プレシアを止めるなんて出来そうもない状況だったらしい。

原作とは違い魔力流が吹き荒れていたが、フェイトがプレシアに想いを伝えるも、プレシアはそれを聞かずアリシアと共に次元の狭間へと落ちて行った。

つまり

「原作と何一つ変わらない結末だった……ってことよ」

そう、変えられなかったのだ。

原作の流れを大きく変えるはずだった『プレシアの生存』は失敗した。

だが思い返せば予想外のこともあったが、明らかに準備不足のものがほとんどだった。
プレシアとの戦いだってもと綿密に準備を重ねていればあんなことにはならなかったかもしれない。

ミコト達は原作を自分たちに都合よく解釈しすぎていたのだ。
現実はそのなにごとに甘くない、そう分かっているにもかかわらずミコト達は甘く見ていたのだ。

「私は 半端な気持ちだったんだね」

「姉ちゃん？」

突然の独白。

しかしカズトはミコトの目に強い感情の渦をみて、何も言わないことにした。

きっとこの独白は彼女にとって大切なステップになるはずだと信じて。

「うん、私には半端な覚悟しかなかった。

さつきね、フェイトの部屋を見てきたんだ。そしたら泣いてた。一人で声もあげず、泣いてた。九歳の子供が声を押し殺してだよ。慰めの言葉なんて浮かぶどころか、声もかけられない。

きっとフェイトは強い想いを持っていた。ただお母さんに笑ってほしいうて。

なのはだってそう。フェイトと友達になりたい、お話がしたいって。そんな小さいけど、大切な思い。それをつかみ取るために覚悟をもって戦ってた。

でも私は……どう？

私にはそんなのないよ。そんなもの 考えてすらいなかった」

身を切るような想いなのだろう。
両手で肩を抱くようにして、心の中を吐き出していく。

「プレシアが死ぬ時もうひとり分くらい手があれば助かるんじゃないか？」

救えるものなら救わないと？

……私は、私は半端だったんだ。

そんな適当な覚悟でプレシアの所に行つて、あげくカズトにこんなけがをさせて……私は！ 私は
「！」

その目に涙すら浮かび始めたミコトを見ていられなくなった。

これ以上カズトはミコトをこのままにさせたくなかった。

最後まで聞いていようと思つたが、そんなものは放つてしまえ。

腕に力を込めて上半身を起こす。

「ま、まだ動いちゃだめ！」

背中には焼き鑊を当てられたような痛みが。

だがそんな物は家族の涙の前には何の意味もない。

ミコトの静止を無視して焼けただれた腕を動かして
ミコトの
涙をぬぐう。

「だい……じょうぶ。どんなに半端でも……姉ちゃんのその気持ち
は間違つてなんかない」

ただ体を起こしただけなのに体にはひどい痛みがある。
だが言葉を止めるわけにはいかない。

「誰だって助けられるものは助けたいさ。だから今度はもつと
うまくやるう？　今回は失敗しちゃったけど、次は失敗しないよう
に努力してさ」

だから後悔で涙は流しちゃいけないよ。

「うん……うん！」

ぼろぼろと流れる涙を必死に堪えカズトの手を握る。
時おり漏れる声はしばらくの間、部屋に響いていた。

カズトとミコトの部屋の前ではリンディ提督が一人思案していた。
思案していることは、今聞こえた会話から彼らが悪いことを考える
ような人間だと思えなかった事について。

カズトと名乗る少年がミコトをかばってから早三日。
カズトは二日半眠っていたのだ。

その間リンディはミコトを事情聴取しある程度目的等を知っていた。ミコトからの話が本当であるならば、二人はなのはを助けに来たということだった。

元々特殊な能力者として自覚していた二人は、恩人の娘が危険なことに巻き込まれていると知って助けに行ったそうだった。

かなりの頻度で士郎に海鳴に来るように言われていた二人はこっそりと驚かせるためにきたところ、なのはが巻き込まれているところを発見。

助けるためにいろいろな準備を行い、いざ活動開始としたところで時の庭園に巻き込まれたそうだった。

だがしかし、管理局に勤め腹の探り合いも身に着けたリンディからすれば、穴だらけだ。

なぜ時の庭園の場所を知っているかというのもそのひとつ。

あそこは管理局でも逆探知で発見したようなもの。

ただの一般人が見つけれられるとは思えない。

彼らの行動理念も変なところがある。

巻き込まれているというなら、なのはを救い出せば事足りるはずだ。なのになぜ時の庭園でなのはに引き返すように言うのではなく、プレシアの計画阻止を優先したのだ。

言い出せばきりが無い。

クロノは事情聴取の時は何も言わなかったが、明らかに信用できないという顔をしていた。

なのはには悪いと思っているが、リンディもそうだった。

彼らを信用する気など無く、ここにいるのも彼らが何らかの動きをしたときに対応できるようにするための。

だがその認識をリンディは改めることにした。

確かに彼女たちには不審な点が多いが、誰かを助けようとしたからあそこにいたのだということは本当だろう。さっきの会話が本当ならプレシアも助けようとしていたことになる。どこでプレシアの情報を得たのかは知らないが、彼らはあの結果を望んだわけではなく、よりよい結果を望むが故の行動だった。きっと彼女たちはまっすぐな子供なのだ。

音を立てないように、カズトたちの部屋から離れていく。

……半端な想い。

彼女はそれしか思っていなかったといったが、それでもいいと思う。半端なものでもそれをもてない大人になるよりもずっといい。

この世界にはその半端な思いすら持てずに醜い大人になった人間なんて腐るほどいるのだ。

その分彼女たちには好印象を覚える。

「うーん、あの子達を管理局にスカウトできないかしら？」

クロノには毎回毎回止めてください、と言われるが彼女のような人間ならきつと誰かを想いやれる立派な人間になれるはずだ。

もちろんこのまままっすぐ育てば……だが。

現状、彼女たちを罪に問うつもりは無いが、このままだといつか彼女たちはどこかに利用されるだろう。

ミコトがもつあのレアスキルとカズトの肉体技術の数々。

あれは管理局としても研究の価値がある。

特にミコトが使った回復魔法、あれはとんでもない価値がある。

今の管理局の技術をもってしてもあのときのカズトは致命傷だった。だが彼女の魔法はそれを覆して見せた。

ミコト本人は知らないが、ミコトの知識の中には今は失われた魔法

の知識がいくつか存在している。その中の一つの魔法が回復魔法だ。あの回復魔法が広まれば、殉職率だってグッと下がるはず。

だが価値があるというのは、危険も付いてくる。

彼女の魔法が知られれば、犯罪者や戦争中の管理世界からどうにかして手に入れようとするだろう。

大規模質量兵器が禁止された今の戦争は兵士の数と質がものをいう。そのため兵士を死なせざらなくなるあの魔法は魅力的だ。

そういつた欲望にまみれた人間と関係を持ち続ければ、彼女たちが擦り切れる日もそう遠くない。

ならば彼女たちを守るためにも、管理局へスカウトしたい。

そうリンディは考えている。

そうしてリンディが歩いていると、ちょうど向こう側からクロノが歩いてきた。

「あつ、艦長。こんな時間にどうしたんですか？」

「ちょっとね……カズトさんが起きたって連絡をもらったの。でも今は私たちがお邪魔虫になりそうだったから引き上げてきたところよ」

「お邪魔虫？　なんですかそれは」

「ふふふ、兄弟の感動の再会ということよ。聴取に行くつもりだったのなら少し時間を置いたほうがいいと思うわ」

リンディがクロノの手に持っているものを指差す。

そこには聴取用の書類がある。

おそらくクロノはカズトとミコトの報告に矛盾が無いか調べに行く

つもりだったのだろう。

「……」

「どう？ それまでの時間いっしょにコーヒーでも飲まない？」

リンディは視線で近くの休憩所を示す。

少し考えていたようだが、仕方ないといわんばかりの顔でクロノはうなずいた。

「……はあ、分かりました。艦長がそういうなら。それとコーヒーは結構です」

「あら、まだコーヒーは早かったかしら？ じゃあココアのほうがいいわね」

もう自分は子供ではないとクロノが声を張り上げた。

さすがに14にもなって子供扱いは嫌なのだろう。

「母さん!!」

「冗談よ。あんまり目くじらたてないで。本当はこれがいいんでしょ？ はい、オレンジジュース」

しかしいつまでたっても結局クロノは子供扱いされているのであった。

ひとつの事件を解決したことで、和気藹々とした雰囲気のあるアースラだったが、そんな中でひとつだけ電気のついていない部屋があった。

本来客室として使われたり現地の人間が乗ったときのために空いている部屋だが、本来の使い方通り、ここには一人の現地協力者が休んでいた。

彼女の名は高町なのは。

このPT事件で中核をなし、この事件の早期解決に貢献した将来を渴望される魔導師である。

お父さん……ねえ、なんで？　なんで他のところの行っちゃうの……？

若干九歳で非公式ながらもAAを所得する才能を持つ彼女が、電気もつけずにベットのうえでひざを抱え座っていた。

数分前にエイミイからカズトが起きたと聞いてからずっとこの体勢だ。

なのは、ごめんな。約束なんだ。

ぎゅっとひざを抱き、顔をうずめる。

彼女自身、体に渦巻く何かが怖かった。

だが不思議とそれを押さえつけようとは思わない。

あの子に、カズト君に御神流を教えて強くしないといけないんだ。それにあの子達は遠い国で一人きりなんだ。お父さんが見に行かないと。だから我慢してくれ。

黒い何かは次第に形を作り、言葉になる。

まだ彼女は知らない。

その感情を人は

「あんな人……死んじゃえば良かったのに……」

憎悪と呼ぶ。

第十一話 「今日も元気に行きましょー!」

高町家の朝は早い。

家族の半分が武術をたしなむため、毎朝鍛錬の時間をとっているからだ。

まだ日も出始め、肌寒いころ高町家の家長・士郎は毎朝の日課である新聞を取りに出ている。

いつも通りならば士郎はこのまま家の中に入ってゆっくりするのだが、今日は少し違った。

高町と書かれた表札の下にあるポストを開けると、フツッと士郎の手をくぐり抜けて、はがきが落ちる。

「これは……?」

何気なく落ちたはがきを拾って裏を見た瞬間、固まる。

思ってもみなかった人からの知らせだったからだ。

どこかの海が映った絵葉書。

それを持って士郎は、家の中へと走り出す。

無性に誰かにこの知らせを伝えたかった。

その手紙の差出人は 内田 美琴。

第十一話 「今日も元気に行きましょー！」

士郎を夫に持ち、子供も三人もいるというのに、全く老いを感じさせない主婦・桃子は朝早くからキッチンで朝ごはんを作っていた。子供は二人が武術をしているし、最近は末の娘のなのはもどこかに出かけていて、朝からたくさん食べる。おいしそうに食べてくれるのを見れば、自然と桃子もうれしくなるというものだ。

一度は一流のレストランにパティシエとして勤めたこともある桃子が作り出す朝ごはんはおいしいと好評だ。

そうしてキッチンで朝ごはんを作っていると、ドタドタとあわてて走るような音が聞こえてきた。それに桃子は首をかしげた。

……誰かしら？

自慢じゃないが子供たちは良くできた子だと思っている。

このまま育てばすっかりとした、周りにも頼られるような大人になると思っている。

しつても厳しくしたから、廊下を走ることなんてほとんどない。

あってもなのは遅刻しそうな時か、美由紀が焦って起きたときくらいだろう。

だが今日はみんな起きているし、特に早く学校に行かなくてはいけない理由は無かったはず。

誰かが走るようなことは無いのだ。

桃子はキッチンから顔を出して下手人を見る。

そこにいたのは一番ないと思っていた自分の夫の姿だった。

夫の士郎は走ってこっちに来る。

みれば顔がずいぶんとうれしそうだ。

あそこまでうれしそうなのはめったに見たことがない。

……いったい何があったのかしら？

桃子はあとサラダの盛り付けだけとなった朝ごはんを作る手を止めて、士郎の方へ近づく。

「もう、廊下は走らないのよ。いったいどうしたの？」

「桃子！ これを見てくれ！」

そう言つて渡されたのは一枚のはがき。
裏を見ればきれいな海の絵が書いてある。
その差出人は内田ミコトとなっている。
それを桃子はみて大いに驚く。
その名前が書いてある頼りなんて今まで一度もなかったからだ。
さらにそこには「約束よりも早いけれど来週の土曜日に日本へ来たいので、泊めてほしい」とまで書いてある。

「これって……」

「ああ、あの子たちがもうすぐ日本に来るんだ！」

それで士郎がここまで喜んでるわけに納得した。

桃子は知っている。

士郎が親友との約束を守れず泣いた日のことを。

残された子供たちを守っていこうと決めたことを。

ずっと傍で見してきた。

今まで足しげくイギリスに通い、二人のことを守ろうとしたことを。

今では二人を実の子供のように思っていることも。

桃子は全部知っている。

だから二人がこうして日本に来るといふ知らせは、自分もうれしい
気分させるには十分なことだった。

「朝から二人してどうしたんだよ」

夫婦二人で手をとって喜んでいると、長男の恭也がリビングへ入ってくる。

「実は……」

士郎はこれを知ってほしいのか、嬉々として説明していく。恭也もカズトには御神流の修行のために、何度かイギリスで手合わせしているため知っているのだ。

あいにく喫茶店業なので桃子は二人を直接見たことが無い。せいぜい士郎がとってきた写真のみだ。

「そうか、カズトがこっちにくるのか……なら歓迎してやらないとな、もちろん御神流の歓迎で」

そうそつぽを向きながらいう。

恭也にとってカズトは少し年の離れた弟のようなものだ。それを歓迎することに照れているのだろう。

いつもならここで士郎が恭也をからかうが、今日は一味違う。

「そうだなあ、それもいいか」

むしろ士郎はうれしすぎて深く考えていない。

恭也の冗談も真にうけている。

御神流の歓迎というのは知らないが、かなりの苦行になるはずだ。カズトがんばれ、と思わずメールを送る桃子であった。

「へーそっか、ミコトちゃんも来るんだあ。私あったことないから楽しみだなあ」

そういつて桃子の後ろから現れるのは長女の美由紀。

さすがに翠屋が繁盛しているとはいえ、イギリスにちよくちよく行くほどの余裕はないため、美由紀はイギリスに行つて二人とあつた

ことが無い。

それはなのはも同じだ。

しかし家族が帰ってくるたびに遠い異国の兄弟のことを聞いているのは、やはり興味があるからだろう。

「そうね、私も楽しみなの」

「だよねえ、写真で見ただけミコトちゃんってすっごくかわいいもんね。ああ、早く会ってみたいなあ」

楽しみだ、歓迎会はどうしようか。

とりとめないことをいろいろなことを話していると、肩にフェレットに乗せたなのはが帰ってきた。

なのはがリビングに入ると土郎は思い出したかのように話を切り出す。

「そうだなのはに聞きたいんだが、ミコトちゃんをしばらくなのはの部屋に止めてほしいんだが頼めるか？」

「えっ……えと、なんのお話？」

帰ってきたばかりのなのはには何の話かわからず、聞き返す。

それに土郎は、すまんと言って笑ったあとに説明しだした。

今度ミコトとカズトが来ることと、家に滞在すること。

しかし道場に泊めるわけにはいかないので、なのはの部屋に泊めてほしいこと。

それらを丁寧によく説明した。

するとなのはは、それを少し考えたあと、

「ミコトちゃんだけなんだよね？」

「ああ、カズトはすまんが」

「俺の部屋だろ、父さん」

「すまんな迷惑をかける」

大丈夫と恭也は笑う。

事実弟のような存在と同じ部屋というのは少し楽しみだ。

そこで、パンツと乾いた音が広がる。

桃子がある程度話がまとまったと判断して手をたたいたのだ。

「みんな、もうすぐ学校よ。朝ごはんを食べて、今日も元気に行きましょー！」

朝食を食べた後、学校まで行く時間の空きで、自分の部屋にこもっ

ていた。

……なんで来ちゃったのかな。

心を占めるのは新しく来る人間のことだ。

今家族の中では彼らを歓迎する雰囲気形成されつつある。

だがそれはなのにとって許せることではない。

ぎりっ

歯を噛み締める。

どうにも表せない黒い何かはまたなのはの体の中に溜まっていく。

朝の魔法の時間でそれは全部吐き出したと思ってた。

でも違う。

それはいつまでもなのはの体の中から消えてなくなることはない。

胸の中心でそれは大きくなる。

家族が彼らの話をすればするほどに、彼らがこの家に近づくといい

それだけで、なのはは自分が抑えられそうになかった。

頭の中をぐるぐると回る何かは言葉になりそうでならない。

それがいつそうなのはを苛立たせる。

ドアにもたれたあと、ずるずると腰を下ろす。

膝を抱えてなのははじっとする。

そうして母に呼ばれるまでずっと一人でした。

「ん〜……」

ミコトは体をぐっと伸ばす。
ずっとお世話になっていた空家に別れを告げるために、一日中掃除をしていたのだ。

別にそこまできれいにするつもりはなかったのだが、カズトが使ったらきれいにする！と意気込むので仕方なく隅から隅まで細かく掃除しているのだ。

あまりやる気のないミコトに比べて、カズトのほうはエプロンと雑巾装備でやる気満々だ。

ミコトの三倍以上の速度で部屋を掃除していく姿を見ると、お前は現役掃除婦かつ、と突っ込みたくなる。

わずか12の少年の姿である彼にそう言いたくなるくらい、掃除する姿は似合っていた。

アイテム欄を開いて中から冷えた1リットルのスポーツドリンクを取り出し、一気におさめる。

もちろんコップにとるなんてことはしない。

ミコトはそのままがぶ飲み派だ。

「……ぶは〜」

……うまい、やっぱり疲れた後はこれに限るわ。

ミコトは疲れた体に染みる冷たさを、どこかくすぐったく思いつつまた掃除を開始する。

少なくとも二日後までにこのでかい家のすべてを掃除しなくてはいけないのだ。

子供の体で大人と同じだけ掃除するのは意外に手間がかかるのだ。まあ高いところはミコトが飛行魔法を使うので、普通の大人よりはラクだが。

……あと、三日。

ミコトはあのPT事件からほとんどをアースラに拘束されていた。いろいろと罪になるようなこともあったのだが、嚴重注意に収まった。

どうやらリンディ提督がいろいろと便宜を払ってくれたらしい。それとなくエイミィからそう聞いた。

とはいえ、一応ミコトたちは十日ほど拘束され、現在に至る。

拘束中になのはの家に手紙を出したので、それにアースラの方が合わせてくれたらしい。

ちなみになのはとはまだ一度も会話していないので、ミコトはカズトに先を越されたようで、悔しがっていた。

あと三日で約束の土曜日になる。

もし行かなければ昔のつてを使っての大搜索を土郎がするかもしれないから、ミコトも遅刻することは考えていない。

ならば、目の前の問題を片づけるのみ。

ミコトは雑巾片手にまた廊下を拭きはじめた。

「……」

俺はミコトが掃除をするさまを横目にみていた。^{カスト}

はたから見れば集中しているように見えるが、その実、ミコトを見ながらも将来のことについて思案していた。

ミコトは対して深く考えていないが、A Sの介入はかなり難しいと言わざるおえない。

おそらくミコトはリインフォースを救うために様々な介入を行うつもりだ。

だが、具体的には……何を？

時空管理局へ闇の書のありかを伝えて早い段階での調査等を行う。

その一つの手だ。

あるかは分からないが、もしかしたら救う手立てがあるかもしれない。

無限書庫にはなにがあるのかわからない。

そう聞いたこともあるのだから、あっても不思議でないが、その量ゆえに見つからなくても不思議ではない。

つまり原作での結末が変わらない可能性が高い。

いや原作どおりにいけば儲けものか。

早い段階からの調査で、修復不可能と判断されて、グレアムの案が採用されるかもしれない。

一人と一つの世界。

どっちが重いかなんて誰だってわかる。

命は天秤で量ることができないと人は言うが、それ以外で測る方法が無いのだからしかたない。

俺達は原作を知っているから、管理者権限をはやてが使い闇の書の防衛プログラムの吐き出しなんて博打が成功すると信じていることができる。

だが、直接人の命を背負う上層部からすれば、そんな不確定な方法はとれないと一蹴するにきまっている。

二つ目に直接はやてに介入して、早い段階から募集をしよう。

たしかにこれなら猫に気をつければシグナムたちの罪はいくらか減るはずだ。

ラインフォースのほうも400項を超えてから、意見を聞けば救える手立ても作れるかもしれない。

だがこれは俺たちが非常に危ない。

守護騎士たちははやてのためなら命をいとわない覚悟をもっている。そこに来た俺たちのような闇の書を知っているものが現れたら？

はつきり言って怪しすぎる。

俺が守護騎士なら、口封じをすることを考える。

そうでもないかと、管理局が主を捕まえに来るかもしれないし、裏をかかれて主を守りきれないかもしれない。

ならば余計なことをするまえに……ということだ。

もし自分たちが守護騎士と真っ向からやりあって打倒できるような強さがあるのならば、二つ目の方法をとってもいいかもしれない。

しかし現実には守護騎士に手も足も出ないとわかっている。

特に傀儡兵の戦闘でそれを思い知った。

もし少しでも介入をしたいというのであれば、一つ目の方法を。

これは情報提供だけで自分たちの身柄は安全だから。

ギャンブルをしてでも、はやてサイドに関わりたいというのならば二つ目の方法を。

もちろん俺的には三つ目の放っておくを選択するが。

誰にも悟られないように溜息をこぼす。

キッチンを拭きながら、今後はどうなるのかなと思う。

少なくとも高町家でお世話になるのだからいろいろと充実した日々になることはわかりきっている。

きつと恭也に勝負を仕掛け、そして負け続けながらも有意義な日々が過ごせる。

LVアップは遅いかもしれないけれど、たしかな戦闘技術を覚えられるのはありがたい。

それに桃子が本当に年不相応に見えるのか楽しみでもある。

他にもおいしいと評判のシュークリーム。

一応家事が趣味でお菓子作りにも通じており、その関係でシュークリームがとても楽しみなのだ。

……それじゃ、シュークリームのためにいっちょがんばりますか！

アースラのブリッジの中でクロノは一枚の報告書とにらめっこしていた。

以前アースラで二人が滞在したときに身体能力の測定をしていて、その時にとったデータだった。

「クロノ君？ どうしたの紙とにらめっこしちゃって」

眉間にしわを寄せて眺めていたクロノに、後ろからひょっこりと話しかけてきたのはエイミィだ。

「それ……この前の二人の報告書だね？ おかしなところでもあった？」

「いや、別に報告自体におかしいところは何一つない。問題はその内容だ」

「内容？」

「ああ、このデータは明らかにおかしい。12歳の少年が垂直飛び90cmなんてふざけるとしか思えない。他のデータもだ。年不相応の結果ばかりだ。このままいけば、肉体番付にも出られるな」

クロノが指をさして示したのは身体能力のグラフだった。

カズトは魔法による強化なしで、成人男性を大きく上回る。

魔力そのものは民間魔導師の平均よりも多く、クロノ半分程度だ。

もともとそこまで多くないクロノ半分でそう警戒することではない

と普通なら判断し身体測定など行わないのが普通だが、居合い拳を見ていたクロノが無理やり行ったのだ。

結果は予想の通り、大きく普通を逸脱する結果となった。

「うわ……ほんとだ。魔法なしで50m走5・12とか……この子ほんとに12歳？」

「戸籍等を調べた限りだと正真正銘12歳だ。それに時の庭園ではもっと早い速度で走っていた」

クロノ自身も信じられずに何度も確認をした。

だが結果は変わらない。

彼らは正真正銘12歳なのだ。

「へ〜。あれ、でもお姉ちゃんのほうはそうでもないね」

「そうだな。魔力値がそこそこあるが、なのはほどではない。これなら、将来的にはAAAくらいがいいところだろうな」

対してカズトの魔導師から見てもおかしな結果と比べ、ミコトの結果はいたって普通のものだった。

管理外世界で魔力持ちは確かに珍しいが、いないわけではない。

事実クロノの師匠であるグレアムもこの世界出身の凄腕魔導師だ。

魔力量も多くはあるが、同時期に見つかったのはと比べるとどうしても見劣りしてしまう。

たしかにクロノの二倍近くあるが、これはクロノがAAAにしては魔力量が少ないことに起因している。

AAAランクとしてはミコトの魔力量はわりと大きい方かな？ で済ませることができるレベルだ。

「でもAAAでも十分すごいよ。それにこの子は管理局に勤めるのに結構乗り気なんですよ？ 艦長がすごく喜んでたことがあったけど」

「そうなんだ……この子は将来的に嘱託の資格を取ってから管理局に勤めたいというもんだから、母さんがなあ……この子のレアスキルの回復魔法をほしがるもんだから」

「あはは……」

若干乾いた笑みを浮かべるエイミー、それはリンディの勧誘癖を知っているからでる笑いなのか。

最初は正体不明だった彼女の回復魔法も今はレアスキルということに落ち着いた。

すでに失われた魔法の知識で作られた魔法だったからだ。そのことを知ったリンディは保護の目的で彼女を管理局へと勧誘してきたのだ。

普通ここで悩むのだが、彼女は即決で、やります！ といった。これには勧誘に慣れていたクロノやエイミーもかなり驚いた。

「だが管理局に勤めるときに妙な条件を付けてきたんだ」

「妙？」

「ああ。なんでも半年は嘱託試験を待つてほしいらしい」

「それは……ほら、まだ管理局に入るのが不安だからもう少し待つてくれとか？」

「自分から入れてくれと言ったのに？」

「うーん、半年以内にやりたいことがある」

「……それだろうな」

半年待つてほしい。

そこからわかるのは半年以内に何か彼女がするということだけだ。何をするのは分からない。

……別に彼女たちのことをそこまで警戒する必要もないんじゃないか？

たしかにそう考えることもある。だがなぜだろう。

なぜかわからないが、今までに培ってきた勘が彼女達から目を離してはいけないとささやく。

クロノは実戦に身を置く魔導師だ。

今までになんどもこの勘。いわばシックスセンスによって助けられてきた。

人はこの勘を経験の積み重ねから来る短時間思考だというが、クロノもそう思っている。

だからこそ彼女たちに警戒を発する勘を無視できずに、こうしてずるずると調べているのだ。

結果はともかくとして、何かが執務官のクロノの意識に引っかかっている。

「時間をかけて見ていくしかないと思うよ」

「……ふう、そうだな」

そう言うとクロノは少し表情を和らげて、エイミィに食事に誘い歩いて行った。

……どうすっかな。

肌寒い空気が満ちる夜。

多くの人間はすでに夢の中に落ちる深夜に俺は家の屋根の上にいる。姉ちゃんと部屋の掃除を終わらせてから、すでに3時間が経過していた。

あれからベットに入った方がいいが、どうしても寝られなかったので星を見に来たのだ。

もし流れ星でも流れるならば、成功するようにと3回いっておこうかな、そう思って屋根の上にあがった。

地方都市であり都会とはいえない海鳴市は星がよく見える。

天の川はさすがに見えないが、いくつもの星がきらめくその夜空に、思わず声もなく見入る。

そこへ一筋の線が走った。

「あつ……」

それは無情にも何かを願う暇さえもあたえず、スッ、と消えていった。

ほのかな光は瞳のなかに一瞬だけ現れ消える。

それに俺は願いを託すことができなかつた。

しばし口をあけて、固まってしまう。

願うことができなかつた。

それがわかると自分の突発的な対応力のなさに笑ってしまう。

……俺は昔からそうだった。

突発的に何かしてくれなんて言われると、あわあわとなつて、結局頼んで来た本人がやった方が早いなんてよくあること。

いわゆる使えないやつ、周りにもそう思われていたと思う。

こつちに来てからは波乱万丈の人生を走っているからか、そこそこ対応できるようにはなつたけど、まだまだ。

祈ろうと思つていても、すぐにはできなかつた。

こんな俺が本当に命をかけた戦闘なんてできるんだろうか。

人の命を背負つて戦闘なんてできるのか？

俺はいつだって思考を続ける。

今はもう会えない両親に『人は思考をすることで前へと進む』そう教わってからずっと続けてきたことだから。

だから俺は考え続ける。

どうすれば姉ちゃんも無事で、俺も幸せになれるのか。

いつまでだつて考え続ける。

そうすることで俺が生き残れるのならば、俺はいくらだつて考えて

やる。

それが俺のやるべきことだ。

少しだけ陰鬱な気分になってしまった。

俺は立ち上がって、空間湾曲のスキルを発動すると、竹刀を取り出した。

それをゆっくりと、しかし丁寧に振り始める。

下手の考え、休むにいたる。

そんな言葉があるのだ。

少し体を動かした方が、いい考えも出るかもしれない。

ただひたすらに竹刀を振って、俺は一つのことだけに集中していく。

竹刀の軌道が俺の視界で残線を残し、それが延々となぞられていく。風が切れるような音が俺の鼓膜をなぞる。

はっ、吐く息は俺の体から熱を奪う。

規則的な音が俺から時間をなくし、ただ本数だけが増えていった。

クロノとエイミイは食堂で満足するだけの量を食べると、残りの業務を手早く二人で済ませていった。

そのあたりに執務官とその補佐官の相性の良さがうかがえる。いつもの様子からはそうと思えないが、かなり優秀なエイミイは仕事との切り替えがよくできる。

しかし書類仕事などの比較的頭脳労働ではマルチタスクを使えるため意外と暇が多い。

エイミイはそういう時に決まってクロノへと話かけていた。今日の話の中心はやはりあの二人のことだ。

「そう言えばカズト君だっけ。あの子の魔法の術式教えてもらったんでしよう？ どうだった？」

途中エイミイが思い出したことをクロノに聞いた。

「ああ、あれか。とてもじゃないけど僕には使えないね」

「そうなの？ 結構性能よさそうだったけど」

「確かに外から見ればそう見えるかもしれないけど……僕から言わせれば失敗魔法だよ」

「失敗？」

「普通魔法の術式は効率よく運用できるように整理されているものなんだ。でもあれはとてもじゃないけど……ね」

クロノが苦虫を噛んだような顔を作る。

「やっぱりあれ？ 感覚で魔法を組んでる子って感じ？」

エイミーが言ったのは一部の感覚で魔法を組む人間たちの術式のことだった。

彼らのような感覚派の人間の術式はとてでもないが他人が理解できないような組み合わせになっていたりして、使い物にならないのが多い。

一般的に優れた魔法というのは大衆が使いやすく、効率のいい魔法のことだ。

感覚で魔法を作る人間は確かに天才肌な奴が多いのだが、どうにも大衆のことを意識しようとはしていない。

エイミーはそういった類なのかと思ったのだ。

「そうじゃないよ。僕には純粹に使えないんだ」

「クロノ君が？」

これでいてかなり魔法についての造形に詳しいクロノが使えないと聞いたことに大層驚く。

クロノは初見の魔法でも術式がわかればある程度の魔法は使ってみせる。

周りはその天才だと持ち上げることもあるが、純粹に努力の果てにあることを知ってるエイミーは余計に驚いたのだ。

「え、ええ？　もしかしてレアスキル？」

「いいや。純粹に僕の処理能力では使えないだけだよ」

口をあぐりと開けて呆然とする。

クロノは執務官に恥じないだけの処理能力を持っている。

……それでも、足りない？

「一応あの居合い拳という方は使えたよ。まああれはそこまで優位性もないから使う気はないが……あの瞬動というのは本当に恐ろしい」

クロノが手元を操作してディスプレイを出した。

「術式を教えてもらって調べてみたんだが、とんでもない構成だったよ。純粹に使っている時は早く動いたための魔法なんだろうけど……」

対比するように横に出した術式はなのはが使っていたフラッシュムーブ。

これはなのはが飛行する時に使うフライアーフィンに魔力を追加して加速する魔法だが、カズトが用いていた瞬動と同様に『早く移動すること』を目的としている。

なのはも未だ魔法は初心者で術式に甘いところはあるが、初心者にしては十分すぎるほどの魔法だ。術式も外から見て綺麗なものだ。

反対にカズトの瞬動は、術式を絵に表すと　ぐちゃぐちゃ。

「足に魔力を送り込み肉体強化。さらに足の裏に魔法陣を生み出してそれを踏んだ時に反作用を大きくしてさらに跳躍する魔法ねえ……あ、すごい。跳躍する瞬間に体を魔力で覆って空気抵抗を少なくしてる！……これはなんともほんとに無茶な術式だねえ」

「ああ、とりあえず早くなりそうな因子を詰め込んだような魔法だな。正直よく動いていると思うよ」

「そつだよね。普通こんな術式だったらバグとか起きるもん」

エイミイも強く同意する。

こんな無茶な術式ははつきり言って使えない。

ぐちゃぐちゃな魔法はそれだけ発動までに時間もかかるし、使わずらい。

逆にこんな術式をよく戦場で使えたね。と感心してしまった。

「簡単にしようという努力が見てとれるが……これは詰め込み過ぎだ。かといってこれほど汚い術式はデバイスに登録して使うこともできない」

デバイスは近年、完成されたといっても過言でないほどの発展を見せているが、それでもこんな無茶な術式の魔法が機械ではないデバイスに起動できるかと言われれば……首を横に振らざるおえまい。

「なのはちゃんもすごいと思ってたけど……なんか今回はすごい人でいっぱいだねえ……」

思わずエイミイがつぶやいた言葉はクロノに全力で頷かせるに十分な威力をもっていた。

「まったく……」

ただひたすらに振る。

もう何本振ったのだろうか。

俺の体は汗でびっしょりと濡れている。^{キャスト}

腕はどこか重く感じて、ひきつるような痛みがあった。

何処からか鳥の声が聞こえる。

チチチ、と特徴的な音は俺の耳によく響いた。

気がつけば、俺の頬に光がさしている。

もう朝日も昇っている。

どうやら熱中しすぎて、一晩振っていたみたいだ。

俺は竹刀をしまって家の中に入ると、フローリングの床をスリッパでパタパタと鳴らしながら歩く。

腕に付けた時計を読むと五時半を示していた。

どうやら五時間以上振っていたようだ。

少しそれに苦笑した後、今日の睡眠時間は何処でとろうか、と思いつつミコトの部屋に入る。

ドアを開ければ、姉ちゃんは寝袋の中に丸まって入っていた。

俺たちは朝早く起きて、夜も早く寝るといついたって子供らしい生活を心がけているから、いつもこのくらいの時間に起きるようにしている。

まあ姉ちゃんは起きられないから、俺が起こすのが日課だが。

いつもすぐには起きない姉ちゃんに少しだけ振動を与えながら、おきるーと声をかける。

「ん〜……あと……」

お約束を外さない姉ちゃんはそういうとまた夢の中へ行ってしまう。だが二十年近く一緒にくらしてきた俺に隙はない。

姉ちゃんの手の届かない場所に目覚ましを置いたあと、その目覚ましを五分間隔にセットし、俺はその場を離れた。

「さてと、飯だな」

姉ちゃんが起きてくるまでに俺はキッチンで朝ごはんを作り始める。言うておくが俺の料理スキルはMAXだ。

今日の朝の献立は、酒粕で味付けをした鮭をおかず、隣の農家で撃っていたふるふき大根、菊花和えと軽い漬物。

さらにほかほかの温かいご飯とみそ汁。

これぞ日本の朝ごはん。

文句のつけようのない完成度だ。

若干栄養が偏っているきがしないでもないが、朝から嫌いなものを食えんという姉ちゃんの見解を採用していたら、いつの間にかこうなっていた。

男料理もいいが、こういった手の込んだ料理の方が作っていて楽しくなる。

「ふああ、おはよー」

俺の料理が終盤に差し掛かった頃に姉ちゃんが起きてきた。

若干髪に癖が付いているが、それをアクセントにどこかかわいらし

さが上がっている。

まさに美人には何でも似合っつてやつか。

「おはよ、まずは顔を洗って、それからご飯。今日は残りの掃除をやったらＬＶあげに行くんだろ？ さっさと動く！」

コクコクと頭を震わせ、俺の返事に頷く。

やっぱりその様子はキュート。

あやうく手に持っていた皿を落としそうになった。

眠そうに目をこすりながら、トコトコと洗面台へ行く。

その間に俺は深呼吸をしておく。

すると洗面台のほうから、うきやあああ、と叫び声が聞こえた。

またか。

いつも道理なら、また冷たい水を顔に当ててびっくりしたんだろ。

普通なら水に触った時点で気がつくが、姉ちゃんの寝起きの悪さは結構ヤバい。

なにがヤバいって、何でも疑わずに信じるし、ぼーっとして周りを全く見ていない。

もしあのまま大きくなって管理局に入って徹夜したあとの寝起きに男と遭遇したら襲われるかもしれない。

……まずいな。

改めて考えてもそりやまずい。

今度何らかの対策を打つべきだな。

俺はいくつかの案を思い浮かべながら食器を用意し始める。

……そういえば、ジュエルシードのこともケリがついたし、そろそろ夜に会いにでも行こうか。

ふと、以前出会って仲良くなった少女が頭に浮かんだ。

何かの拍子に消えてしまいそうなくらい儂い少女。

彼女は今どうしているだろうか。

前に料理がうまい妹のような子がいると言っていた。

ならきつと元気なんだろうな。

今度商店街にいつ探してみようか。

きつと顔を合わせれば、楽しいはずだ。

未来を思うと笑みがこぼれる。

まあ、半年後にはそんなこと言ってる余裕はないんだろうけど……

例えそうだとしても。

少なくとも目の前の小さな楽しみのために、今日も一日がんばりますか。

第十二話 「歯あくいしばれえ!!」

ある晴れた昼下がりに。俺たちは並んで海鳴のビル街にたたずむ。以前なのはが大樹と戦ったここでは草木がすれ合って音を鳴らし、その静寂のなかで俺たちは無言のまま向かい合う。ある種の緊張感がそこにはあった。

以前出会った管理外世界の魔獣も逃げ出すような殺気が刺す。ビリビリと震える大気。

鳥肌が立ちそうな恐ろしい魔力の奔流が、ただ相對するだけの俺たちに襲いかかる。

彼女はただ立っているだけだというのに、俺たちはここに立とうとするその意志を削られる。

ツーンと冷や汗が流れ出る。

彼女の視線が俺を見据えた。

まるで槍のように刺さるその視線は劫火のごとく俺を燃やしつくそうとしているようだ。

溢れ出る魔力は彼女を取り囲むように舞う。

まるで彼女を唯一の主人とし、嬉々として従う妖精のように。

……これが天才。魔導に愛されたもの。

ただ見据えるだけだった彼女が腕を持ち上げ、指を高らかに鳴らす。すると、それを中心とするように薄い膜が広がり、一瞬で俺と町を包み込んだ。

魔導師が良く使う一般的な結界だ。

「レイジングハート」

固まる俺たちを余所に彼女は愛杖に語りかける。

それに答えるように赤い宝石は点灯するとその姿を1m弱の杖へと変えた。

彼女の服も光に包まれると、白を基調としたバリアジャケットに変わる。

「もう……帰って」

彼女は震える声と共に杖をつきつける。

彼女の声が震える理由はいったい何なのか。

歓喜か？

憎悪か？

俺がそれを判別することはできない。

追われる小鹿のように弱々しい笑みを張りつけながら、しかし獲物に狙いを定めた肉食獣のような瞳をした少女はいう。

「私は……カズトなんて人、いらぬ。だから、私たちの前に……二度と　顔をみせないで」

圧倒的な魔導を携えて俺たちの前に立ちふさがる魔導師。

相対する彼女の名は

高町なのは。

第十二話 「歯あくいしばねえ!」

「え、ちょっと……これどういうことよ!」

ミコトは結界の外で、一人叫ぶ。

その鬼気迫る姿に周りの人がぎょっと振り向くがそんなことにかま
っていられるほど、今の彼女は落ち着いていられなかった。

「僕にも何が何だか……なのは、念話も拒否してるみたいだし……」

そう答えたのはミコトの肩に乗るフェレットだ。

魔力の消費を抑えるために変身魔法で姿を変えたユーノ・スクライアは目の前の結界に干渉しようと手を伸ばすが、時の庭園での戦いで魔力を使いきったユーノでは干渉することができない。

頭を抱えたフェレットの愛らしい姿に、今のミコトはいらだちしか感じなかった。

「だからそんなことじゃなくて！　なんでなのはがカズトだけ連れて結界の中に入ったのかって聞いているの！！」

「僕にもわからないってば！　……そもそもなのはのあんな雰囲気だって始めてだったんだ。なんでこんなことをしたのか予想もつかないよ……」

肩をおとして考えるユーノ。

「……どうにかして結界を破壊とかできない？」

「多分無理だと思う。なのはが作った結界だからそんなに丈夫じゃないとは思っけど、そこまで広い範囲を覆わずに強度優先で作ってあるから……僕じゃ壊せなかった」

「そう……ならアースラは？」

「アースラに連絡がつけばできると思う。でも……」

「ああ……そう言えばもう本局に出発しちゃったんだっけ」

結界を壊せず、どうしようもないこの状況で二人は待つことしかできない。

ミコトはあのなのはの瞳を思い出しただけで鳥肌が立つ。

……どうしてこうなったんだろう。

ミコトはここにきてのいきなりの展開に戸惑うばかりだ。

原作にないなのはの暴走ともとれるこの行動に、どうすればいいのかわからない。

本来の予定ならば、以前予告した通りミコトとカズトはこのまま翠屋にいつて挨拶をしているいろいろ話を聞いたりして楽しむはずだったのだ。

そうして翠屋に行く途中でなのはと出会った。

これからは面を向かって話せると喜んで近寄ったら、あの視線だ。

あの瞬間、確かにミコトは恐れを抱いた。

そしてなのはとカズトは結界の中に二人でいるのだ。

射殺さんばかりの瞳で見据える魔導師が人を結界内に閉じ込める。

ここから考えられるのはどれも悪いことばかりだ。

いい考えなんて浮かびそうもない。

……怪我はしないで。

祈るしかない自分の不甲斐なさに唇をかみしめる。

ミコトにできることは、なかった。

……いや違う。絶対に何かできることがあるはずだ。

祈るだけじゃない。

弟が危険な時になにもしない姉がいていいはずがない。
ならばあがく。

結界の中届くかわからない弟へ向けて今持てる魔力を使って、念話を飛ばす。

ただ彼の身を案じて。

彼が結界で一人だと勘違いして心が折れないように。

私は近くにいろよ、そう伝わるように心をこめて。

……とどけ！

世界はぐるぐる回ってる。

俺は俺がここにいないくてもいつまでだって世界が回ってることを知ってる。

俺がいなくても世界は回るけど、やっぱり俺も世界の歯車の一部だから、いないとほんの少しだけ周りが悪くなる。

きっと誰も気がつかないくらいの変化。

俺はそれに気がついてほしいといつだって願ってる。

弱い人間の小さな欲望。

そんなに大それた願いなんかじゃない。

そう、俺の願いは本当に小さなものなんだ。

でも俺がそれを叶えることはもうない。

完成された世界に落ちた異分子。

重なり合う歯車の中に入り込んだごみはいずれ全体をゆがめる原因となるだろう。

小さな歯車としての幸せしかほしくなかったのに、俺はいつの間にかただあるだけで他をゆがめる害悪と変化した。

今までそれを実感したことはない。

どこか心の底でそう思っていたはずなのに、俺の周りで俺のせいで不幸になった人間を見なかったから、大丈夫といって笑っていた。でも違う。

やっぱり俺は歯車をゆがめるごみでしかない。

だってそうだよ。

目の前には泣きそうな女の子が涙も流せずに笑ってる。

俺にその心を、積ってしまった黒い『何か』をぶつけてくる。

まるで俺がいたからこんなものを抱えることになったのだと、糾弾するように。

お前がいなければ私はきれいでいられたと叫ぶように。

その身を包む何かを俺にぶつける。

きつとこれは彼女の正当なやつあたりだ。

やつあたり。

なのはがどんな理由で俺にそれをしようと思ったのか。

わからないけど、受けてもいいかな、そう思ってしまった。
きっと彼女は俺がこの世界に来たことによるバタフライ効果の犠牲者だろう。

知らずに捻じ曲げられた運命の中で、辛い思いをひた隠しにして、彼女は生きていたはずだ。

俺は抵抗する気もなく。その場で立つ。

さあ早く撃て。

なのはの目を見ながら、俺は待った。
しかしその時

『……………』

何処からか声が聞こえた。

『……………っつて』

それは俺が日常的に聞いていた音。
もはや生活の一部。
手放すことなんて考えないもの。

なぜ今？

タイミングなんていつもはみてくれない神様のいきな計らいか？
次第に鮮明になる念話は

がんばってー！！

そう言っていた。

「これって……どういうこと？」

ただやつあたりを受ける気もなくなった。

姉ちゃんからお達しが来た以上、俺は俺の全力を尽くすしかない。とりあえずなのはに質問。

しかし彼女はそれに答える気はないのか、無言。

自他ともに認める平和主義者の俺から彼女に攻撃しようなんて欠片も思っっちゃいない。

だからもう一回聞いてみた。

「あのだ、これ」

「うるさい」

即断。

俺を結界に引きずり込んで会話をする気が無いらしい。
ということはお話？

でもそんなフラグを立てた覚えがない俺としては全力でご遠慮したい。

「ねえ、約束……してくれないかな？」

「……約束？」

……約束？

また突然に変な言葉がでたことで。

レイジングハート構えて俺に迫る時点でそれは約束じゃなくて脅迫だと思う。

そう言おうとしたが、無理。

今のなのはがそんな冗談を聞いてくれるとも思えない。

だから俺もまじめにつき合うことにする。

「そう……約束。大事な約束だよ」

大事な約束ね。

言葉を探しているのか、瞳を閉じる。

そしてそれを再び開けたときのなのはを見て、鳥肌が立った。

完全に濁りきった目。

どこかで見た覚えがある。

違う俺があの子を忘れるはずがない。

あれは俺たちを金の塊としか見ない親族どもがしていた目だ。

あの親族と同様の目を持つ少女に、俺は気圧されるように一歩後ろへと下がっていた。

カラカラになつたのどを無理やり震わせて声を絞り出す。

「……どんな？」

「さっきも言ったよね？ もう二度と私たちの前に来ないでって。それを約束してほしいんだ」

何がそんなに面白いのだろう。

楽しそうになのが笑った。

「なんでか聞いてもいいか……？」

全力で頷いて逃げようとする体を押さえつけて、俺は逆に質問してみた。

「うん？ 私そんなこと聞いてないんだけどなあ」

その俺から頷く以外の言葉が出たのが気に食わないのだろう。なのはの体から感じる魔力の密度がもう一段階上がる。

「……ああ、早く約束してくれればいいのに」

フワアと風を起こしながらなのはは空へ昇る。

電気も通わない結界の中はひどく暗い。

月明かりのみが照らすこの場所でののはは月明かりを一身に浴びて空へ。

俺からは逆光でなのはの表情が黒く染まりうまく見えない。

以前この場所で見たのはは白く美しい天使のように見えたというのに。

「そうだね、じゃあ『お話』しよっか」

今のなのはは天使になんて見えやしない。

闇を背負い。

影をその顔に張り付け、それでもどこか笑っているかわかる彼女はまるで　悪魔のようだ。

「無理矢理でも約束……してもらっから」

彼女が腕を振り上げる。

背後に魔力が集束。

現れたのはいくつもの魔力弾。

まるで王につき従うように次々と馳せ参じる。

闇の中でも煌々と光るそれは恐ろしいくらいの魔力が圧縮されてる。

それが8を数えると、彼女の笑みが深くなった気がした。

まるで死刑を執行するように、恐怖を刻みつけるために、ゆっくりと振り下ろされる腕。

「ちゃんと避けてね。じゃないとすぐ終わっちゃうから」

死の魔力弾が俺へと向けて打ち出された。

左へ飛ぶ。

わずかに遅れて桜色の魔力弾が着弾した。

すぐさま体勢を整えつつ、もう一度。

今度は後ろに飛ぶ。

すると俺がいた場所と、今いる場所に飛んできた。

ある程度の予測を立てて打ち出された魔力弾へ誘導されたようだ。

「せいやあ！」

スキル居合い拳でそれを迎撃するも、拳圧でびくともしない魔力弾が俺へと突き刺さる。

僅かな時間で撃てたのは4発、それではほとんど削れなかったのか衝撃が俺を襲う。

痛みに顔をひきつらせながら、視界を上げればさらに魔力弾が流星のごとく振りかかる。

これを食らうわけにはいかない。

無理な体勢とわかっていても瞬動。続いて足元に魔法陣を生み出し、それを足場に飛び、距離をとる。

しかし俺の必死の回避をあざ笑うように魔力弾は向きを変え俺を追う。

その時みたなのは顔は、まるで虫みたいだね、と語っていた。

「チィ！」

無理な体勢からの瞬動では距離を稼げないから、月歩 足元に魔法陣を出して飛ぶスキル でその分を足したが、そのせいで俺の体は宙にある。

空を飛べない俺が空へ飛んだことがあだとなる。

早く落ちろ、と急かしながら居合い拳を発動し迎撃する。

幸いあれは6発当てれば壊れて霧散する。

正面から来る4発の魔力弾を順に破壊するが、二つ目の時点ではが対応し、魔力弾が不規則な動きに変わった。

一つは弧を描き、もう一つは蛇のように蛇行しながら。

さらに追いかけるようになるのはの背後でまた魔力弾が生み出されていく。

避けることが叶わないと悟った俺は、もう一度月歩で飛びビルの中へと突っ込んだ。

窓が割れる音と共に割れたガラスが俺の体にいくつも傷をつける。

そこはどこかのオフィスだったのだろう。

目についた机の後ろに身を隠すと、俺を追ってきた魔力弾がデスクを吹き飛ばす。

実に30kg近くある大型デスクがくるくると回りながら空中分解していく様は、俺の四肢がはじけ飛ぶ様子を連想させて血の気が引いた。

固まったのは一瞬。

続くようにその隣にあったデスクも飛んだ。

次々となのはが魔力弾を生み出し手当たり次第に破壊し始めたのだ。

それに打たれるのはごめんだ。
こそこそと出ようとす。

しかし、俺の進路方向をふさぐように魔力スフィアがゆらゆらと飛んできた。

……魔力スフィア？ ああ、サーチャーじゃん。

そこまで思考がいくと俺は全力でビルの外へと駆けだした。

一瞬遅れて俺の身長くらいはある極太の光の奔流がコンクリートを薙ぐ。

ビルの壁なんてお構いなしに抜いてきた。

俺がいたあたりを手当たり次第に穴だらけにしていく。

支柱もぶち抜いたのだから。

下の階は上の階を支えきれず上階が落ちてきた。

同時下の階はその重さに耐えきれずつぶれるようにビルが倒壊していく。

すでに下にいた俺に粉塵とコンクリートの塊が迫る。

すぐさま顔をガードしながら他のビルの合間に飛び込む。

僅かに遅れて風と爆風が道を過ぎる。

凶器のように道の飾りを、ガラスを粉々にしていく。

まるでテロでもあったかのような惨状。

だが俺はそんなことを考えるよりも前になのはから遠くへ逃げるように走っていた。

あそこにいたら俺は今頃塵だった。

本気で俺を殺そうとしていた。

その事実が俺の体をむしばむ。

今まで死にそうになった戦いがいくつもあった。

だがこれは違う。
空を飛べない俺にとって一方的な虐殺にしかならない。

ビルの外に出るとなのはに見つからないようにビルとビルの間を隠れながら進む。

すると魔法で音を大きくしたのかなのはの音が響く。

「知ってる？ 昔あるところに一人の女の子がいたんだって」

俺は罫の可能性を考え足を止めず、マルチタスクの一つで話を聞くことにする。

その間も少し遠くでスフィアが動いているのが見えた。

こうして会話で時間を稼ぎながら俺を探しているのだろう。

「その子はね、まだちっちゃかったから、細かいことはできなかったし、運動神経も良くなかった、でも普通に何処にでもいる女の子。その子はね、家族のことがすっごく好きだった」

「……」

「あるときお父さんが仕事を辞めて喫茶店を開くことになってからはあんまり家族の時間が取れなくなった。でも別にそれはいいの。ずっと前からのお母さんの夢だったから。お母さんが働いている姿を見るのが、お父さんと二人でお店を切り盛りしている姿を見るのが好きだった」

「……そうか」

聞こえるはずがないが、相槌を打っておく。

どうしてだろう。なのはの話にひどく引き込まれると同時に、心の

どこかが波打つ。

「でもね、あるときから家族がまったく集まれなくなるんだ。お父さんがずっと海外へ行つて、お兄ちゃんとお姉ちゃんは修行とお店の手伝いばかり。お母さんも一人でお店を切り盛りして、私はずっと一人になった。

毎日お昼は一人で冷たくなったご飯を食べて、夜も遅くに帰つてくるみんなを待つんだけど、眠たくて待てなくて。私がみんなに会えるのは本当に少しの時間だけ。

一人でいるのがさびしくて、辛くて……

もし運動ができたら修行で来たのかな。

もう少し大きければお店を手伝えたのかな。

私は小さいからみんなを手伝えなくて、ずっとさびしかった。

でもみんなに迷惑かけたくなくて……さびしいなんて言わなかった！

私はずっといい子にしてた！

みんなのためにずっと、ずっと待ってたのに！

なんで誰も私なんてみてくれないの！

みんなのことが大好きなのに！」

こころの底からの叫び。

絞り出すようにしてあふれた言葉。

彼女のこころにこびりつくよう残り続けたそれはは初めて人にさらず。

「……」

「しばらくたってお父さんが帰ってきた」

今までと比べてはるかに小さな声。
しかしそれはどの言葉よりもカズトの耳に張り付いた。

「でもまたすぐにどこかにいつちゃった。なんでだろうね。お父さんが帰ってくればまた昔みたいになるって思ってたのに……」

ひどく平坦な声が俺の脳を揺らす。

どこかへいつちゃった。

どこへ？

士郎が家族を置いてどこかへ行くなんて考えられない。

いや、違う。

事故のあとに士郎が何処へ行ったのか俺は知っている

「ねえカズト君、どうだった？ 私がさびしかった時にお父さんを独り占めできた気分は。どうだった？ 御神流の修行は楽しかったでしょ？」

……やっぱりそうか。

やっぱり俺という存在がこの物語を狂わせたのか。

あの日あの時最善だと信じた選択が、この子の選択肢に影響を与えた。

あの日々で俺が得た幸福は、この世界にいたこの子の幸福だった。

「私はさみしかった！ カズト君が楽しんでいるときに私はずっと！」

異物が起こすことはただ乱すだけ。

「やっと戻ってきたの！ 私を見てくれる家族が！ だからもうとらないで！ もう私たちの中に入ってこないで！」

風に乗る声はすでに、涙交じりだ。
ただっこのように叫ぶ彼女の心のうちは俺が黒く塗りつぶしたのだ。
無垢に育つべき子供の心を乱す俺はこれから生きるだけでいい
どれだけの人の幸福を奪うんだろうな

「 もう帰って」

……そうか。俺は邪魔か。
俺が悪い。

そう言われている気がする。
それが無性に 腹が立つ。

コッソ、コッソ。

誰もいないビルの合間、カズトは一人歩く。
なのはは未だ宙にその身を躍らせ、カズトを待つ。
それに答えるように堂々と胸を張って歩いた。

「 ……やっと出てきた。出てこなかったらこのあたり一帯を吹き飛

ばそうと思ってたんだよ。良かったね」

話しかけるがカズトは沈黙。
ただ前へと歩く。

なのははそれをいぶかしみながらも、話を続ける。
なのはにとつて本題はもうカズトが家族の間に割り込まないことなのだから。

「で……？ 約束……してくれるかな？」

背後に多数のシューターを展開。
なのはの背後に輝く星がまたたく。

「……嫌だね。そんな約束できるか……」

「そっか……残念だね……」

走り出す。

なのはの魔法に当たらないように、ジグザグに走るがなのはのシューターも負けじと追いつがる。

カズトは横へ跳ねたあと、前転。突然の想いもよらぬ行動でシューターが通り過ぎる。
すぐさまなのはの方へと駆ける。

「うおおおおおー！」

掛け値なしの全力でなのはのもとへと走る。

「もう、うざったいんだってばー！ー！」

避けられたことでなのはの理性が細くなる。シューターをいったん消して、レイジングハートの前に魔力を集束。

「デイバイン」

『バスター』

桜色の奔流がカズトに迫る。

カズトは横に逃げる。

当たらないと高をくくったがそれは違う。

空気を食らい尽くして、カズトの近くに着弾すると円球状に一気に広がりカズトを飲み込んだ。

衝撃の余波であたりの窓ガラスが割れてきらきらと落ちる。

まるで爆撃されたかのような衝撃が走る。

確かな手ごたえがあった。

なのはの短いながらも濃密な経験が教えていた。

あれは直撃したと。

クロノ達にも褒められるなのはの魔力砲撃を食らって防御力の低いカズトが倒れないわけではない。

なのははカズトの倒れているであろう地点をじっと見る。

「……ばいばい」

「お前がな」

ッ

唐突に背後から聞こえたのは確かにカズトの声。
なのはは咄嗟に身をひねってカズトが振り下ろした刀を交わす。

危なかった。

どうやって自分の元まで知られずに来たのか話からなかったが、なのはは手のひらにシューターを生成してカズトを打ち抜こうとした。

これで終わり。

だがなのはの魔法戦闘のセンスならばこのくらいかわすことは予測済み。

カズトは振り下ろした左腕を引き戻しながら体の右側をなのはへと向ける。

一見、ポケットに手を入れているだけの構えを目に、背筋をつこめく悪寒が走る。

すぐさまなのははバリアジャケットの出力をあげた。

「剛殺居合い拳……！」

なのはですら僅かに光ったとしか見えないほどの速度でそれはなのはへ迫る。

「!?!? キャアアアアア!?!」

衝撃。

かつてフェイトの砲撃を防いだ時ほどではないものの、かなりの衝撃がなのはを襲う。

シューターの準備をしていたせいでプロテクションが張れなかった。バリアジャケットの出力を上げなければ今で落ちていた。

衝撃でなのはの飛行魔法が一端解除され、地面へと落ちていく。すぐさま復帰し地面すれすれで飛行魔法を発動させたのはさすがといえる。

「まだまだあ!?!」

だがカズトはすでに目の前にいる。

月歩ですぐさまなのはのもとへと飛んだのだ。

カズトがなのはに勝てるとしたら、それは一つだけ。地上戦のみ。

それをわかっているからこそ地表すれすれまで落ちたチャンスが逃がしはしない。

それに焦ったなのはは杖に魔力を集め、横殴りに振るった。だが甘い。

月歩で加速されたカズトはすでに足が地面についている。

「あまいんだつつっ!?!?!?!」

空中で整えた構えのまま地面へと降りたことでノータイムで体の向きと体勢を変更。

なのはの懐へと踏み込みながら、さほど早くないなのはの杖をかわして見せた。

そのままカズトは慣性に従い懐へと潜り込むと、なのはの顔面へ裏拳を入れた！

「ツツアア!!」

さらに大地を踏み砕かんばかりに力を入れて瞬動。

加速し、吹き飛ぶなのはを追う。

吹き飛んだ先はビルの壁。

あまりの速度になのはの体がコンクリートの壁にめり込んだ。

「ふうふうふう!!」

カズトはそこへ腰に拳を構え気をためる。

「ジョイヤアアアア!!」

突き出した左腕は見事なのはの腹に命中。

もう一度与えられた衝撃がなのはを襲う。

「ツツ!!」

実際これだけのことをしてもなのはにダメージはない。

堅牢なバリアジャケットがなのはの体を保護してあるからだ。

しかし殴られているという事実が彼女の思考を恐怖で埋める。

「いいか！ 歯あくいしばれえ！！」

身動きのできず壁にめり込んだのはが見たのはカズトが大きく腕を振りかぶり拳がなのはへと迫る瞬間であった。

そうしてなのはへフィニッシュの拳が突き刺さった。

「はあ、はあ、はあ……」

完全に壁にめり込んだのはを前にして、どうにか生き残ったことを悟った。

あのときなのはにやられたように見せかけて、咄嗟に横に回避したのはが自分の魔法に自信があったからこそ生まれた余裕に救われた。

横で魔力が荒れ狂うの横目に俺はビルの壁を走って上に移動。なのはが感傷に浸っている間にビルの上から飛び降りて強襲したわけだ。

それにしても俺のHPの半分を込めた剛殺居合い拳を食らってもダメージがほとんどないとは。

だが俺がやりたいことはそんな考察じゃない。

俺はなのはの目をキッと見据える。

「なに……」

なのはも反抗するような目でこっちを見る。
上等だ。

「いいか！ 俺はてめえの言い分なんか知ったこつちやねえんだよ！」

俺は声を大きくなのはを責めるように言い放つ。

「お父さんがいなくてさびしいの……知るかつ。まだいるだけいいじゃねえか！ 俺なんてとっくに天国にいったつーの！」

そうだ、親がないから悲しい。

そのくらいの悲劇ならそんじょそこらにあふれている出来事の一つでしかない。

確かに悲しいだろう。

俺だって悲しかった。

「悲しいからって俺に嫉妬してんじゃねえ！」

そう嫉妬だろう。

お父さんがなのはよりも俺に目を向けたことへの。

……やっぱり子供だな。

どれだけ大人びても、どれだけ強大な力を持っていても。

こいつは9歳の子供でしかない。

だからこんなことに力を使って解決しようする。

「他人から見たらためえの悩みなんて、へーそう、だから？ で終

わるんだよ！ 俺にあたんな！」

人に当たりたくなる気持ちはわかる。
人間誰だって一度はある衝動だ。
だが、魔力を使って力を使って想いを押し通すのはいただけない。
それは間違っている。

「でもな俺たちは今日から」

赤の他人なら教えたりしない。
だって関係ないから。
でも今の俺は違うんだ。
俺は土郎さんにお世話になってきて、そしてなのはは土郎さんの娘
で、つまり

「 家族なんだよ」

俺たちは今日から家族になるんだ。
きっと土郎さんは俺たちを子供のように思ってるからそう言いだし
てくるはずだ。
昨日は二人でそう笑っていたんだから。

俺は家族が大事だ。
家族は赤の他人なんてものじゃない。
尊いものだ俺は知っている。
だからこそ俺は言おう。
今のなのはは間違っていると。

「だから不満があるなら言え！ 気に食わないことがあるならいつ
てみる！ 家族だから聞いてやる！ 喧嘩になるかもしれないけど、

最後にはきつと笑えるはずだから！」

「家族……?」

なのはは呆然と殴られた頬を抑える。

「おう！ ちょっと早かったけど初めての兄妹げんかだ」

「喧嘩……?」

なぜかそこで泣きだすのは。

ぼろぼろと流れる涙を抑えようとせせず、俺を見上げる。

「わ、私、兄弟でけんかしたこと……うっ、ないよお……」

「そうかい。俺なんてしょっちゅうだけどな。ほら立てよ。まだ終わってないぜ?」

「え……」

これこれ、呆然としなくてもいいだろ。

こんなんでいいのか。
違うだろ。

「それとも今回は俺勝ちでいいのか?」

「だっ駄目!」

するとなのはの瞳にはやる気が見え隠れし始めた。
ぎゅっつとレイジングハートに入る手に力が入る。

「負けないよ」

そう言いながら立ち上がるとなのはのジャケットが修復され、白い服が月明かりを反射する。

それをみてようやく大丈夫だと思えた。

彼女は今までどこかくすんで見えたけど、いまの彼女はともきれいだ。

「知ってるか？ 下は上に勝てないんだよ」

「むゝそんなことないもん！」

「はいはい。じゃあ行くぞ！」

「うん！ 私も全力全開で行くよ！」

リンカーコアをもつミコト達にしか見えない結界を前に、ただ立っていることしかできなくてどれくらい時間がたったのだろう。長い時間を感じられたそれは、時計を確認すれば僅かに20分しかたっていない。

ただ立って待っていたとき。結界のが急速に小さくなっていく。結界の解除特有の反応だ。

「いない……」

しかし結界が解除されるても目の前には二人はいなかった。ミコトは震える体を押さえて、走り出す。

……カズトになにかあったら……

一心不乱に走り回る。

視界を動かしまわり、カズトの姿を探す。

いた！

みれば少し遠い道の突き当たりの公園でカズトが寝っ転がっていた。

「カズトッ！」

対してない体力を振り絞ってミコトは走る。

やっとの思いでたどりつくときカズトのそばにはなのはがいて、楽しそうに笑っていた。

「うっ、ずるい。あの技ずるいよ」

「ふはははは、初見さん殺しのカズトとは俺のことよ。言っただろ？ 下は上に勝てないんだって」

「そうじゃないもん。私だって空に飛べば……」

「そこで飛ばさない俺の戦闘理論の前に破れ去ったわけだ。素直に負けを認めい！」

……なにあれ。

そう思ったミコトは悪くないと思う。

結界に取り込まれる前ののははとても普通の状態ではなかったし、正直にいつて怖かった。

だからカズトが取り込まれたならば、怪我をしているかもしれない。そう思っていたのにこれはなんだ。

まるで河川敷で喧嘩した後に仲良くなった後の二人のようではないか。

「うっ、うっ」

「けっけっけ、うっうっ言っても勝敗は変わらんぞ」

とてもさつき会ったばかりとは言えないほど仲良くなっている。

心配した自分が悪いのか？

「お、姉ちゃん」

「あ、ミコトちゃん」

「ん、おいおい違うだろ。そこはミコトお姉ちゃんだろ」

「そっか。ミコト……お姉ちゃん？」

「……ぐはっ……」

「えっ、どうしたの！ どうしていきなり吐血！？」

……なんという破壊力。

首をナチュラルで傾げながら上目づかいとは……恐るべし天然。
これには勝てないわー、とミコトがどこか遠くを見ながら言う。

「で、これは結局どういう状況？」

そうミコトが尋ねると二人は顔を見合わせて、クスリと笑った後に、
実に仲良くこう言った。

「「内緒！！」」

第十三話 「最近の女子高校生は制服で学校を選択するらしいぞ！」

「ふう」

かすかな熱気と静けさが満ちる板張りの道場のなか、俺は腹を押さえ、うずくまっていた。

なのはと喧嘩をしたあとに三人と一匹で高町家に帰ると俺たちに待ち受けていたのは歓迎会だった。

おいしい料理が振舞われた歓迎会を受けたあと、腹ごなしの運動と称して恭也と士郎による御神流歓迎会が慣行。

三人でのバトルロワイヤルが勃発。

大人二人に混じって子供の俺が奮闘したのだが、体格の差はなんとも越えがたく、結局俺が最初にダウンするという結果に終わった。

恭也と士郎の戦いは決着がつかず、動けない俺をおいて家に戻ってしまった。

初日なんだから少しくらいやさしくしてもいいじゃないか。

とはいえそのバトルロワイヤルで直すべきところが見つかったんだから良しとすべきか。

やはり俺の戦闘経験は魔獣でほとんどが構成されているからか、人間相手だとそうレベルに大差が無いはずの恭也さんに手も足も出なかった。

俺が瞬動をしたときなぜか恭也さんは俺の着地点にいたりとか……やはりこういう読み合いは経験則がものをいうらしい。

もっとすごいのは俺が居合い拳をしたときに、それを士郎さんが初見ですべて避けて見せたときか。

さすがにあれを初見で反応してみるとは思わなかった。

恭也さんだってあれには完全には察知できなかったのに……さすがは

戦闘民族高町の族長、半端じゃねえ。

あと俺の瞬動をみようみまねで再現しないで欲しい。

あそこまで速攻で発動するまでできるようになるのに何回やったと思ってるんだい？

千じゃきかない数使って6mなのにいきなり4mくらい移動しましたよね……なんで魔力を持ってないのにできるんだい？

「ううまだ痛い……」

最後のとき、木刀で恭也に殴打された腹を、痛みよなくなれと念じながら何度もさする。

しかしなかなか痛みが引かない。

もう10分ほど時間が過ぎていのに痛みが引きそうもない。

士郎さんとの模擬戦で痛みが引かなかったことは今まで無かったので、恭也がへたくそだからか。

そうだろうな、そうに違いない、次は覚えてろ。

そういつて次に恭也にどんな攻撃をしてやろうか考えていると、視界の端に、ひよこつと茶色い何かが現れた。

それが見えたのは道場の入り口だった。

入り口から俺の視界に移るように、ひよこつと茶色い……髪の毛かな？ それが見える。

……はは〜ん。なるほど。

なんとなく予想がついた俺はわざとそっちを見ないようにしながら、手元にもってきていたタオルで顔を拭く。

ひよこつ。

また視界の端に映った。

それを気が付かない振りを続けておく。

ひょこっ。

今度は俺の視界に映るように出てくる。

その茶色がかった髪の毛は自己主張をするようにゆれる。

思わずくすくすと笑ってしまいそうな口を俯いて隠しつつ、目をつぶりながら汗を拭いていますとアピール。
すると小さい声で、

うっっ、こっちに気が付いてくれないよお

となさけない声が聞こえた。

すこし涙交じりの声がする。

やりすぎたか？ と思ったが新しい妹の行動が可愛くて意地悪しなくなった俺の思考回路は正常だ。

だがこれ以上は良くないな、と思って、頭を拭いていたタオルをどけて顔を上げひょこひょこ動くところへ顔を向ける。

やっぱりいた。

道場の入り口で壁に隠れながら、頭だけそーっと出してこっちを見ているなのは。

俺が見ていることに気が付くと、にやっとう驚いて頭も扉の向こうに隠してしまう。

だがすぐにまたそーっと顔を出してまた俺と目が合うと引っ込める。少しだけ見えた頬はかるく上気していた。

その反応に俺は面白がりつつ、これ以上やっても話は進まないと判断してなのはを呼んだ。

「……そんなところで隠れてないでこっちきなよ」

また顔をだす。

「えっと、怒んない？」

「なにに俺が怒るんだよ。それとも怒られるような何かした？」

「えっ！ う、ううんっ！ そんなことしてないよ！」

「だろ。そんなところでおっかなびっくりしてないでこっちくればいいのに」

そう俺が言いながら手招きすると、なのはは、にやははと特徴的な笑い声を披露しながら俺のほうへ近づいてくる。

近づいてきたなのはは俺にあわせて板張りの床に座った。

そのあと、はいつと元気な笑顔を見せながらタオルを渡してくる。

……いやこれでどうしろと？

あなたさっきまで俺が自分のタオルで拭いてたのみでたでしょ。

しかしそれを受け取った俺を見上げるなのはの目がやたらときらきらしている。

心の中でため息ひとつ。

それを広げたあとに、いきよいよく顔を拭く。

自分の家の匂いではなく、柑橘系のいい匂いが香ってきた。

どこかなれないその匂いに少しだけ笑いつつ、一通り顔をふいたあとなのはを見ると、なぜかもじもじしていた。

「？ どうした？」

俺はなのはに聞いてみるが、えっと、あの、と要領を得ない言葉を返す。

そこで俺なりになのはがもじもじしている理由を推理してみた。

1

恥ずかしかっている。

いや何にだよ。

人に自分からタオルを渡しておいて使われると恥ずかしいってどんな思考してんだ。

少なくとも俺には理解できん。

2

いいたいことがあるけど、切り出せない。

おおっ、これは俺にも経験あるから分かるぞ！

そうすると話したいことといえば……さっきの模擬戦のことか？

……そうっばいなあ、まだそんなに会話してないけど、歓迎会の時の雰囲気からもやさしいってことはわかる。

自分が間違ってるって分かったらすぐにあやまりそうだもんな。

この年の男の子ならプライドが邪魔してなかなかあやまれないんだけど、やさしいいい子だなあ。

ここは年長者として会話を始めるきっかけを作りますか。

「喧嘩のこと……？」

「あっ、っつゝ」

どこかいいにくそうな顔をしながらなのははいう。

「そのことで私……」

「一応いっておくけど、またごめんなさいとかいうなよ」

「でも!」

そうやって真摯にあやまろうとする姿勢はいいんだけど、もうあの喧嘩で十分な気がする。

たしかに直接ごめんといわれたわけじゃない。

だが、あやまらなきゃいけないわけでもないと思う。

俺はあのあと笑いながら模擬戦できたしそれで十分なんだけど、でもなのはのことだからあやまらないと気がすまなそう。

「わかった! でもそんなに思い込むなよ? なんかあつたら相談してくれ」

「うん……私ね、喧嘩したの初めてで、楽しかったよ。でも最初に私ひどいことをたくさんいった。だから謝りたいの」

なのはが立ち上がって俺の目をみると、それにつられるようにして立ち上がっていた。

「いろいろひどいこといって……ごめんなさい!」

深々と頭を下げる。

それを見て俺は不覚にも感動してしまった。

俺がこの子と同じ年のとき、こんなにも真摯に謝れたか?

何がだめだったのか考えて、俺は本当に心から謝れていたのか?

それもつい先日会ったばかりの人間に頭を下げられていたのか?

答えは否だ。

そんなことができるわけがない。

……いい子だな。

本当にそう思う。

できるならこのまま穢れなく育ててほしい。

いつかこの子が世界へと旅立ち、いろいろな人間と出会い、別れ、そして影響されると分かっているにもこのまま大きくなって欲しいと思うのは俺だけだろうか？

「……おう。これからもよろしく……」

そう返事をする、なのははうん！ と大きな声と満面の笑みで返事をしてくれる。

それになぜか真正面から見られなくて、俺はなのはの頭に手を当ててなでていた。

「このこの！ 子供なんだから子供らしくしとけてー！」

「うにゃっ、髪の毛がぼさぼさになっちゃっよー！」

「しるか。うらららららららあー！」

乗せた手をかき混ぜるように動かす。

そうするときれいにまとまっていたなのはの髪がすぐにぼさぼさになる。

それを止めさせようとする姿は実に子供らしかった。

妹をいじる兄。

どこからどうみても普通の兄弟にしか見えない一幕。
それを二人はこのとき楽しんでいた。

第十三話

「最近の女子高校生は制服で学校を選択するらしいぞ！」

翌日の朝。

「どんどん食べていいのよー」

と言われて出されたのは大の大人でも食べきれなさそうな量のご飯。茶碗に盛られたご飯は美しい曲線を描き、サラダはラーメンどんぶりのような皿にこれでもかと乗せられている。

……これを朝から食べると？
ちよつと冗談きついです。

前世でも運動部の合宿の朝に、先輩から無茶ぶりでもんでもない量のごはんを食わされたが、この人はマジで善意のみでやっているからたちが悪い。
ニコニコとこつちが食べるのを今か今かと見つめられると、こんなに食べれないなんて言えそうにない。

「昨日のご飯はすつごい勢いで食べてたでしょ？ だから今日はたくさん用意してみたの」

とは桃子さんのお言葉。

確かに昨日の歓迎会ではたくさん食った。
でもそれは単純になのはとの全力戦闘のせいで腹が減っていたというだけなのだ。

決していつもあれだけの量を食べているわけではない。
むしろなのと同じくらいで十分な位だ。

俺は姉ちゃんに助けを求めるように念話を送るが、人の善意にはなるべく答えるようにしよう、と助けてくれない。

士郎さんも、カズトならこのくらい余裕余裕さ、ははははは、と笑っている。

なんて無茶ぶりをかけるんだ……

高町家の中では唯一なのはが同情的な目で見てくれるが、手伝わされたら堪らないと、俺と絶対に目線を合わせようとはしない。薄情者めつと心のなかで言いつつも、誰も助けてはくれまいと悟った俺はしぶしぶ箸に手をつけ朝食を食べ始めた。

どうにかしてニコニコの桃子さんがだした料理を食べ終えてソファの上で灰になっていると、なのはが近くに寄ってきた。

「ふえー、すごいねえ。あんな量をたべちゃうなんて」

「うつぶ……さすがに限界だけだな。男の子の意地ってもんよ」

「意地？」

「お世話になって……うつぶ……なってる人にあんな顔してご飯出されたら残すわけにはいかない……だ」

「ふーん、そっか。男の子ってそっいうものなんだ」

「そ、そういうもの」

「でもさっきお母さんが、もっと食べられそうね……とかいってたよ?」

「なに!? さすがにあれ以上は無理だ!」

思わずなのはの言葉に反応して勢いよく体を起こす。するとなのははいたずらが成功した少年のように笑ってこっちを見ていた。

「……なんだよ、冗談かよ」

「にやはは、こっちをみてお話をしないからですっ」

そうかい。

俺がわるーございました。

と年下の少女にからかわれた俺は若干不貞腐れつつも、なのはに「」の後の予定を聞いてみた。

今日は日曜日で喫茶翠屋は営業で、家族はみんなお店にでている。姉ちゃんは翠屋に興味があるようで、桃子さんについていった。

俺は食いすぎで腹が痛い状況で甘ったるい部屋にいけば間違いなく吐く自信があったので、今回は遠慮させてもらった。

今日は一人か……とたそがれていたところになのはがやってきたというわけだ。

「そういえばなんでなのはは翠屋のほうに行かなかったんだ?」

「うーん、今日は昨日の模擬戦の検討をしようってレイジングハ―

トと話してて」

「検討？」

「うん！ ……もしよかったら、カズト君も一緒にしてくれるとうれしいかなあ」

……それは、いいかもしれない。

純粹にこれからののはは戦い続ける人生を歩んでいくのだから、なるべく怪我しないように強くなつてほしい。

なら毎日の努力は必要になる、これからもずっと。

それに俺みたいに変則的なやつ トリッパー とかと出会う可能性もあるのだからここでしっかり教えた方がいいのかもしれない。

「わかった。俺も一緒にやるよ。何処でやる？」

「私が結界張るからそこでやろうよ？」

結界……なんて便利なんだ。

姉ちゃんがイギリスで魔法の熟練度あげるときは周りから隠れないといけなくて大変だったのに。

二人で道場に移動しながら、なのはの方に目をむける。

うれしそうに鼻歌を歌いながら歩いている。

やはり原作のように魔法が大好きなのか。

しかしこのままだと原作の撃墜フラグが立つのでは？

そのへんも姉ちゃんと要相談だな、と頭のなかに書き留めておく。

そうしていると高町家が所有する道場にたどりつく。

しかし知ってはいたが、個人で道場持っているってすごいな。前世ではそんな知り合いが一人もいなかったからそう思う。道場立てるのだって結構お金がかかるはずなんだから、この土地は昔から高町家が持っている土地なのかなあと適当な思考をする。俺とは対照的になのははいたって真面目な顔でレイジングハートを起動すると、封鎖結界を発動させる。

魔法が発見されていない世界で魔法を使う時に、周りを巻き込まないために使用を義務付けられている結界なのでなのはも使えるようになっていようだ。結界が発動すると薄い膜のようなものがなのはを中心に加速度的に広がり、道場を包んだ。

「ふう、一応家の周りは結界で包んだからこれで大丈夫だよ」

「はあく、何度見てもこの位相をずらして作る結界って奴はすごいな」

「えへへ、そう、かな？」

「おお。俺なんて魔法はほとんど使えないからな。余計にうらやましいよ」

俺が魔法を使えないことを白状するとなのはが驚いた顔を作る。それもそうか。結構派手に動き回ってたしな。

「え？ 魔法が使えない？ でも私と戦った時は身体強化魔法使ってたよね？」

「まあな。でもそれだけだぞ？」

肉体強化の魔法だけなんて魔導師、実は結構いそうな気もするが。しかし俺の思ってた以上になのはは驚いた。

「うつそ〜〜〜！！！ だつてだつてすごく速く動いたりしてたもん！ さすがに私も騙されないよ！」

「いやいや本当。魔法なんてほとんど使えないよ？」

「じゃあ最後に撃ってきたのは！？ あれ魔力弾だよな？」

「あれは居合い拳」

「でも魔法でしょ？」

「ちゃう。男の子なら一度はあこがれた技。魔法なんかといっしょにすな！」

居合い拳と魔力弾と一緒に考えるのはに天誅と称したチョップを頭に落とす。

ゴンといい音とともになのはの頭の上にひよこがピヨピヨ。

「うにゃ！？ たたくことないよね、今の！？」

「ノリで叩いた。反省はしてない」

するとなのははむくと頬を膨らませた後、あさつての方向を向いてしまっ。

「なのは？」

「……………」

俺の呼びかけにも答えずに明後日の方向を向きっぱだ。

どうやら私は拗ねているアピールみたいだ。

俺はそれに思わず笑ってしまう。

…………… なんとというか、この前までなのはは天才でジュエルシードにも対抗できるようなとんでもない人間兵器みたいなイメージがあったけど、こうして実際に話してみると、本当にただの9歳の女の子なんだな。

そうしみじみ実感してしまう。

…………… そしてこれがいつか魔王へ……………
願わくば家族特権で対象とならないことを祈るばかりだ。

少しなのはを見て楽しんでいたが、せっかく検討をしようとしているのにこのままではいけないだろ。
そうして俺は少しばかりなのはのご機嫌取りにはしって、一時間後にようやく検討に入れたのだった。

検討も終わり個人練習も終わると私たちは二人リビングで待ったりとお茶を取っていた。

渋めになっていている狭山茶を美味しそうにずーとカズト君は飲む。

その姿はまるでおじいちゃん。

一口つけたあとに、目を細めて力の抜けた顔でふはあくという姿はおじいちゃん以外の何者にも見えない。

カズト君は訓練のときとはまったく違うどこか枯れた雰囲気。

あまりにも外見とはかけ離れたその雰囲気に思わず笑ってしまう。

「んだよ」

「別に。おじいちゃんみたいだなあって」

「よく言われる。でもいいだろ？ こういう雰囲気は好きなんだから」

「こういう雰囲気……」

確かにこういうことやること無く家族と落ち着いて過ごすのは好きかもしれない。

ううん。

好き。

そうはつきりいえる。

私も少しだけカズト君が入れてくれたお茶に口をつける。

「……苦い」

「まだなのには早かったかもな」

どこか苦笑交じりにそういわれる。

それでも私はこの苦いお茶を残すつもりにはなれなくて少しずつだ
けど飲んでいく。

体の中に入ってくるお茶の熱さが疲れた体に心地いい。

「ふう、こういうのを幸せっていう……のかな」

この雰囲気心地良くて、自分が満たされたような今がうれしくて、
いつの間にかカズト君にそう聞いていた。

「そうだなあ。平穏で、やりたいことができ、みんな仲良くて、
楽しくて。確かに満たされてはいる。でも……」

「でも？」

「……いいや、なんでもない」

何かを飲み込んだその言葉が引っかかる。

でもカズト君も認めてくれた今の幸せがうれしい。

ぽかぽかになった体と一緒に心もあつたかい。

そう思えた。

少しの間だけ静かになる。

でもそれは辛くない。

むしろこのままのほうがいいような気さえしてくる雰囲気だ。

私はそれを自分から壊したくなくて黙っている。

でも、少しすると空腹感を覚えた。

そこでひらめいた。

……料理、作ってあげよう。

せつかく家族になったカズト君にほめてもらいたくなった。きつと上手にできればほめてくれる。

そんな未来がすぐに予想できて、すこし上機嫌になる。

だからカズト君にお腹が減っているか聞いてみた。

「ね、カズト君。お腹……すいてない？」

「ん？ そうだな少しすいてるかな」

普通ならすぐくすいていると思うの。

もうすぐお昼の時間だし、それになのはと違って体全体をせわしく動かすカズト君はすごく運動量が多いからお腹はすいているはずだ。

私の読みどおりの展開になりそうだから、うれしくなる。

「私作るよ、何がいい？」

「いや俺がやるよ。お兄ちゃんに任せなさい！」

「だめ！ 私が作るの！ カズト君の料理より私の方がきつと美味しいもん！ だから座って、待ってて！」

手伝おうとするカズト君を無理やり座らせて、私はキッチンのほうへ歩き出す。

私は自慢ではないが同世代の子供に比べて料理ができるほうだと思

う。

今までお母さんがお仕事でいないときはおにいちゃんと一緒に料理を作ったりして食べていたのだ。

だから料理の腕にはそこその自身がある。

お母さんも上手とほめてくれた。

私は手を洗うとすぐに腕まくりをして、料理を始める。

カズト君は私の動きにいちいちはらはらしながら見守ってきて、ちよっとお兄ちゃんみたいで……うっとうしい？

集中力が散るような気がしたから、料理を楽しみにしてテーブルで待っててというとしぶしぶうなずきながら、席に座る。

それを見届けたあと、私は本格的に料理をすることに集中し始めた。

でもこうしてカズト君のために料理を作っていると思うと不思議な気分だ。

つい二日前まではカズト君がいなくなればいい。

そう思っていたくらいなのに。

私はカズト君が憎くてたまらなかった。

お父さんはカズト君のためにずっといなかったし、家族も忙しかった。

その原因のカズト君がずっと嫌いだった。

帰ってくるたびにお父さんから聞かされる話を聞きながら私はいなくなればいいとずっと思っていた。

その心のそこには、家族である自分を差し置いて可愛がられるカズト君に対する嫉妬があったんだと思う。

自分ではなくて、赤の他人の話で盛り上がる家族を見るのがいやだった。

血が繋がってないのに、私よりも大切にされているような気がして、たしかに今でもそうなるんじゃないかって恐怖はある。でもそんなのはもう怖くない。

あの時、カズト君と喧嘩をして、醜い自分を全部吐き出して、すぐくすつきりした。

だからもう怖くない。

きつとまた溜まってしまってもカズト君と喧嘩すればいい。カズト君ならなんでも話せるような気がする。

私がさらけ出した醜い心もカズト君は受け止めて、それで怒る。嫌いになるんじゃないくて、家族だから真っ向から受け止める。

今までそんなことはしたことが無かった。

だからそれをできるといふことが　　うれしい。

「えへへ」

料理の途中なのに私の頬が緩む。

まだ会ってから少ししかたっていないというのに、カズト君がすこく近く感じられる。

信じられる。

こんな心の変化は自分でも信じられない。

でも確かに変わったのだ。

きつと今の私と二日前の私を比べたらなにもかもが違う。

私にとって今は幸せだ。

魔法を使うことで楽しいと思うことと、違う何かがここにはあった。さっとフライパンを振ってチャーハンから水気を飛ばして完成させる。

私はさっと作ったチャーハンをお皿の上に乗せようとしたが、食器棚から出すのを忘れていた。しまった。

そう思って後ろの食器棚に手を伸ばそうとしたら、

「はいよ。これだろ？」

横から食器が出てくる。

それは確かにいつも使っている食器だった。

「あ、ありがとう……」

冷めないうちにと、お皿の上にチャーハンを盛り付けて、備え付けのサラダを用意する。

スプーンとお箸も用意しなくちゃと、思ったらこれも、

「もう持っていていたよ」

目を向ければリビングのテーブルの上にはすでに料理以外のすべての用意が。

いつもなら手伝ってくれてありがとうと言いたいのだが、今日はなんとなく全部自分でやりたかったのにも思ってしまう。

「むっ待っててっていったのに」

「な、なんだよ。ちゃんと手伝っただろ？」

「……はあ、きつとカズト君は乙女心が分からないんだね。そんなんじゃないよお嫁さんもらえないよ？」

「なんで九歳児にそんなこと心配されなきゃいけないんだよ……」

むっとした顔に変えるカズト君。

ちよつと可愛いかもしれない。

私はまた新しく見つけたカズト君の表情にくすくすと笑いながら、テーブルの方へ誘導する。

今日のお昼はチャーハンとキャベツのサラダ。

それに漬物とお吸い物。

和食とはいえないけど、それなりの出来だ。

特に力を入れたチャーハンはちゃんとぱさぱさしているし、味もちょうどいいはずだ。

あとはカズト君の口に合えばいいんだけど……あうかな？

「いただきます」

二人であわせていただきます。

私は緊張しながらもカズト君がチャーハンを食べるのを待つ。

まるで告白の返事を待つようにカズト君の口にチャーハンが吸い込まれるのを見る。

ぱくっ。

やたらと耳に聞こえるその音は私の鼓動を早くする。

……どうかな。おいしいかな。

待っている間はすごく長く感じた。

きつと実際は十秒もないのに、カズト君がもぐもぐと上下に動かす様子がスローで見える。

口の中を空にするとカズト君はこっちを見て笑う。

「そんなに見られると照れる」

ずっこけそうになった。

はあ。

本当に分かってない。

普通一言目は料理に対する感想だと思うの。

そうしようと思っではいなかったが、いつの間にかジト目になってカズト君を見つめていた。

「ごめんごめん。そんなに起こるなよ。しかし意外に」

おいしかった。

わずかにはにかみながらそういった。

ちよつと……やばいかも。

なぜか涙腺が緩んでいく。

今まで家族にたくさん言われてきたことなのに、カズト君がいっただけで涙が出そうになる。

「うん……うん！ たくさんあるからいっぱい食べて！」

震えそうになる言葉を隠すように大声で薦める。

うれしくて幸せな時間なのに心配されることで雰囲気壊されたく
なかったから。

涙が出そうになる顔を隠すように俯きたくなる。

でもカズト君がうまいと笑顔で言うからそれを見たくて俯けない。

お腹がすいていたのだろう。

ガツガツと食べるカズト君の姿にまた胸の奥が熱くなる。

私は今までにない感情をかみ締めながら、零れ落ちそうになる涙を
こらえて、その昼を過ごしたのだった。

「ところで二人とも。話があるんだが？」

なのはとの昼食のあとにも二人で魔法の訓練をしたあと、日も暮れ
ると全員が家に帰ってきた。

すぐになのはとミコトが料理を作り、家族全員で夕食をとる。

いたって普通の場面であり、これからも続いていくであろう光景だ

った。

そしてそれもそろそろ終わるかといったころ、士郎はカズトとミコトに話を切り出した。

「はい？ なにかあったんですか？」

カズトが問う。

自分としては特になにかを言われる覚えが無かったからだ。いたって真剣なその様子に、知らず背筋が伸びる。

「うん。実はな……二人とも学校に通う気はないかい？」

「無いです」

「無いわね」

「即断だね……」

いかにも当たり前前だろうといった表情で二人はいう。

二人の横ではなのはが、えく行かないの？ と残念そうな声を出している。

が、二人には取り付く暇もなく、黙々と寄るご飯を食べ続ける。しかし士郎にも引けないわけがあった。

「いやしかしだね。通ってもらわないと困るんだ……」

「困る……?」

士郎がいった困るという意味が理解出来なかったのだろう。二人は首をかしげる。

士郎が困るような状況というのはあるのだろうか?

二人が大学生と同じ程度の学力を持っていることは承知のはずだ。なのに学校に行けという。

二人は顔を見合わせて考えるが、何も思いつかない。

「困るってなにをですか?」

いつまでも考えるのが性にあわないミコトから疑問が飛び出る。

「実はだね。日本では教育を受けさせる権利というのがあってだね……」

「ああ、そういうこと」

士郎は日本の法律について詳しくないだろう二人に説明をしようとしたが、元日本人の二人にはそれだけで分かった。

つまり二人が学校に行かないことで、教育を受けさせていないと思われたくないということだろう。

特に翠屋という自営業である以上、変な噂は避けなくてはいけない。たとえばミコトが本来学校に行く時間に働いていたでしょう。

そうになると、学校に行かずお店の手伝いをさせていると思われるはずだ。

だとすると、あそこのお店は息子に教育を満足に受けさせてないのよなんて噂されかねない。

そうなればまともな営業はできない。

いくら二人が外国でしつかりと教育を受けて義務教育の範囲で飛び級していたとしてもだ。

外見は完全に日本人にしか見えない二人は、そういわれても嘘としか思えないのだ。

たしかにそういわれればまずい。

よくよく考えればその辺を歩いていると職質されかねん。気が付いてよかったとミコトは息を吐いた。

対照的にカズトの顔は引きつっている。

「カズト？ どうしたの？」

「……俺は、通わないからな」

通わない。

いささか強い意志が見え隠れしていた。

「どうしてかわけを教えてくださいでもいいかな？」

士郎にも引けないわけがある。

お店のためにも引けないのだ。

……まあそれは建前で、本当はほとんど学校に通ったことのない二人を行かせたいという思いがあるだけなのだが。

士郎は知らず、カズトを見る目が強くなる。通ってもらっぞ。

そう目が語っていた。

それに対してカズトにも訳がある。

大恩ある士郎が相手だとしても引けぬ理由が。カズトも瞳に力を込めて対抗する。

「俺はあの学校に行きたくない。」

士郎とカズトの視線がぶつかり火花を散らす。

周りはどうなるかはらはらしながらも、見守ることにしたようで、黙ってカズトの答えを待つ。

「ふむ、理由は？」

「それは 制服が半ズボンだからだ」

「……ふむ、理由は？」

どうやら士郎は聞かなかったことにしたようだ。周りももう一度息を張り詰める。

「半ズボンだか「ふむ、理由は？」……さっきから言ってるじゃないか」

明らかに遮られる言葉に不機嫌そうに言葉を返す。

だが、もっと不機嫌なのは士郎だ。

青筋を立てて、カズトをにらみつけている。

というよりも頬がびくびくしている。

まるで噴火前の火山のようだ。

「つまりカズトは制服が気に入らないから学校に行かないと？」

「ああ。そうだ」

その答えを聞かや、士郎がとうとうキレた。

「ふざけるな！ そんな理由で学校に行きたくないだと！ お前は子供か！？」

対するカズトも負けていない。

カズトは合計した精神年齢はすでに30以上ある。

だが実際の精神年齢としては18程度のいたって普通の青年位ではない。

このころの年齢特有の半ズボンをはきたくないという気持ちを分かってくれるだろうか？

運動をするときならいい。

だが制服で半ズボンとはいかに。

カズトとしてはそんなもの着れるかつと声を大にして叫びたいのだ。というより叫んだ。

「俺は12だ！ 普通に子供で通るだろ！ そもそも制服で半ズボンってドンだけだよ。俺の家の近くの幼稚園児の制服みてーなデザインの服装なんて着れるか！」

しかしむしろこの場合少数意見なのはカズトだ。

カズトは知らないかもしれないが、小学校の制服では夏に半ズボンになるところは意外とある。

しかし青年近い精神年齢のカズトはどうしても制服は長ズボンの意識があつて、受け入れがたい。

つまりそれを着るのが恥ずかしいのだ。

おそらくもう少し精神年齢が上がればそのくらいどうってことないのだろう。

しかし現実にはカズトの今の精神的には半ズボンは恥ずかしいとい

うイメージがある。

いわば今回のことはカズトの精神年齢が低いことが原因でできた悲しい出来事なのだ。

しかしそれを把握できたのはミコトだけで、しかし転生者なんていえないことにはこれを修正し矛を収めるために積極的に動くことができない。

桃子は今回のことをどうみているのか分からないが、傍観に徹し、それをみた残りの家族もそれに倣う。

なのはただはどうか口を出そうとするが、にらみ合う二人にどう声をかけようか分からないらしく、あわあわいつているだけで助けにはならない。

「そのくらい我慢して学校へいけばいいだろう！」

「いや！ 制服は重要なファクターだ！ 知ってるか？ 最近の子高校生は制服で学校を選択するらしいぞ！」

「お前は小学生の男子だろうが！」

みるみるヒートアップする口論。

いつの間にか額を付き合わせんほどに近い。

カズトと土郎はにらみ合いながらもお互いに声を張り上げる。

「……………」

「……………」

そのうちこのままでは埒があかないと思ったのだろう。

二人して黙っていた。

「……意見を変えるつもりは？」

「ない」

「……俺もない」

「そうか……ならやることはひとつだろ」

「そうだな……負けたほうが意見を曲げる。いいな」

負けたほうが意見を変える。

二人とも武道をたしなむからこそその解決方法。

お互いに戦って、敗者は勝者に従う。

古来よりの決め事だ。

「上等だ。今日こそ勝ってやる」

いつもであれば回避するはずの士郎との戦闘。

しかし頭に血が上ったカズトは獰猛な笑みとともに挑発を受け取った。

「五分後に道場へ」

士郎はそういうと道場の方へ消えていった。

カズトもすぐに道場の方へ足を向ける。

やるのならば、すぐに体を伸ばして筋を伸ばさなければいけない。

ほかの家族に背を向けて去っていく二人。

それを残りの家族は、

「男の子よねえ」

「そうだねえ、なんていうかカズトって意外と恥ずかしがりやだったんだね」

「カズトのやつ、父さんに勝てると思っているのか？」

「はあ、ごめんなさい。まさか次の日に喧嘩するなんて……」

「あらいいのよ。こういうのも男の子が家にいるならあってもおかしくないもの。むしろ今まで無かったことだから私ちよっと楽しんでるわ」

と、おおむね楽しんでるようだ。

昨日喧嘩したばかりのなのは、えっえっ、それでいいの！？と頭を抱えているけれど。

そのまま残りのご飯をみんな食べていると、ズゴンツと大きな音が響く。

「おお、父さんが大技でも使ってカズトが吹き飛ばされたか？」

恭也が面白そうだと顔を輝かせる。

そこからマナーに反しない程度に急いでご飯を食べると道場の方へ行ってしまう。

美由紀も、じゃあ私も！と行ってしまった。

桃子はあらあらと泰然自若に構えお皿を片付け始める。

なのは家族の意外な一面に半ば呆然としている。

これでいいの！？ と顔に書いてあるのが手に取るように分かる。そのうちまた道場の方で衝撃音が響き、続いておおくと歓声が。それをきっかけになのは再起動をはたし、急いで道場へ走るのだった。

いきなり始まった高町家での生活。

いずれこれが日常となるのは、そう遠くないことなのだ。

第十四話 「いいもん！ もつとすいいの見せてあげるから！」

まだまだ日も顔を出したばかりのころ。

キンキンとわめく機械に安眠から誰もがたたき起されるころ、海鳴と呼ばれる町にある高町家の厨房では一人の少年がどこか音程のおかしい鼻歌を口ずさみながら作業をしていた。

「~~~~~」

少年の目の前にはいくつもの料理器具が並び、それを自在に使って見せる。

どうやら少年は料理をしているらしい。

鼻歌交じりに動く彼の動作に淀みはなく、目の前にあるお味噌汁を煮え立たないように注意をしながら、並行して鮭を焼く動作に何の違和感もない。

さらに彼はお皿に盛りつけ、お茶碗にごはんをよそりテーブルに並べていく。

実に手慣れている。

「んっ、こんなもんかな」

少年が作業が終わると額をぬぐって見せる。

あとはお箸を用意してみんなが入ってくるのを待つだけとなったころ、測ったようにすぐさまリビングのドアが開いた。

「あらあら……」

「今日もすごいなあ」

入ってきたのはこの家の主土郎とその妻桃子であった。

二人は彼がこの家に来てから毎日のように用意される料理を見ては驚く。

そろそろ一週間になるというのに、未だに彼らはこの状況が慣れないらしい。

それもそのはず。見た目12歳にしか見えない少年が朝早くに起きて普通の一般家庭並みの朝ごはんを用意してくれるなんて思っていなかったし、できるとは思っていなかったからだ。

「今日もありがとう。カズト君」

桃子は少年 ウチタ 内田 カスト 和人にいつものようにお礼を言いつつ頭を撫

でた。

少しきりつとしていた顔がふにゃつとなる。

桃子的にはこの瞬間のカズトが気に入っていた。

今日ももう少し堪能しようと撫でるが、玄関の方から足音がした。

家の裏手にある道場から恭也と美由紀の二人が帰ってきたのだろう。

カズトはその音に反応してすつと桃子の腕の範囲から逃げ出した。

「ただいま」

「ただいま、うわあ、今日は和風だね」

靴を脱いだ二人がリビングに入ってくるとすぐにテーブルの上を見る。

毎日常に運動をする二人には朝ごはんは重要な時間であり、おいし

いものであるなら歓迎だ。
さらに毎日のように和洋中と変わる朝食が楽しみなのだ。

二人はすぐに席に着く。

美由紀はおなががすいているのか早く食べたそうにしている。
しかし未だに全員そろっておらず食べ始めるわけにもいかない。

「あれ、なのはは？」

美由紀がいう。

それも当然。いつもであれば家族にとってかわいい末の娘はいつもならばちゃんと朝起きてこの時間にはリビングで座っているはずだった。

しかしそれが無いということは

「またミコトだろう」

どこかため息交じりに恭也がいった。

「ああ、そっか。ミコトちゃん朝弱いもんね」

美由紀は、それならば、と納得していた。同時にこの後もう少し待たなくてはいけないことも。

「普通、子供内は早起きだと思っただけどね？」

「これも一種の個性ともいえる」

「まあ個性と言えばそうかもしれん」

姉弟に対する評価にミコトの双子の弟であるカズトは恥ずかしそうに頬をかいた。

「あゝうちの姉がすいません……」

知らず謝ってしまうくらいにはカズトは申し訳なかった。

「あら、いいのよ。こうしてカズト君には朝ごはんを作ってもらえるし、それにミコトちゃんもいい子だから、ね？」

桃子は何でもないようにそう言った。

カズトはこういう時に桃子の器の広さを思い知るのであった。

「そう言えばカズト、今日の夜はどうする？」

「あ、もちろん今日はやりませす」

そのあと二人を除いて鍛錬の内容だとかの話に花を開いていると、上の階からドタドタと音が聞こえてきた。

「も〜ミコトちゃんが早く起きないから!」

「ごめんっ! 今度からはちゃんと起きるから!」

階段を降りながら会話をしているようで声が聞こえる。

「そう言っただけで起きてくれたことないよね」

声だけだというのに責めていることが分かる声色が聞こえた。その答えが返ってくる前にリビングのドアが開く。

「私も悪いとは思ってるんだけどね……？ あ、みんなおはよー」

最初に入ってきたのは短めの黒髪をした少女。

整った顔立ちをした彼女は、カズトの双子の姉

ウチタ
内田 美琴。

その愛くるしい瞳を家族へと向けて挨拶をかける。

「みんな、おはよう」

続くように声を出したのは今年で9歳になる高町家の秘蔵っ子なのは。

サイドでまとめた髪が歩くたびにひょこひょここと跳ねている。

起きていた大人組もそれをほほえましく見ながら声を返した。

ミコトはそのまますぐにいつもの自分の席へとつくが、用意された料理を見て頬を引きつらせた。

「うわ、今日は和食う……」

今年で12になるミコトは未だに野菜が苦手でどうにも野菜の比率が大きくなる和食が苦手だった。

「姉ちゃんが大好きな菊の花のお浸しもあるぞ」

朝から嫌そうな顔をするミコトだが、追い打ちをかけるようにカズトから小皿が渡される。

お皿には小山になった黄色いお浸しが。

人によってはこの独特の苦みがいいというが、子供の舌には厳しいものがある。

何でも子どもの味覚は苦いものを毒と判断し体が受け付けようとならないのだとか。

ミコトはそれが顕著なようで、家族の中で一番多い量のそれを見て青くなった。

「まあまあ、子供のうちに苦手なものもなくしておかないとね？」

訳知り顔でカズトがいう。

ミコトが裏切り者めつと睨むが、何のその。柳のように視線を受け流す。

「さあ、食べようか」

小さな攻防を机の下で起こしかけたミコトだが士郎の一言でとりあえず手を合わせた。

それに倣うように家族みんな手を合わせる。

日本の家族がご飯を食べるときに行う当たり前のことだが、それを誰もがおろそかにせず今日の食事へと感謝をささげる。

実際にはそんなことを考えてはいないが、それでも彼らはそれをした。

「「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」

全員が食事を食べ終わったころ。

カズトは一人食卓から立ちあがると冷蔵庫から何かを取り出した。

「じゃ〜ん！ 今日デザート付きだ！」

ほんとっ？、そう言いつつ目を輝かせたのは美由紀だ。

味の薄めの和食だったからか、それとも花の女子高生だからか、彼女はお菓子にめっぼう弱い。

もちろんカロリーなんかを気にするのが普通なのだろうが、この本物の武道家がそんなことを考える必要は全くなかった。

本当にうれしそうな美由紀に苦笑しつつ、照れたように顔を赤くして手に持っていたものを食卓に出した。

四つほど作られたそれは色とりどりの練り切りだった。

かわいらしいウサギをモチーフにしたもので、小学生が作ったとはとても思えない。

が、それを見ると桃子はいつものおっとりとした目はなりを潜め、厳しい目つきになった。

最初にウサギに手をつけると感触を確かめ、口に運ぶ。

「……………どう、ですか？」

カズトは緊張感を持って桃子が口を開くのを待った。毎日のようにあるこの桃子によるチェック。

今まで一度たりとも合格をもらったことはない。

例え家族であろうとも桃子はお菓子作りの時だけは絶対に妥協しない。

彼女はプロなのだ。

だからこそ今日もカズトのお菓子を正確に判定する。

「……駄目ね。これはもう少し水分を飛ばした方がいいわ。このままだとベタベタしちゃう。それに味の方も餡子との絡みが少ないわ。これじゃおいしく感じてもらうには思えないわ」

カズトは手に持っていたメモに桃子が言っていたことをどんどんメモしていく。

基本的な作り方は教わると、そこから先は自分で改良していくというスパルタな教育方法。

だが自分の成果をしっかりと確認してくれる桃子はカズトにとっていい先生だった。

いつか文句の出ないものを作ってやろうと意気込みも出る。

「ありがとうございます！」

毎週のようにする恒例行事だが、おおむね他の家族にはおいしいと言ってもらえる。

ここに来たばかりの最初はとんでもないことを言われたが、最近はおいしいものがどんどん出てくるから文句はないのだろう。

「でも練りきりなんてよく作れたわね？ あんまり時間もなかったでしょうに」

「朝早く起きて作ってましたから。まあ早起きしすぎて時間があまつちやっただんですけど……」

「それで今日はこんなに朝ごはんも豪華だったのね。ありがとう。毎朝ご飯を作ってくれて」

朝にもしたがもう一度お礼を言った。

お店が忙しくてあまり睡眠時間も取れない桃子にとって朝ご飯の調理の時間を睡眠に充てられるだけで、かなり助かっていたからだ。

「あつ、お母さん時間時間!!」

と、桃子がカズトへお礼を言ってまったりとしていると、時計を見たのはが騒ぎ出した。

「あら大変! 準備しなくちゃ!」

桃子も時計を見るとあわてて動き出す。時計はすでに7時30分を示していた。本当ならばそろそろ学校へ行く準備が終わってなくてはいけない。

「もう! カズト君がお菓子を出すから!」

「いやいや、早く起きてこなかった姉ちゃんが一番悪いはずだろ!」

突然振られた矛先をカズトはミコトへと逸らす。しかしすでに席にはミコトはいない。

「おう、逃げたか」

「早くカズト君も準備して！」

なのはが急かすようにいう。
すでに時間は無いのだ。

なのはも怒っていたがまだ歯磨きとかが残っている。
急いで準備しないとバスに乗り遅れてしまう。

「いや、別に俺はいいだろ。まだ学校の申請も終わってないし」

なのはたちが通う学校は制服の着用が義務つけられている。

ランドセルを背負って制服で登校をするため、こっちに來たばかり
のカズト達には制服がないのだ。

さらに言えば、まだ転入手続きすら終わっていないはずだ。

「えっ、そうなの!？」

そのことを聞いていなかったのか、なのはが驚き母に確認をとる。

桃子は店へと出る準備をしていたがなのはの大声を聞くと、首を横
に振った。

しかしその後、にやりと意味ありげに笑って見せた。

最近は何年相応にどうしても見えない桃子の笑みはなかなかに迫力がある。

「ほら、やっぱり私たちといっしょだよ！」

なのははそんな桃子には気がつかずすぐにカズトへと向き直った。

「えっ、いやそんなことないだろ。そんな2、3日で入学手続きができるわけないし……」

カズトもすぐに反論したが尻つばみに声が消えていった。

「……………姉ちゃん？」

まさかと思い姉を呼ぶ。

ミコトはすぐ後ろからよきつと出てカズトの肩へと右手を置いた。

「まさか逃げられるとでも？」

といいつつカズトが振り向くのを確認すると後ろに回していた左手を前へと突き出した。

「さあ！ 着なさい！」

グツと力強く突き出された左手に持っていたのは 半ズボン。

至って普通の半ズボン。なのはたちが通うことになっている学校の制服である半ズボンだ。

それをみたカズトの顔がゆがむ。まるで死地に赴く兵隊のようだ。

「さあ！ さあ！」

とつとつ目の前に迫った制服。

普通の小学生であれば簡単に二つ返事で着てもかまわなかったものだが…………今のカズトにはどうしてもそれを穿きたくない理由があった…………！

つまりそれは

第十四話 「いいもん！ もっとすごいを見せてあげるから！」

突然だが内田兄弟は転生者である。

いや憑依者といったほうがいいのかもしれない。どちらにしても世界を渡ったのだからトリッパーである、そうカズトは考えていた。彼らが世界を渡ってからすでに五年の月日が流れた。前の世界では18を数えていたが、こちらに来てからは7まで戻ってしまっていた。

つまり今のカズトは体は子供、頭脳は大人を地でいく少年なのだ。

そのカズトは今、スクールバスのバス停で何処となく落ち着きのない様子だった。

彼の立ち姿におかしいところはない。強いてあげるのならば半ズボ

ンが気になっているように見えるくらい。
そんな彼が今思っていることとは……

「……恥ずい」

これにつきた。

カズトは精神年齢的には18だが……覚えはないだろうか。
無性に半ズボンをはいているということが恥ずかしかった時期が。
なぜかはくズボンは必ず長ズボンでなくてはいけない時期がなかつただろうか。

おそらく男ならば必ず一度はあるだろうこの感覚。

もう少し経てばこれもファッションの一つと割り切ってはけるようになるだろうが、今のカズトはまだその域に達してはいなかった。

「カズト、よく似合ってるんじゃない？」

そんな複雑な男心を把握しているであろうミコトは完全にカズトをいじるき満々だ。

味方をする気はなく、カズトが恥ずかしかっているのを見て笑っているだけだ。すでに家であれだけ笑ったというのに。

「……………」

カズトはそんなミコトをジト目で見るもそれでは子供が拗ねているようにしか見えず、余計にミコトのつぼにはまった。

必死におなかを押さえて笑うのを我慢するミコトはいっそすがすがしいほど楽しそうだ。

「えっ？ えっ？」

一方バス停まで一緒にいたなのはミコトが笑いだした理由が分からず首をかしげるだけだ。

一人だけ話に混ざれないのが嫌なのか、話の中心と思われるカズトを観察してくる。その目が余計にカズトを恥ずかしがらせた。

そしてミコトは未だに笑っている。というよりもバスが来るまでずっと笑っていた。

カズト達が高町家にお世話になってから早一週間。彼らの来訪を節目にカズト達は学校に通うことになっていた。

お約束のように二人で教室に入るとなかなか顔立ちの整っているミコトの方はすぐにクラスの人気者になった。正直なところ大人が子供の世界に混ざるのはどちらにとっても苦痛にしかならないが、ミコトは旨く折り合いをつけて女王として君臨していた。

なんのひねりもないとは言えないが、そんなそこそこの日常にさしたる興味も持たずカズトは放課後家に帰ると、修業相手の恭也が帰ってくるまでずっとぼーっと窓の外を見ていた。

流れる雲が次々と姿を変えていくその様は自由のようであり、その実ただ流されていく弱い生き物のように見えた。しかし周りに合わせて流れるだけの雲はきつと何も考えなくていいんだろっなどと考え

ると不思議と雲のようになりたいと思ってしまった。
そうやって外をずっと見つめていると後ろから目を隠される。

「……………姉ちゃん……………」

はあ、と後ろにも聞こえるくらいの溜息と共にカズトは言葉を吐き出した。

「もうわかっちゃった？」

ずっと外された目隠し。

カズトはその目を隠した手を追う。すると笑顔のミコトが目に入る。何がそんなに楽しかったのか。カズトはこの二度目という状況にうんざりしているというのに、この姉は楽しんでる。それをうらやましく思いながらもカズトは顔に出さないようにした。

「そりゃな。一週間でそんななれなれしいことをやってくる奴は小学生にもいやしないよ」

それはそうね、とミコトがいう。がそんなことは始めからどうでもよかったようだ。

ミコトはカズトと話しているという状況を楽しんでいた。何にでも楽しみを見つけて人生を楽しく生きているミコトにも、心休まる瞬間が必要で、それはカズトという家族のそばに居ることだ。

この世界にきて早5年。もう十分になれたし今更もとに戻りたいとは思わないが、それでもこの世界にとって異物である二人はお互いこそがこの世界で唯一の家族だと本能が知っていたのだ。

ゆえに彼らはお互いを見捨てることはできない。

「ね、楽しい？」

夕暮れの差し込む部屋の中。

シンと静まる中でささやかれた言葉はなんの抵抗もなくカズトの心へと届いた。

「ああ」

それは何に向けての言葉だったのか。
とくに探ることもなく、カズトは頷いた。

「ただいま」

と玄関から未っ子の声が聞こえた。

どうやらなのはが帰ってきたらしい。

ミコトはこれ幸いと、確認の意味を込めて玄関へなのはを迎えに行
った。

どたどたと音をならせて2階から降りてみれば、なのはが制服姿で
立っていた。

「あっ、ミコトちゃん！」

「おかえり」

元氣そうに返事をする。

まさにミコトが抱いていたイメージと全く変わらない姿だった。

「なにかあった？」

「え？ 特になにもなかったよ。あ、でも今日の帰り道で」

ミコトからみて、本当に彼女は楽しそうに笑う。周りを照らし続けているように。それを自分はまねできないあ、と一人思う。

「……ということがあったの。だから……ってミコトちゃん聞いている?」

「あ、ごめんなさい。えっとフェレットを家で飼えるかって話だったっけ?」

「別にそんなことはいってないよ! といつかもうユーノ君がいるよね!？」

なのはがぷりぷりと怒る。

実際にほかの人間がやったらドン引きする自信があるが、なのはがやるとかわいらしく映った。これも主人公補正か……!

と馬鹿なことを考えつつ、ああ、やっぱりユーノはフェレット扱いなのねとミコトは一人涙しながら、この後のことを考える。

カズトはこの後いつもの鍛錬だろう。自分も混ぜてもらいたい、その時は能力戦になってしまっても楽しくない。

かといって小学生の宿題なんかは時間を使う気もない。

となればやることは一つだろう。

せっかくこの魔法のある世界に来たのだからせいぜい楽しまねば。

「ふふふ………」

「えっ、あれ、ミコトちゃん?」

思わず小躍りしてしまいたいくらいテンションが上がってくる。かつては想像の中にしかなかった魔法という力はいつまでたってもミコトにとって特別な力だ。それが使えるという事実だけで、天にもものぼる勢いだ。しかしなのはの前でそんな姿をみせて今までのイメージを崩すのもいやなので、必死に我慢した。我慢した……が、にっこりとなる頬はどうか押さえられたが奇妙な笑い声だけがあがる。それをみたなのはの顔は引きつっていた。

「なに？」

「あつと、えつと……そう！ 部屋にかばんを置きにいきたいからいい？」

玄関口で出口もなくミコトの笑みを見ているのが、なんとなく嫌になったなのはは苦肉の策を展開し、部屋へと避難しようとする。

「そうねえ、行きましょか」

とミコトまでついてきた。

そこでなのはは自分の失策を悟る。

いや高町家で預かられているミコトは自分と同じ部屋だったと。が、ちよっぴり憂鬱になっていたなのはへと救いの手が現れる。

「お帰り」

カズトだ。

「うん、ただいま」

カズトは手にタオルをもっている。

「これから道場に行くの？」

「おお。とりあえずご飯までしばらくかかりそうだからな。ちょっと運動してくるよ」

桃子は今日、早めに帰ってきたらしく、晩御飯を作っているようだ。かつて一流ホテルで働いていたこともあるくらいで、料理の腕も相応なものがある。

カズトの料理もおいしいが桃子には勝てない。

最近のカズトが作ることも多かったから、久しぶりに母の手料理が食べられるとあってなのは喜んだ。

「ふん。ね、私も道場にいつてもいい？」

「別にいいけど？　というよりも俺がだめって言える立場じゃないよ」

同時になのははミコトから離れられる理由ができたことを喜んだ。

ミコトは優しいお姉さんとして好きだが、たまにテンションが上がったところを見ると、怖いのだ。

特に夜中に二人でいるときはやめてほしい。

「じゃ先行くから、なのはたちは着替えてからこいよ」

カズトは二人をおいてそそくさと道場へと足を向けた。

なのはは待って、と声をかけつつ、自分の服を部屋着に帰るために部屋へと急ぐのであった。

しばらくして、恭也が家に帰ってくると、カズトと二人で剣術の訓練を始める。

「よつと！」

カズトは体を翻して、体を切り裂こうと襲い掛かる刃を交わす。

「相変わらず避けるのだけはうまいな、カズト！」

恭也は避けられたことに余計な口を叩きつつ、刃を手元へ引いて体を回転させ、左右の刃による連続攻撃。

「そつちこそ、小学生相手に手加減無いんじゃないかッ!？」

早いとはいっても体全体から繰り出される攻撃は予測しやすい。しやがんで回避をしようとする。

「弟弟子の指導のためだ！」

それを読んでいた恭也は回転エネルギーを加えた下段蹴りを混ぜていた。

空を切る刃と同時に、必殺の蹴りが迫る。

「ゲツ!？」

予想以上の威力に思わずうめき声がもれた。

正確に水月を狙った蹴りを腕を交差して防ぐことはできたが、いかせん体重に差がありすぎる。踏ん張ることもできずにカストが宙へと待った。

「行くぞ！」

同時に、恭也の姿が掻き消える。まるでそこに何も無かったかのよう。

神速。

脳のリミッターをはずし、人外の速度で空に浮くカストへと本命の刃を振るう!

傍から見れば刹那の時の中で一閃、二閃!

鍛え抜かれた鉄が残光を残し、カストの意識を刈り取ったッ!

「ごほッ……！ ごほッ……！」

かけられた水の冷たさに咳き込みながらカズトが跳ね起きた。鍛錬の途中でいいところに入った攻撃で意識が飛んだカズトへ、恭也が水をかけて無理やり意識を覚醒させたのだ。

「大丈夫か？」

いささか鍛錬に熱の入った恭也が心配したように言った。

それに、いつもならそんなこと聞かないよなあ。と不思議に思ったカズトだったが、恭也の隣で頬を膨らませているのはの姿をみて納得した。

大方なのはが俺を叩きのめした恭也のことを起こったのだろう。

これくらい鍛錬は普通なのだが、彼女には刺激が多かったらしい。カズト的にはなのはvsフェイトのほうが派手で危険も多い戦闘だったのだと思うのだが。

恭也はどこか困ったように頬をかいている。

「なんとというか、お疲れ様」

それに思わず同情してしまう。

別にこっちは悪くないが、彼女に怒られるとどうにもこっちが悪い気がしてくるのが不思議なところだ。

「まあ、最近はいつものことだからな」

「へえ、そのうち俺が怒られる側に回ってるかもしれないけど？」

「言っじゃないか。だが、まだ踏み台になるつもりはないな。あと

十年は修行して来い」

その言葉にやれやれと、腕を上げて首を振った。

けて返す言葉が無かったわけではない。何を言っても負けおしみに聞こえそうだから黙っただけだ。まさに沈黙は金なり。

「お兄ちゃんもカズト君も二人で通じ合っちゃって。なんで男の子ってこうすぐに仲良くなれるの〜ツッ!？」

となのはが叫んだが、カズトたちはそれを笑ってごまかすだけだった。

なぜなら男に余計な言葉は不要なのだから。

ましてや、ここ一週間は同じ部屋で寝ているのだ。

武術を嗜む優しい男として仲良くなるのは必然だった。

「なんか仲間はずれにされてる気がするの」

若干鋭いのは高町家のDNAがなせる業か。

恭也はそんな二人の様子を楽しそうに眺めながら、手元の時計を見る。見ればそろそろ夕食の時間だった。

「二人とも、そろそろご飯だ。行くぞ」

すこしぶっきらぼうな言葉だったが、二人はうなずくとすぐに用意を始める。

カズトはすぐに雑巾をもって道場の床を拭き始める。なのはも使っていないが、カズトの手伝いをしようと雑巾片手に床を拭く。

が、彼女は致命的な点を忘れている。

床をうまく走るカズトと対比するように三メートルも拭くとなのはコケる。

そりゃ見事にこける。

自分のスカートを踏んでこけるのはなかなか無いドジだ。

思わずギャグ漫画のような光景にニヤニヤしたカズトだが、余所見をしていたせいで道場の壁にぶつかるのは……仕方ないことだったのかもしれない。

「いちち……………」

痛みに頭を抱えるカズトをなのはがケラケラと笑いながら見ている。

「ふふ、カズト君ってドジなんだね」

…………いやいや、さっきまでこけてた人に言われたくないよ。

と思うが、自分もなのはに負けず劣らずドジなところをみせたからか、黙って床を拭き続けた。

そのときの顔は真っ赤になっていたが。

ほんとに面白い人だと思う。

私（高町なのは）にとって寂しさと苛立ちの象徴だったカズト君は、私が思っていた以上に面白い人だった。

さつきも顔をドジなところを見せて恥ずかしかったみたいで、顔を赤くしているのはすごくかわいいと思う。

そんなカズト君を見ると、思うんだ。

あの時喧嘩してよかった、って。

私はずっと寂しかった。

昔、ずっと昔。もうほとんど覚えてないくらい昔、私は一人だったんだ。

ちょうどお店を作って忙しかった時期だった。

お母さんは初めての喫茶店経営に忙しくて、私の方まで手が回らなくて。

大好きな剣術の修行と練習も中断して、お兄ちゃんもお姉ちゃんもそのお手伝い。

なんでこんなに忙しいんだろう。

なんでお父さんは私たちのそばにいないんだろう。

ひとりぼっちになってしまふ時間が寂しくて、誰も傍にいてくれないのが寂しくて、自分は本当はいろいろな子供なんじゃないか。子供ながらにそう思った。

すつごく疲れてるお母さん、子供の私でもわかったのになんでお父さんは出かけちゃうの？

お兄ちゃんたちが私と遊んでくれることもあったけど、それでも私はお父さんがいない日常が不思議だった。

ほんとはもつと遊んでほしかった。

でも、家族が疲れてる。

わがままなんて言えなかった。

どうして？

どうしてどこかへ行っちゃうの？

だからお父さんにどこかへ行つてほしくなかった。

優しかったお父さん。

強かったお父さん。

お父さんがいれば、みんなはきっと大丈夫なのに、なんでどこかへいっちゃうの？

そしてある時、私は知った。

お父さんが何でイギリスに行くのか、そこに何があるのかを。

私は悔しくて仕方がなかった。

夜中にひとり辛そうにしていたお母さんが、せめて少しでも寂しくないようにと私を抱く腕の中で静かに泣いた。

私たちよりもその子の方が大切なの？

私はわがままなんて言わないいい子だよ？

それでもカズトっていう男の子のほうがいいの？

悔しくて、悔しくて、お父さんに言った。

「ごめんな、カズトに御神流を教えなきゃいけないんだ……」

あの言葉が私にとってカズト君を嫌いになる始まりだったと思う。

やっぱり男の子がいいのかな。

私が運動できないから、お父さんはそっちの子の方がいいのかな。

そんな考えが、ずっと心の奥にあった。

でも、いい子の私はそれを誰も気がつかないくらい深くに沈めて鍵をかけた。

そう、私が気がつかないくらいに。

深く。

深く。

もう誰もそれを見つけれないように、沈めた。

その後、少しずつお店が軌道にのって家族が元に戻っていく。

家の中に幸せが包まれるようになって……それでも私はさびしかった。

愛されている自覚はある。

家族を愛している自信もあった。

それでも苦しんで、さびしくて、辛かった。

たった一つのこと、私を苦しめる。

お父さんがイギリスに行くたびに、箱の中にしまった『それ』が外へ出ようとむかぐ。

私はなんとかして、それを出さないようにしていた。

でも、カズト君がくると知った時、それは外へと出てしまった。到底抑えられるものじゃなかったんだ。

長年押さえつけられた『それ』は大きく、強くて、私の体を支配してしまふような激情。

彼を目の間に、いつの間にか私は魔法を使ってた。

魔法はみんなを笑顔にする奇跡の力。

私がいみんなに必要としてもらえる大切な力。

なのに……私はそれを暴力に使った。

私はあの一瞬をずっと後悔すると思う。

大切なのに、汚してしまいそうになった。

そうなったら私はもう立ち上がれない。

だって、それだけ大切だったから。

だから、私はカズト君にはお礼が言いたかった。

彼が止めてくれたことに、お礼が言いたかった。

でも私は言わないと思う。

だって家族に改まってお礼を言うのは……ちょっと恥ずかしい。

あの日、カズト君は家族だといった。

自分を殺しにかかった私を、家族と呼んだ。

ううん、それだけじゃない。

カズト君は私のことを受け止めてくれた。

だから不満があるなら言え！

気に食わないことがあるならいつてみる！

私は……その言葉をずっと待ってたのかもしれない。

言いたいことをいっても大丈夫な家族がほしかったのかもしれない。違う。

ほしかったんだ。

喧嘩になるかもしれないけど、最後にはきっと笑えるはずだから！

カズト君は勢いで言ったのかもしれないけど、私にとってそれがどんなにうれしかったのか、きつといつまでも知らないままなんだ。ほんとは寂しがり屋の私が、どれだけその言葉に救われたのか、いつまでも気がついてくれないんだろうな。

でも、今はそれでいいと思う。

家族なんだから、時間はたくさんある。

少しずつでいいんだ。

少しずつでいいから、私の思いを……いつかわかってほしい。

それが　　私の願い。

「なのは……。そろそろ家の中に戻るうぜ？」

突然、思ってもみない方向から、道場の中で考え事をしていた私に声がかかる。

さっきまで考えていたカズトくんからの声に思わず肩が跳ねた。

「あ、うん……」

私は焦ったように声をあげてすたすと先に行くカズトくんを追いかける。

……すこしは待ってなくてもいいのに。

急いでカズトくんの横に並んで、家に入る。

奥のリビングから香る優しい匂い。

夕方から運動していたカズトくんはもとより、私も思わずよだれを飲んだ。

「いけねっ、桃子さ〜ん！ 俺も料理手伝いますよ！」

私はそのままテーブルに座ってご飯を待つつもりだったけど、カズト君はお母さんの所へとひよこひよここと歩いていく。

「あらそう？ じゃあ、これ。お願いね」

「へいよーっ」

いまいち理解できない掛け声 以前聞いたときはノリだ、と言っていた をあげながら、お母さんがつくった料理をどんどん運ぶ。

「わ、わたしも！」

なぜだろう。

どんどん料理を運ぶカズトくんを見ると、負けた気分になるのは。

「あら、なのはも手伝ってくれるの？ なら……そうね。サラダの盛り付けをお願いね」

「うん！」

私はみんなが取る大きめのお皿にサラダを盛り付けていく。

うちは人によつて食べる量が違うから、各自でお皿に取つていく方式の朝ごはんなんだけど、この大きめのお皿が……重い。

盛り付け終わったサラダを運ぶのに、さりげなく肉体強化魔法を發動させてテーブルまで運んでいく。

「えいつ」

自分の胸よりも高い位置にあるテーブルに掛け声一つと共にサラダを置く。

家族が増えてみんなが座れるような大きめのテーブルに変えたばかりで、まだまだ新品の色が消えていなテーブルだが、少し高いのでものが置きにくい。

お父さんは大きくなればちょうどいいサイズになるさ。と思つてるみたいだけど、今はまだまだ使いにくい。早く身長がのびないかなあ。

その時、背後からの視線を感じた。

何だろう。

そう思つて振り向けば、カズトくんが。

『どうしたの？』

何か気になることでもあつたのかな。

みんなには聞こえないように念話で聞いた。

『いや、なんか魔力の流れを感じたような気がして……なんか魔法

使った？』

『うん。一応肉体強化の魔法を使ったよ』

『肉体強化？　なんでそんなのを家の中で……って、そっか。そうだよなあ』

『……すごく含みのある言葉のような気がする』

『まあ、あれだ。すぐに大きくなるさ』

『やっぱり！　いいもん！　私はすぐに大きくなるから！』

『落ち着けて。少なくとも未来図の桃子さんみたいな美人になれるんだから、今くらいは我慢しろって』

『う〜……いいもん』

『まあ、いいや。とりあえず気になったただけだから』

そういつてカズトくんは念話を切った。

……今思っただけで、どうやってこんな小さな魔力を感じたんだろっ。

大体用意された料理の数々を横目に、お兄ちゃんとお姉ちゃんを呼びながら横目にカズトくんを見る。

黒髪黒目で女の子のように線の細い顔と優しそうな雰囲気かじみ出てる男の子。

よくわからないけど周りの友達がいうには、顔も頑張ればそれなり

らしい。

多分他人がカズトくんのことを表せばこんなものだろう。

私はそこに、実は強い、の一言を付け足すけれど大体は一緒だ。カズトくんは自分のことをあんまり強くないっていうけど、かなり強いと思う。

私との模擬戦は最初以降は負けが続いているけど、それでも強い。多分普通の武装局員なら手も足もでない……はず。

そんなカズトくんの強さの秘密を今、垣間見た気がする。

いくら距離が近いとはいえ、私の微々たる量の魔力操作に気がつくくらいの 鋭さ。

この一点が彼の強さを保っているような気がする。

『なのは?』

呼ばれて顔を上げる。

見ればすでに全員が席にしていた。

自分でも頭の中が魔法に染まってきたと思う。そんな頭の中から慌てて魔法についてのことを振り払いながら席に着く。

「んむ。席に着いたな?」

お父さんはみんなを見ると声をかけて、いただきますと言った。それに倣うように、いつも通りにみんなが揃っていただきます。

うん。家族って、こういうのっていいよね。

日もどつぷりと沈んだ夜。

ミコトはなんでもなような予感にとらわれて空を見上げた。

見上げた空にはいくつもの雲が存在し流れる。それに、おお今日も流れてる流れてる、と適当な考えを生み出しながらもフェレットの姿をとったユーノの話を聞いていた。

今日の夜から本格的にミコトはユーノから魔法を教わることになっていたのだ。

一応知識としては魔法の知識を持っているとはいえ確認の意味も含めての講義だ。

とはいえ今日はミコトになのはからの魔法のお披露目という一面もあるが。

「で？ ユーノはなのはにどうやって魔法を教えるの？」

「えっと、とりあえず最初の基礎は僕が教えて、あとはレイジングハートのシミュレーション機能を使って魔法の効率的な使い方を覚えていくのが基本形かな」

なるほど。原作と同じか。

とはいえ魔法について深い造詣をもっているわけでもない9歳の子

供がいきなり魔法を教えるのであればこんなものか。とミコトは思っていた。

だがしかし、本職の人であっても教えるという作業は大変なのにユーノにもっといいものを求めるのは酷なものがある。

幸いにしてユーノは魔法の理論について詳しく覚えているのでなのはに基礎を教える分には不自由はない。

原作でもレイジングハートとなのはが一緒に魔法を覚えて強くなっているというような印象がミコトにはあったけれど、この世界でもそうらしい。

夜空が見えるほど薄い結界の中でユーノの講義は続く。

ミコトは暗記も得意だったのか、特につまずくこともない。

つまり、何だかんだでミコトはユーノが語る魔法理論について楽しんで聞いていた。

なかなかコアなこともあったけれどユーノが噛み砕いて教えてくれたおかげでミコトとなのははしっかりとついていけたし、飽きることもなく楽しめた。

ユーノは教師に向いてるらしい。

「なるほどねえ。魔法っていうから感覚的なものの方が強そうないメージがあったけど……そうでもないのね」

あらかたの話が終わるとミコトがそう言った。

なのはもそう思っていたらしくユーノの方をみた。

「確かに感覚的なものもあるけど、今は魔法を構築させて発動させるところまで持っていくのをデバイスが大体やってくれるのが主流になってきたんだ。だからすごい昔みたいに魔法を覚えるまでが苦労するっていうのはあんまりないかな」

「だからなのはがあんなに簡単に魔法が使えたっていうわけ、と」
納得した。そう言わんばかりの表情をミコトが取るが、ユーノは首を横に振る。

「それでもないよ。初めて魔力を使うはずなのはがあれだけ綺麗に魔力を運用できたのはすごいよ。普通ならある程度の期間は魔力の放出みたいな基本的な練習をしないと出せないから」

詳しく聞けば、昔のように魔法の構成を暗記するする必要はなくなつたが、結局のところ最後に魔法を使うのは自分だということだ。つまり初めて魔力に触れたなのはがあそこまで魔法を扱って見せたのは十分に驚嘆できることらしい。

ミコトはそれを聞くと、ああこれが主人公補正か……と一人納得していた。

つまるところ、他の魔法世界に住む人間が驚くほどの適性をなのはが持っていたということだ。

自然となのは二人の視線が向いた。

話の中心であるなのは自分がやったことがどれだけ恐ろしいことなのか理解しておらず、首をかしげているだけだった。

そんななのはの様子に疲れたようにユーノは溜息を吐く。

「そう言えば今まで聞かなかつたけど、ミコトは何処で魔法を覚えたの？　ここは一応管理外世界でしょ？」

ユーノと同様になのはのあふれんばかりの才能に憧れを覚えつつ溜息を吐いていた時にきたこの質問に、ミコトはビクツと体を反応させる。

ついに来た。

ミコトは少しだけ考え込んだ後に前に考えていたシナリオを説明することにした。

「私？ 私は今までこことは違うイギリスって国にいたんだけど、そこで魔法を使える人に出会ったのよ。ちょうどよく私にもある程度の才能はあったし、向こうも乗り気で教えてくれたのよ」

「そうなんだ。その人は今どこに？」

「さあ？ 今でもイギリスにいるんじゃない？ 連絡なんて取っていないからどうか知らないけど」

それを聞くとユーノはがつくりと肩を落とした。
おそらく会ってみたかったのだろう。

残念だがその願いを叶えさせるわけにはいかない。
だっていないもん。

「そう言えばミコトって魔力変換資質持ちなの？」

「一応そうなるんじゃない？ 特に検査とかしたことないからわからないけど」

ミコトは軽くそう言った。

「まりよくへんかんししつ？」

が、なのはは魔力変換資質という言葉がわからずユーノに聞く。

「魔力変換資質っていうのは一種の体質みたいなものことなんだ」
普通の魔導師が魔力を放出する際、本来ならばただ体の中にある器官リンカーコアから魔力が放出されるだけだが、魔力変換資質を持つている場合少し違う。

放出する魔力が無意識のうちに性質を変えてしまうのだ。
たとえば炎の変換資質を持っているのならば、意識せずに魔力を使うとすべての魔法が炎に似た性質を帯びる。

これは訓練次第で変換するかを使い分けることができるので、戦争の時代なんかでは手札が一つ増えるという意味でも有用であった。

現在では魔力変換資質はそこまで有用なものでない。
というのも魔力変換資質がなくとも雷の魔法は使えるし、炎だって出せる。

確かに無意識に変換できる魔力変換資質を持っている方が少ない魔力で変化することができるが、大した違いではない。

それにそこまで珍しいわけではない。

魔導師にそこそこ声をかければ一人くらいすぐに見つかるレベルだ。だから大したことではない、とユーノがなのはに説明をすると、

「でも人にはできないことができるんだよね。十分にすごいと思うんだ」

それを聞いて思わずミコトは爆笑しかけた。

別に大したことではないと説明されているのに、それに真っ向から意見を言うとは。

普通このくらいの年の女の子なら言われたことはある程度鵜呑みにしてしまう節があるはずだがなのはに当てはまらないらしい。

いや、なのはの周りにいる小学生は小学生らしくないからこれが基本なのかもしれない。

「そ、そうだね」

なぜかユーノはどもって俯く。

ミコトはその顔が赤くなっているのを見逃さなかった。

ミコトはそれを青春してるなあ、と優しく見ていた。

そうして優しく見ていたから気がついた。

なのはがどこかそわそわしている。

……どうしたの？

聞こうと口を開きかけてやめた。

なのはが何度もちらちら見ていたものがわかったからだ。思わずにやりと口をゆがめる。

なのはの視線の先にあるもの、それは……レイジングハート。

多分なのはは魔法を早く使いたいのだろう。

今将来を悩む彼女が運命のように出会った新しい力 魔法。

それはきつとなのはを一瞬で虜にした。

以前までなら放課後の時間はお店を手伝ったりしていたが、今日のはのは魔法のことで頭がいつぱいなのかすぐに家に帰るとユーノに話を聞いていた。

ミコトでもわかるくらいに彼女は魔法に夢中だ。

まだ一週間ばかりしか一緒にいないがすでに妹のように思っているなのはに助け船を出すことにした。

「ユーノ？ そろそろ魔法の練習始めないと時間無くなるんじゃない？」

はっとするユーノは、焦ったように体ごとなのはへと向き直り、なのはバリアジャケットを着るように催促をした。

「いくよ、レイジングハート！」

なのはユーノの許可に目を輝かせると、立ち上がりすぐさまレイジングハートを起動させる。

光に覆われたのは一瞬。僅かな時間で構築されたバリアジャケットに身を包むとなのはほんの少しだけ杖を呆然と見たあとにギョツと力を込めた。

「ミコトちゃん！ 見てみて！ 魔法だよ魔法！」

見上げた顔に映るのは歓喜。

なのはは喋るフェレットを前にしても、今までのが真実ではなく夢かもしれないという考えが打ち払えていなかったのかもしれない。

今までこの魔法のことは誰にも言えなかった。

だからこそ溜まってしまったストレスを解消するようにミコトへと自慢をするように報告するのだった。

楽しそうにミコトに報告するのはをみて、ミコト自身もうれしそうに目を細めた。

というよりものはがこうして楽しそうにしているのを見ると本当にミコトもうれしいのだ。

原作が好きだったからこそ、こうして話したり一緒にいるだけで楽しい。

さらに今のなのははミコトが高町家にお世話になっている以上家族

でもある。

家族が楽しそうにしていればそれだけでミコトもうれしくなる。

ミコトはレイジングハートを手に持ってキャピキャピとうれしそうに騒ぐのはへさらに声をかける。

「その程度で満足？ まだまだ魔法にはいろいろなものがあるわよ？ そこまでうれしがってたら他の魔法まで持たないかもよ」

なのははまだ子供。

これだけでこんなに騒いでいたら他の魔法の時には疲れて寝てしま
うんじゃないかな。

ミコトがそう思うくらいにはなのははテンションが高い。

なのはは心外そうな顔をした後に、そんなに子供じゃないもん！
というが、そういう所が子供なのだ。

ミコトはなのはの姿を見ておかしそうに笑った。

「もういいもん！ もっとすごいを見せてあげるから！」

すでに日も沈み暗闇が世界を統べる中で、一人の少女が何の特徴もない家をじつと見ていた。

その家の一室ではまだ光であふれ、なかに住む子供たちが盛んに話をしている。時おり桜色や青い光が外へと漏れていた。

見る人が見ればすぐにわかる。

中にいる子供たちは魔法の練習をしているのだ。

机の上に立つ小さなフェレットが盛んに言葉を伝え、それを聞いた二人の少女がその言葉の通りに魔法を使おうと努力している。

黒髪の少女はあまりできがよくないのか、亜麻色の髪の少女が容易く成功させた魔法を発動できず雷光に変えていた。

もれる電気に驚いたように隣の少女が身をすくめて避けるも、フェレットはよけきれずぴくぴくと体を痙攣させていた。

少女たちはそれを見るとおかしそうにお腹を抱えて笑いだす。

そんな微笑ましい光景。

だがその家をじつと見ていた少女の瞳に優しさは ない。

ただうらやましそうにその紅い双眸を光らせて彼らの姿を見ているだけであった。

第十五話 「お姉ちゃんはそのままでおっちょこちょいではないっ！」

ジュエルシードがこの世界に落ちてきてからもう二カ月以上たった。

あの日から少しだけ変わっていた海鳴の空気も、少しずつだけれど元の落ち着いた雰囲気に戻ってきている。

それなりに平和で、簡素で、落ち着いたあの町の雰囲気が好きなので、早く元の戻ってほしいと思う。

そして変わったのは町の雰囲気だけではない。

^{キャスト}俺の身近で一番変わったのは　なのはだ。

すでに別人かと思うくらい雰囲気が変わっていた。

外見じゃない。内面的なものが全然違ったのだ。

あの日、すべてはなのはが覚悟を決めたせいで変わってしまった。

確かに彼女の根源は全く変わってはいない。

それ以前の問題として、9歳の女の子が戦う覚悟を決めたことが悲しかったのだ。

その覚悟は戦いの終わった今でもなのはの心の底にある。

士郎さんも頭をひねっていた。

なにがあったのかと。

桃子さんも心配そうにしていた。

それになのはは気がついているのだろうか。

自分が変わった方向がいいものだけではないということに。
自分が家族に心配をかけているということに。

彼女は知っているのだろうか。

朝早く起きてどこかにいってしまい、何処に行くのかを聞かない桃子さんのさみしさを。

それが成長だという人もいる。

そうかもしれない。

でも成長するのならば、せめて見守る人にほんの少しでいいから気をかけてほしい。

だって、家族はなのはのことを愛しているのだから。

「それでもいいんですか？」

俺は道場で師匠である土郎さんに問うた。

「かまいはしないさ。さみしいけれど……なのはが成長しようとしているなら、私たちは見守るくらいしかできないよ」

小太刀の手入れをしながらすこしうつむいて言った。

その姿は確かに父親だった。

それに俺は何処となく尊敬を覚える。

俺はもし大事なものが壊れるかもしれないなら、体を張って守ってしまうから。

子供という最大の宝物が自らの手から離れていくことはすく……
怖い。

想像するだけで心がくじけてしまいそうだ。

見知らぬ場所で怪我をするかもしれない。
そう思うだけで夜も眠れない気がする。
士郎さんのように成長をしようとする娘を手の届かない場所へ送り出すことは俺には無理だ。
現に今も

「そう言えばカズト、そっちは学校どうなんだ？」

「どっつて……何が？」

士郎さんはなぜかニヤニヤと笑う。

「あの学校はお嬢様学校だからな。かわいい子がたくさんいるんじゃないか？」

なるほど。

そういうこと。

「一応言っておきますけど……そういう話はないですよ」
睨むように士郎さんに言うと、つまらん、といつてくる。
残念なことに今の俺はクラスになかなかなじめないかわいそうな立場にいます、と言ったら怒られそうだからやめておこう。

「言っておくが、恭也が学生の時はすごかったぞ」

あれと一緒にするな。

ニコぽを本気でできる人間はもはや兵器だと思つ今日この頃。

……だってあの人すごいんだよ。

この前翠屋に来た小学生の頭を撫でたらもの見事に真っ赤になつてたわ。

最近はかなり頻度で通つてくれます。

そうやって翠屋は客足を伸ばしているのね。

なんせ店にいる店員は必ずいけてる面、略してイケメンだからね。高校生とかがよく来ること。

あ、俺はそこまでよくないから。

だから行くならキツチンです。

未だに桃子さんが腕を認めてくれなくて入れてなんかくれないけど。

「そろそろ時間じゃないのか？」

どうにかして桃子さんをうならせる方法を考えていると土郎さんが教えてくれた。

急いで持ってきていた腕時計に目を通せば、もうすぐ11時になるうとしてる。

俺が夜と待ち合わせしているのは12時半。

そろそろ汗を流して用意を始めないと間に合いそうに無い。

俺は土郎さんにお礼を言うと、一目散に準備を始めるのであった。

第十五話 「お姉ちゃんはそのままでおっちょこちょいではないっ！」

「はぁ……………はぁ……………」

荒い息の音が聞こえる。

高町なのはは目の前の敵に意識を集中させた。

滝のような汗を流しながらも、集中力をなくすことなく敵を見据えている。

「……………シュート……………」

背中に隠すように展開していた10つの誘導制御型の射撃魔法を敵に撃つ。

目の前にいた合計十二体の人型の敵の内8体を仕留めるが、他の2発にまで完全な思考制御をすることができずにあらぬ方向へ飛び、あたることは無かった。

硬直状態からほどかれた敵は射撃魔法から逃げるように散開すると息を合わせたようになのはめがけて魔量弾を放つ。

そこでなのはは前方をカバーする形でプロテクションを張る。しかし、あくまで前方をカバーするだけの楯では後ろは防げない。だがなのはにとってはそれでよかった。

クルリと方向を変えるとなのはは再び魔力弾を生み出し背後から迫っていた魔力弾の数々を直接ぶつけることで攻撃を防いだ。さすがに複数の魔法を同時に起動するのは厳しいのかなのはの顔がゆがむ。

それを歯を食いしばって耐えるとなのはは高速起動魔法を発動させて一気に敵に囲まれた危険地帯から上空へ飛び上がる形で脱出する。敵はそれを見ると下から追う。

「もう一回……シユート！」

その瞬間なのはは動きを停止させて、もう一度魔力弾を作り出し、連続して打ち出した。

いっぺんに打ち出すのではなく一つ一つ打ち出すことで、さっきのように制御できずに外へと飛んで逝ってしまうのを防ごうとした。

が、そんなちまちまやっていてはなのはの元へ敵が来るまでに撃ち落とせるのは2体が限界だった。

敵の内の何体かは近接戦闘型だ。

なのはへと突撃を行い、それを遠距離型の敵がサポートする形で魔力弾を撃ってくる。

典型的な前衛後衛の形での突撃。

基本だがそれゆえ強いフォーメンションだ。

しかし、なのはは敵が一直線になる瞬間をずっと待っていたのだ。

「レイジングハート！」

瞬きの間になのはのデバイスが砲撃形態へと変形する。
完了した瞬間、なのはの足元に円環の魔法陣が生まれ、輝きを放つ。

「デバイスン」

デバイスの先端にも取り囲むように帯が生まれそこへ魔力が集中した。

この間、僅か一秒。

なのはへと目標を定めた敵はすでに目の前へと迫っている。

それでもなのはは恐怖に目をつぶることなどなく、そのトリガーを引いた。

「バスターーーー!!」

加速し生み出された奔流は目の前に迫っていた近接型の敵を打ち砕くとそのままサポートのために空を走っていた魔力弾を砕き、背後へと控えていた後衛を飲み込んだ。

「ふう。どうだった？」

なのははレイジングハートが送信する仮想戦闘データをもとに心の中でイメージファイトをしていた。

マスターのなかなかの戦闘ぶりにデバイスはGOODと返した。

「うん、ありがとう」

うれしそうなのはも返す。

基本的に思考のなかで戦闘をするこれは体がつかれることはないし、魔力を消費することもない。

戦闘の経験が圧倒的に足りないが授業等で魔法の練習時間の少ないなのはにっしてはうってつけの練習方法と言えた。

そもそもなのはは砲撃型の魔導師だ。

そして多方向から襲撃する誘導操作弾を使用した対集団もこなせる魔導師でもある。

とはいってもまだまだなのはは魔導師のひよっこ。

毎日の訓練で徐々に力量も上がっては来ているが、それでもなのはの望む力には圧倒的に足りなかった。

だからこそなのははレイジングハートと二人で考えた。

どうすれば強くなれるのかを。

基本的にジュエルシードの被害を抑え、事件を解決してからなのははの生活は魔法で彩られており、そのほとんどが訓練だ。

まずなのはは常にレイジングハートが魔力による強い負荷を体にかけている。

それによりなのはの一挙手一投足に魔力を消費するという、いわば

魔導師養成ギブス的な効果を發揮している。

並みの魔導師ならば立ち上がることも困難な負荷の中でなのは日常を平然と過ごしている。

さすがのなのはも最初の数時間は辛かったが、慣れればそこまでもなかった。

そしてさつきもやっていたのがイメージファイト。

なのは主に授業中にこれをやっていた。

さすがに友達と話している時には中止しているが、基本的にはこれとずっと続けている。

そもそも二つ以上のことを同時に思考・進行させるマルチタスクは戦闘魔導師には必須の技能だ。

高速移動をしながらの攻撃と防御をしつつ次の魔法の発動準備。

これらの技能は簡単には身に付かない。

日々の訓練の量と質が明確に現れるのだ。

攻撃・飛行・防御魔法を発動させながらの空戦は高度な戦略と状況を判断する高速思考を必要とする。

特に戦闘中の判断は経験の差が大きく出る。

ゆえになのはイメージファイトで限りなく実戦に近い状況を作り出し、それを胸に日々戦闘経験を積んでいるのだ。

他にも高速機動の訓練。

高火力・重装甲のなのは機動系が重いため効果的な機動戦略を日々研究しているのだ。

さらに魔法を実際に撃つことで魔力の消費を体にならさせることも重要な訓練だ。

それらの訓練を毎日なのは行っていた。

それはひとえに町を守りたいという気持ちがあったのに加えて、や

はり魔法を使うことが楽しかったからだろう。

なのは自分から喜んで魔法の訓練に身を浸していたのであった。そんななのはの力量は成長というよりも進化の域に達している。もうそろそろ頭打ちになるはずだが……どうにもそれらしい兆候は見えない。

レイジングハートは自分を十全に扱えるように自らを調整し続ける。なのははそれに答えるように魔法の訓練を再開するのであった。

「なのはー、そろそろお昼にしようよー」

再びイメージファイトの中へ入ろうとしたとき、ユーノから声がかかる。

時計は頂点へ、日も真上にある。

朝から町はずれで魔法の練習にいそしんでいたためそろそろお腹が減っていてもいいころ合いだろうと、ユーノが判断したのだ。

実際に魔法に夢中になっていたなのはは気がつかなかったが、ごはんと言われるとかなりお腹が減っていた。

ユーノの隣に置いてあるサンドイッチに視線が向く。

そうだね、となのはの手が伸びる。

が、横から出た手がそのサンドイッチが入っていたバスケットごと持っていく。

「あっ」

悲しそうな声が出た。

ユーノがそんな意地悪をした少女へとジト目で見つめる。

「なによ。そこまで変な顔しなくてもいいじゃない。私だってお腹すいてるんだから」

さつきまではこの場にいなかった人物　ミコトはバスケットの中から一つ取り出すと、口に運んだ。

チーズとハムのサンドイッチはさっぱりとした甘みがあっておいしい。

なのはが簡単に朝の少ない時間に作ったものだが、桃子さんが買ってくる食材は基本的に保存方法がいいので新鮮でおいしい。頬をほころばせながら瞬く間に一つを食べ終えたミコトに、ユーノとなのはは悔しそうに見ていた。

「べつに？」

自分たちの分なのに……という思いを目にあからさまにさせてくる二人にミコトはやりすぎたと反省をしつつ、サンドイッチのバスケットを持っていた方とは違う腕を前に出した。

そつと香る梅の匂い。
酸味とグツとくる後味が高町家で人気のカズト開発のデザート
の匂いがした。

「剥れなくてもいいじゃない。それに私がここにいるのは、お母さんから追加のお弁当をもらって持ってきたからなのよ？」

なのはは匂いだけでそれがなにかわかったのか、一瞬瞳を輝かせるけれどそれはすぐに瞳の奥に消えていった。

「今日はちょっと……遠慮しておくね？」

「いいの?」

ミコトが心配そうに声をかける。

それになのはは振りかぶって、いいと答えた。

「そう。とりあえず食べながら今日の予定から立てちゃいましょうか」

ミコトは不思議そうな顔をするが、特に気にした様子もなくお昼ご飯を座って食べ始めた。

「とりあえず二人ともこのまま魔法のお勉強でしょ?」

カリカリとパンの切れ端を食べながら二人に聞く。

「うん。今日は特に予定もないから」

「僕はその付き合い」

カズト特製のサンドイッチをおいしそうに頬張りながらなのはが答える。

どこか複雑な表情をしながらなので、答える声にも覇気がない。

残念なことにカズトは料理がうまく、ミコトはできない。

すでにミコトは諦めたことであるが、なのははまだ納得がいつてないらしい。

競争心はいいことよね、でもそう簡単にカズトには追いつけないわよ。

と完全に他人事のようにミコトはあくびをしつつ思っていた。

「私はこの後、他の管理世界にちよつといつてくる」

「え、他の世界に？」

ユーノが声を上げた。

普通は他の世界に行く時、管理局の船に乗るか転送ポートを使用するなどの義務がある。

勝手に転送をされるといろいろな事故が発生するからだ。

ミコトもそれを知らないわけではないだろう。

ユーノが一度魔法のことについて話した時に言っていたはずだ。

「そうよ。まあ、無人世界にだからばれなきゃ大丈夫でしょ」

「駄目だよ！ 無人世界に行くのがばれなかったとしても、そしてらその世界で怪我をした時はどうするんだ！？ 誰も助けに来てくれないよ？」

「その辺も安心しなさいって。カズトを一応連れていくから大丈夫よ」

「でも……ユーノ君が言うみたいに、やっぱり危ないんでしょう？ それならやめた方がいいよ」

二人が心配して声を静止の声をかけるが、ミコトは心配し過ぎだと笑い飛ばす。

「まあまあ、そんなに危険な管理外無人世界にはいかないようにするから……ね？ それに私たちは結構何度もやってるからね。引き

際はわかるの」

ね、だから大丈夫。

そうミコトは笑い、なのはとユーノの頭をなでた。

未だにユーノは納得していないようだったが、最後にはミコトになにも声をかけず、見送ることにしたらしい。

「ほんとに危ないんだから、気をつけてよ？」

「ユーノは心配し過ぎよ。変なこともしないし、ね？ じゃあ、そろそろカズトも待ち合わせの場所で待ってるだろうから、行くわね」

「あ、うん。お姉ちゃんも気をつけてね。それとお母さんが夜には帰ってきなさいって言うたよ」

「お姉ちゃんはそのままでおっちょこちょいではないっ！」

「で、せっかくの土日にお菓子作りに精を出していた俺を拉致って何するかと思えば……結局LV上げかよ」

俺は堪らないといわんばかりに大仰に呟いた。

「仕方ないでしょ。私たちの場合はどんどん経験値溜めないと成長できないんだし」

姉ちゃんが悪びれもなくいう。

おいおい、と思うが姉ちゃんはこれがデフォなので諦めるしかない。こういうときは黙ってついていくのが得策だ。

とはいえせっかくの休日を潰して管理外世界に行くとは思わなかったが。

「しかもここ、結構大型の魔法生物がいるところだろ？ 何にも用意してないけど大丈夫か？」

「まあ、今日はちよつとやったらすぐに帰るつもりだし。さすがに泊りがけで経験値稼ぎにいったらお母さんに怒られるもの」

第何管理外世界だが知らないが、以前来た時はなかなか強力な敵がいて危なかった場所だ。

周りを見渡せば一面が砂漠。

下からの強襲で食われかけたのはいい思い出だ。

「さすがの姉ちゃんも桃子さんには怒られたくない、と」

「だって怖いんだもん。というかあんたも普通にお母さんって呼べばいいのに」

「いやな、感謝はしてるし、尊敬もあるんだけど、なんかお母さんって呼ぶのは……ちよっとなあ」

「男の子特有の気恥かしさってやつ？」

「いや、そういうのじゃ……無いと思うけど」

どういうわけか、俺は桃子さんのことをお母さんと呼ぶのに違和感がある。

別に恥ずかしいとかそういう理由じゃない。

自分でもわからないが、何か引つかかるといっつか、違うといっつか。

「まあ、そのうち呼ぶようになるでしょ。とりあえず今は、経験値稼ぎしましょっか」

姉ちゃんは俺のそっぴった心の細かい機微には興味がないようだ。

俺……弟なんだから、もうちよっと気にかけてよ。

と若干シスコン的思考を使いつつ、二人で空を飛ぶ。

この前の時の庭園での傀儡兵との戦闘のおかげで一気に2LVも上がったおかげで、今までは不安定だった飛行魔法も難なくできるようになっていた。

時の庭園では痛い思いもたくさんしたが、このLVUPだけは素直に喜んでいい気がする。

そつでも思わないと、死にかけたのに浮かばれないといっつかもある

けど。

こうして高速で空を飛んでいると、俺は魔法のある世界に来たんだな、としみじみ思う。

かなりの高度を飛び、流れていく風を頬に感じ、こうして飛んでいることが俺にとってはファンタジーで、そのうちつまらない現実の一つになるのだろう。

それまではこの魔法を楽しみたい。

姉ちゃんはどう思っているのだろうか。

ふと、そう思っただけ横を見るが、姉ちゃんはすでに慣れていて特に何も思わないようで、眼下の大地に敵がいなか鷹の目のように細めて探していた。

あらあら。

第三者としてみると、姉ちゃん……あんた完全に戦闘狂だよ。特に目が怖いつて。

爛々と光る視線に若干引きながら、隣を飛んでいると、姉ちゃんの目が強い光を放った。

「いた ツ！」

すぐさま姉ちゃんは方向を転換していく。

同時に俺もそれについていくように方向を変えながら、姉ちゃんが見つけた敵の姿を確認する。

さすがに姉ちゃんもいきなり特攻をするような愚策は行わず、思わず胸を一撫でしながら敵を観察していく。

それはトカゲのような体をしていた。

砂漠の色と似た肌を持ち太い尻尾を地面の中に埋めている状態で、カメレオンのような青い目をギョロリとこちらへ向けている。

「……結構大きいな」

「そうね20mくらいはあるかもしれないわね。でも、やりようによっては沈められるでしょ」

「だな。とりあえずこいつも魔法生物だからな。なんか魔法を使うかもしれない。気をつけるよ」

「はいはい。誰に言ってるのよ。私はプレシアにも勝った女よ？」

「そういうお調子者の性格が俺は心配なんだよなあ……」

「いいからいいから。いつも通りで行きましょう。前衛はよろしく」

「OK。任された。とはいえしょっぱなはでつかいの頼むぜ？」

俺は懐から小太刀というには少し長い刀を抜きだしつつ、正眼に構えていつでも攻められるようにする。

「もちろん。魔法使いの火力を見せてあげるわ」

対して姉ちゃんは手を前へ突き出し、魔力を集中していく。

「それじゃ、行くわよ！
ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス
雷の暴風！！！」

戦端が、開かれる。

「　　ッ!?!」

ミコトが雷の暴風ヨウイス・テンベスターズ・フルケリエンズを放とうと瞬間、30mほどはなれた位置にいたトカゲが消える。

ふっ、と最初からそこに何もなかったかのように消えたのだ。ミコトが撃った砲撃魔法がそのまま後ろの砂丘を粉々にした。

まさか……透過魔法!?

ミコトは砲撃魔法を撃ち終えたあとの姿勢を直しながら、背筋が震える。

自分が知る限り、瞬間的に消える方法はいくつかある。

一つ目は短距離転移による瞬間移動。

しかしこれを動物ができるとは思えない。

これには演算や計算などのものが必要不可欠だ。

たいして脳の発達していない魔法生物が感覚で使っていない類の魔法ではない。

もしできるとしたら、それは魔法生物というよりも、ロストロギア級の生体兵器だ。

もう一つは透過魔法の使用だ。

体を魔力で覆い、擬似的に透明にして消えたように見せかける魔法。これならイメージが中心で、それに特化した生き物ならば消えることができるかもしれない。

地球にも体の色を変えて隠れる生き物がいるくらいなのだから、体を透明にする奴がいてもおかしくない。

ミコトは敵の能力を悟ると同時に、厄介だと舌打ちをした。

いったいどれだけの長さで隠れていることができるのか分からない。少なくとも最初に体をさらしていたこと、使用する魔力が有限であることを考えれば、いつかは敵も姿を現すはず。

だが対策をしなければ、それまでこっちが一方的に攻撃を受けてしまうではないか。

敵が透明になる能力を持っているとはさすがに予想していなかった。ミコトは、さすがに一度下がるべきか思案する。

が、すぐにその案を排除。

せっかく強敵を見つけたのだ。

少しはあらがってからにしたい。

「カズトツ！」

不退転の意思を込めて叫ぶ。

カズトは呆れるような表情を取りつつも、すぐに刀を構えて空へと浮かび上がった。

あの生き物には翼がついていなかった。

魔力を持っている以上飛行ができないとは断言できないが、それでも不意打ちの可能性を少しでも減らそうとした結果である。

カズトとミコトは一瞬、合わせた視線の中でお互いの意思を交換する。

……しゃあねあ。危なくなったら撤退。

……もちろん。

お互いに体を空へと浮かべながら、敵を待つ。

幸い、ミコトの砲撃であたり一帯へと宙へ舞った砂のおかげで敵の動きは分かりやすい。

二人はお互いに背中を合わせて、不意打ちへの対策をとっていく。カズトはふと、片手をポケットに入れて、敵を探す。

「そっち……いそつ?」

「いや……こつちにも動きはなし」

過去に所詮動物と考えて痛い目をみたことにある二人は、たとえ相手がただ隠れるだけの能力しか持たなくても侮らない。

管理外世界の生き物は容易く地球の常識を超える行動をするとんでもない戦闘力をもった生物であることが多い。

例えば……そう、今のように。

「っ！っ！」

バサツという轟音と共に二人の下の砂が飛び散る。二人の眼下からあの生き物が飛び出てきたのだ。

実に20m近くある生き物が10m以上飛び上がる。

はたから見れば悪夢のような光景だ。

それも体に対して大きすぎる口を開けて自分たちを飲み込もうとしているのなら、なおさらに。

「ごめん、姉ちゃん！」

カズトは咄嗟に居合い拳でミコトの背中をたたいた。

ミコトはバリアジャケットののおかげでそう大したダメージにはなるまいと判断し、遠くへと突き飛ばしたのだ。

同時に、自分も足元に魔法陣を生み出してはじけるように飛び、その口の範囲から逃れる。

自分が獲物を飲み込めなかったことを悟ったあの生き物は、すぐさま身を翻して頭から砂に潜ろうとする。

「させないってーの！！！」

カズトは後方へと体を移動させながら、刀を持たないほうの手で居合い拳をあの生き物目がけて何度もたたきこむ。

「っ！っ！！」

その反対側のミコトもまた、背中を撃った衝撃に顔をしかめつつ手元から稲妻を放った。

が、

「ゲツ！」

敵の防御は二人の予想以上だった。

トカゲのような肌からそんなに鱗も堅くなさそうと思ってしまっていたが、見た眼に反してかなりの硬度を有しているらしい。

カズトの居合い拳はカーンという音と共に弾かれ、稲妻が焼くはずだった部分は大してダメージを受けた様子もない。

生き物は悠々と砂の中へと潜っていった。

「……………うわ、予想以上に厄介ねえ……………」

思わずつぶやく。

消える能力に砂の中を潜る力、追加して10m以上も飛べる筋力と硬い鱗。

はつきり言って、この生き物がつかいで地球に来たらすぐに生態系の頂点へと立って、周辺環境を激変させるだろう。

「でも……………やりようはいくらでもある。だろ？」

「もちろん。それじゃ、やりますか」

ミコトが笑う。

もうすでにアイツの力は見た。

さすがにすべてを見たわけではないが、それでもこれだけ把握できれば十分。

お互いにもう一度背中合わせになる。

「さあ……きなさいよ」

ミコトは空を飛ぶ自分たちの足元にいくつかのバインドを張り巡らせる。

そうすれば飛んできた瞬間にバインドが発動し空に縫いつけられた哀れなトカゲが一匹。
どうとでも料理できる。

理性を手に入れた人間が手に入れたのは道具だけでない。
それを正しく、効率よく使うことができる思考もまた、人間が他の生き物と違う進化の果てに手に入れた能力なのだから。

さあ、こい。

飛びあがった瞬間がお前の敗北だ。

ミコトは頬がつりあがっていくのを押さえずにその瞬間を待ち、足元でバサツつと轟音が上がると同時に大きく笑った。

勝った。

待機させていたバインドを発動。

光の輪が煌めき、対象範囲にあるものを捕えようとその身を縮めていった。

しかし、その輪はなにも捕まえない。

「は………?」

上がったのは砂だけ。
そこには飛びあがった砂だけだ宙にあった。

何が起きたと、当たりを見回しても何処にもいない。
もしかして足元にいるのか、と思っても、飛び上がった時に吹き飛ばされたであろう穴があいているだけだ。

「え……じゃあ、何処に!？」

焦ったように、思わず口に出してしまうミコト。

「ッ!? 姉ちゃん! 避ける!！」

同時にどうしようもない悪寒を悟ったカズトが叫びをあげる。
ミコトはそれに反応できない。
ただ木偶の坊のように空に立ちつくしてしまった。

「ぎゃあああー!?!?!?!」

轟音と共に、ミコトの体を衝撃が襲った。

あまりの衝撃に一瞬意識が薄れ、地面へと落ちていく。

「あぶねえ!！」

カズトはミコトを襲ったものの正体に気がつきつつも、ミコトを拾いに行く。

このまま地面に落ちればあの生き物のえさになることは請け合いだ。

しかし、相手もそれを分かっているのだろう。

ミコトを追うカズトへ、ミコトを攻撃した方法と同様の方法で落としにかかった。

「……このっ！」

ミコトやなのはほど防御が硬くないカズトが、不意打ちとはいえミコトを落としかけた攻撃を受けるわけにはいかない。身をひねってかわす。

眼前を通るモノは風を切り裂きながらカズトの頬一枚横をかすめていく。

瞬間的な世界の中でカズトはそれをよく見た。

それはこの場所にはいくらでもあるありふれたものだった。

すなわち 砂。

こともあろうにあの生き物は砂を固めた球体上の塊を飛ばしてきたのだ。

しかも、体を透明にして、だ。

最初の攻撃で仕留められないと悟ったあの生き物はカズト達を欺くために違う方法で攻撃することを選択したのだろう。

ミコトがバインドを張っていた時に上がった砂は、自分が砂を飛ばして爆発させたダミー。

それに戸惑った際に、砂の弾丸で落とす手はずだったのだろう。

明らかに理性のある生き物と戦い慣れた行動だな。おい。

畏にかけたうえでの不意打ち。

あれが本当にただの動物なのか怪しいくらいの戦い方だった。

カズトは避けるとすぐにミコトを拾い上げる。

さっと砂の弾丸が飛んできた方向を見ても、相手が透明になっているからか、見つけられない。

ある程度の方向はわかっても、完全に特定できるほどカズトは戦闘に優れているわけではないのだ。

「まじかよ……………」

両手がふさがった状態で、ランダムな軌道を描きながら飛び、考える。

ミコトは意識が朦朧としている。

自分は両手がふさがっている。

…………この状態でどうやって戦えと？

さらに言えば、敵は明らかに戦い慣れている上に自分たちよりも強力な攻撃方法を保有している。

姿は見えないし、遠距離攻撃も持っている。

さらにいえば、居合い拳も効かない。

あの鱗では刀で切りつけても効果は薄そうで、しかも相手は巨体ときている。

間違いなく今のカズトでは勝てない。

「…………無理、だな」

ミコトを地面に置けば、もしかしたらどうにかできるかもしれないが、今の状態でミコトを置いていったら、食われるだけだろう。

さすがにそんなことができるわけがない。

カズトはすぐさま、撤退することを決めた。

あれと今、命をかけて戦う必要性はない。

ならば、無駄な怪我を負う前にさっさと逃げる方がいいだろう。

水平に飛んで、狙い撃ちにされるもしもの可能性を潰すために、そこまで早くない飛行魔法に、自分の思考制御を全力で傾けてできる限りの速度で上空を目指す。

ある程度の高さまで来たら、ようやく水平に飛び砂漠を飛び、安全であろう場所を目指した。

……さすがに悔しさはある。

しかし、あれにはまだ早かった。

今日手に入れた経験値は多くないが、それでも数値にならない経験を詰んだ。

カズトは次に生かそうと決めて、腕の中でもぞもぞと動くミコトを起こそうと、声をかけるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572s/>

トランス・トラップ・トリッパーズ！改訂前

2011年9月22日15時54分発行